

神戶新聞揭載小説

特116

568



子 靜

(終 篇)

前野春亭画

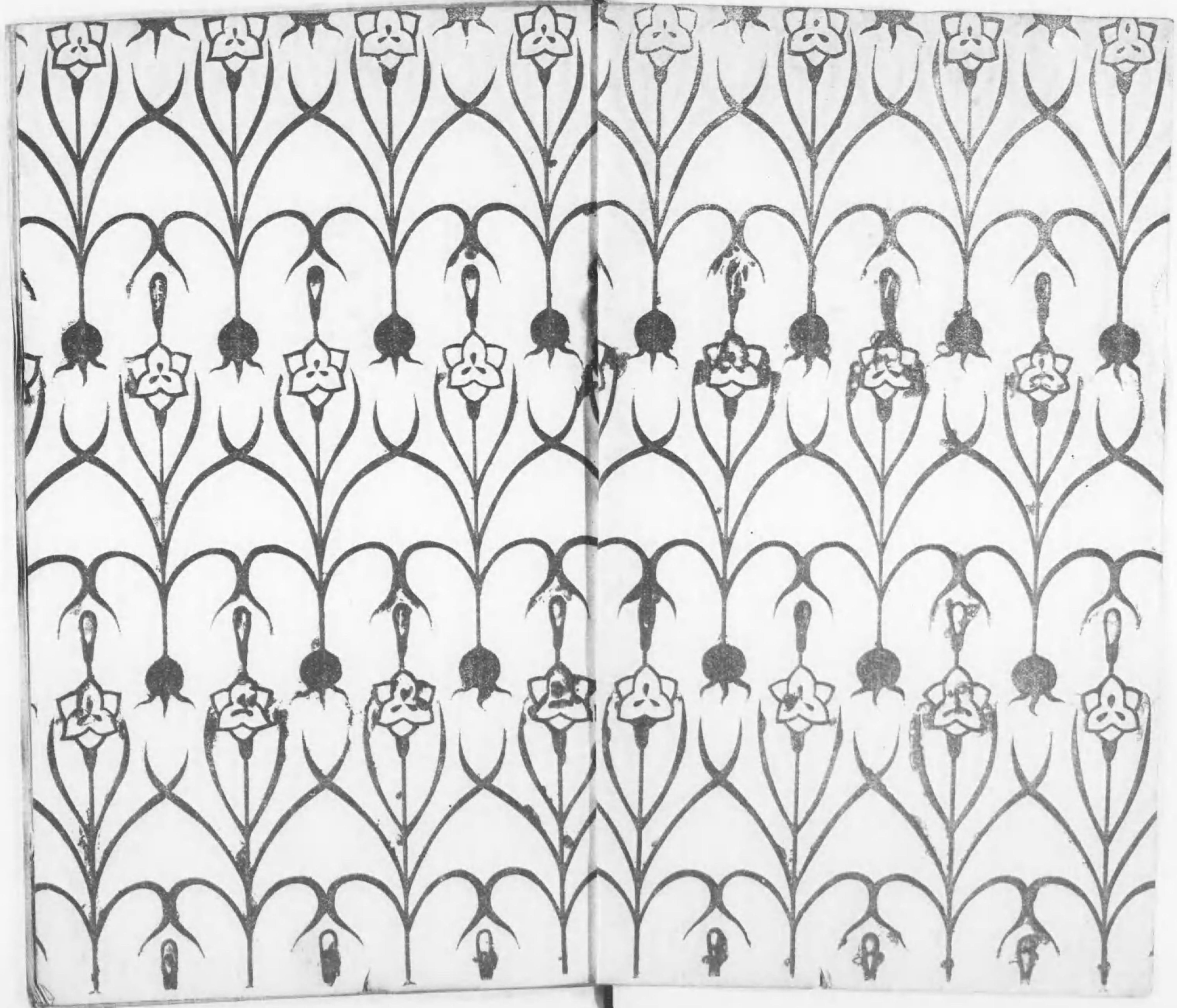
和田天華作



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





4冊 116
568



聞新戸神
説小載掲

和
田
天
華
作

前
野
春
亭
畫

静しづ

子こ

(終篇)

大正
1.12.26.
内交





◀ 次目説小刊新館文隆口樋 ▶

花冠者作 根本吐芳作 同人作 小嶋孤舟作 同人作 同人作 如鬼坊作 伊原青々園作 同人作 同人作 同人作 渡邊黙禪作 同人作 須藤南翠作 同人作 和田天華作

思三浪梅池乳鱗迷櫻風千磯新闇浪靜
 は人が 沼守 與 井流 の のま
 ぬのし 花鯉の ひ 里 主うく
 戀仇ら録助仙助子策薩眼風人、ら子

い白面極至もでん讀をれどは物版出の館文隆口樋





静しづ

子こ (終編)

和田天華

静

子

【 1 】

(一)

一雄は聞くに耐へない玉枝の悪罵を、甘んじて受けなければならぬ場合に立つて、今更丹羽の家を訪問したことを後悔せずにはゐられなかつた。

「貴女は然ういふ卑怯な行爲を以て、私一人を敵とせず、小金井一家を敵にするのですね宜ろしい、然らば私も立派に貴女の敵となつて、丹羽一家と戦ひませう、黄金の勢力が勝つか、人格の威力が不義を壓するか、勝利は最後の土俵です。」

「面白うムいますわねえ、飽くまでも遣つて御覽なすつたら宜いでせう、然し一雄さん誤解なすつては困りますよ、妾は貴郎を敵としますけれど、一面にはまだ静子さんとかいふ人も敵にするのですから、それに對する防戦の用意も必要ですわ。」

「ナニ、静子さんを敵に……、静子は死しました、此世の人ではありません。」
 一雄は斯う曰つて、追に俯首で悄然とした、玉枝は弾き返されたやうに。
 「なんですツて、静子さんが死ましたツて、此の世の人ではないツて、ソ、ソレは何だか理由です。」

「静子の死んだ理由を敵に洩らす必要はないです。」

一雄は儼然として言ひ放つた、玉枝の態度は俄に一變して何んともなく慌て出した様子である
 「何も理由ぐらゐる仰有つても宜いでせふ、戦ふべき敵が死んで了つたとすれば、復讐心も自ら消える譯なのであります。」

「私は何も静子が死んだからツて、それを以て貴女に敵意の撤回を求めめるものではありません。
 『それならば強ひて聞かうとは申しますまい、然し一雄さん、妾、何も好んで貴郎を敵にしたいのではないのよ、私は静子さんといふ敵の死んだ理由に依つては、貴郎から要求されなくツても、敵意を撤回するかも知れませんわ。』」

「然うですか、貴女が撤回されるのは貴女の自由です、兎に角僕は改めて防戦の準備をしなければなりませんから、お暇します。」

一雄は立ち上つて、丹羽の家を辭した、玉枝は初めの勢ひに似ず、モ少し一雄を引き止めて静子の消息その他のもも聞きたいやうな氣がしたが、今更それもできないので本意なさうに、孤影悄然として歸つて行く一雄の後姿を見送り、おのが部屋に歸ると共に、力なげにその場に座つて、ホツと吐息を吐いた。

「静子さんは何して死んだのだらう、静さんが死んだとすれば、一雄さんは事實上奥さんを亡くした譯になるのだ、イヤ戀人のない昔に返つて、更に奥さんを求めなければならぬのだ奥さんを新に迎へるとして誰がその候補者になるのだらう……。」

玉枝はフト這んなことを思つて、何とはなしに、今の自分の行爲を裏耻かしく思つた、そして大變早まつた仕打だと後悔した。

玉枝は口にくそ一雄を斷念したといふものゝ、深く敵意を挿んでゐるだけ、それだけ充分の未練があつた、玉枝の心の奥の琴線には初戀の一雄のことが深く深く絡つて、容易にそれを取り去ることができなかつたのだ、たゞ虚榮心と利かぬ氣と、女の誇りが人一倍強い女だけに失望を反抗に變へたまで、若し此心の琴線に絡つた初戀の印象に、一道の靈火を點すれば、玉枝の戀は再び焰々として燃え上らねばならぬ場合にあるのだ。

玉枝は古い記憶を呼び起して、昔懐しき冥想に耽つた、彼の戀は再び燃えんとしてゐるのであるまいか。

(11)

思ふがまゝの罵倒を、玉枝に浴せられて丹羽の家を出た一雄の姿は宛然喪家の狗とも見られる、顔には血の氣が失せて歩む足許も何んとなくタド／＼として、氣の故か肩までが窄んだやうに見える。

敵に屈服するのを潔しとしないで、騎虎の勢ひ、猛然として歸路に就いたものの、さて考へれば心細いとはかりでめる、丹羽の家を耻を忍んで泣き附きに行つたのは最後の手段である、之が纏らぬものをすれば小金井一家は退轉するより外に方法はない、胸に萬斛の苦痛を湛へて表に平和を装ふ父を思ひ、苦勞に窶れた病める母を思ふと、自分は什麼しても一身を犠牲にして丹羽に泣き附くより外に策がなかつたのだ、縦へごんなに玉枝に罵られやうと、それを忍んで頼むのが至當であつた、自分は短氣をした、と曰つても、今更追ひ附くことではない、家へ歸つて此善後の策を什麼講じたら宜いのだらうか、人間は七轉八起といふことがある、失敗は

人生の常だ、潔く男らしく敗者の面目を發揮して和歌山を去るべしだ、さうだ、唯、今は退轉あるのみだ、退轉！退轉！、然う極めやう、一家を擧げて大阪に移住する、それが宜い。

一雄は途々這んな風に頭を纏めて、重たい足を高い我が家に運んだ。

父の政則は早くも事の成らざるを悟つて別に驚いた様子も見えなかつた、一雄はすぐに父の居間に打ち通る、父は何か知らぬが、手文庫を掻い擴げて古い書類を引き出して見てゐたが、一雄の這入つて來る姿を認めて再びそれを文庫に收めて、隅の方へ片寄せた。

『お父さん！』

一雄は感慨に堪へない口物で、キツと父の面を見た、政則は平然としてゐる。

『お父さん、お任せを願つたのですけれど、事は破れました、到底圓滿に解決する見込みはありません、最早止むを得ませんから、退轉と決心しました、潔く和歌山の地を捨て、大阪へ移住する御決心を願ひたいのです。』

一雄の眼には血が漲つて、息さへ喘んでゐる、政則は懸髯をグイと握つて、一雄の面を打ち成りつゝ。

『然うか、それが宜からう、俺は初めからその目算ちや、人間到る所青山あり矣ちや、アハ、

「いよ／＼去ると決心した以上は、一刻も早い方が宜いです、それ／＼準備の都合もありますから、私は是から一寸ト走り大阪へ歸つて來ます、萬望暫くの御辛抱が願ひたいので……。」

「では然うしてくれ、俺一身の古い失敗が今に及んで再び燃え出して、お前達に累を及ぼすのが如何にも氣の毒ぢや、馬上に立つては百萬の敵軍も恐れんが、金力の殺到には敵することが出來ん、氣の毒ぢやのう。」

「何を仰有るのです、原因を糺せば僕が玉枝さんとの結婚を拒絶したから、こんな問題が起つたので、罪は僕にあるのです。」

「玉枝とお前との結婚談と、俺の借金は全く別問題だ、何の關係もないのぢや然し今そんなことを曰ふても愚痴ぢや。」

「では一寸、行つて來ます、次雄が若し歸つても何にも仰有らいなやうに願ひます。」

一雄は自分の部屋に退いて、仕度を整へ急いで、和歌山驛に車を飛ばした。

一雄が出てから間もなく、執達吏役場から使が來た、それは外でもない、差押解除の命令で

丹羽儀三郎から申請した假處分を、儀三郎自身が取消したのであつた。

政則は殆どその理由の判断に苦しむ。

一雄は丹羽の家を訪問したものに違ひない、而して差押に對する示談を試みたのだと思はれる、それが歸つて來て、到底平和の解決を見ることができぬと曰つて大阪へ行つたのに、すぐ後から差押解除が來たのは、如何にも訝しい、何か深い理由があるのではあるまいか、と、政則は不審に堪へなかつた。

一雄の歸りを待つてゐたが、その夜は歸らなかつた。

翌くる朝は日曜なので次雄が家にゐた政則は用事があつて外出した。

午前十時頃、玄關に來客がある、新米の下女が取次に出た、客は意外にも玉枝であつた、思ひ切つて盛装を凝らした姿は、見違へるばかりに艶麗で、田舎者の下女は天女の天降つたほごにと思つて、驚きの眼を睜りつゝ、慌てゝおなかの病室に這入つて、玉枝の口上を取次いた。

おなかは深い事情を知らぬが、兎に角一雄が玉枝を訪問したことも、また昨日差押の解除が丹羽の方から手續されたことも、政則から聞いて知つてゐたので、玉枝の來訪は之に關係したことであらうと察したので、病中だけれども、強つて逢はうといふ。

次雄を招んで玉枝を座敷に通さした、而して自分は床から出て逢はうと仕度しかけたが、玉枝は次雄からおなか病氣だと聞いて、起きて貰つては濟まぬ故、自分が病床に行つて逢ふと強つて次雄に案内させて、サツサと這入つて来た。

おなかは慌てたやうに居住居を直して大儀な軀を疊の上に出やうとした、玉枝はそれと遮つて。

「伯母さん、萬望をつまゝでゐらして下さい、お病氣といふことは、チツとも存じませんので……。」

かう曰つて、時候の挨拶やら、此中の無汰沙やらを、道に氣まり悪げに挨拶した、次雄は難かしい顔をして、サツサと出て行つて了ふ、玉枝は更に詞をついた。

「妙なことから、親類のやうにして来た仲に垣が出来て、伯母さん誠に申譯がムいませぬ、妾が悪かつたのですから、今日は御詫に上つたのよ、伯母さんが御病氣のことなんか、チツとも知らなかつたのですもの、どうぞ今までのことは皆水に流して下さいな、ねえ伯母さん。」

玉枝は甘へるやうな口吻で、懐しさうにおなかを見た、その人懐っこい、表情に巧みな態度には、おなかでなくとも魅されるのだ、況しておなか玉枝が好きなのだ、小金井一家で玉枝

の同情者と曰へばおなかはその第一人である、おなかは何れかして一雄と玉枝とを一緒にした希望を今も持つてゐるのである、だから去年の暮にソツと玉枝に智慧を貸して一雄の後も追はした譯なのだ、それが却つて破裂の原因になつて、兩家が仲違ひをしたのだから、おなか自身は玉枝に氣の毒だと思つてゐる、怨まれても仕方がないと思つてゐたのだ、たゞ此度の差押一件だけは、あまりの仕打と思はないでもなかつたが、それもすぐに先方から解いて、玉枝が自分で挨拶に來たと思へば怨む處もない、おなかは心から打ち解けて、玉枝の來てくれたのを此上なく嬉しく感じた。

「貴女に然う曰はれますと、妾の方が面目次第もないのです、玉枝さんには妾本統にお氣の毒だと思つてゐるのですから貴女の方でさへ然う思つて下されば、妾の方は御同様に何事も水に流して戴きたいので、固より願ふ所なのです。」

「伯母さんがお心持でゐらして下さると聞くと、妾本統に嬉しいのよ、ちやア伯母さん、萬望今までのことは皆水に流してねえ、よござんすか。」

「萬望、御同様にね、妾からも御願ひします。」

おなかは遂に玉枝の掌中に捉たれ、玉枝は初めからおなかを擒にするつもりで策略を施らして来たのである、玉枝最負で玉枝の好きなおなかは、玉枝が心あつて装ひを凝らして来た、その艶麗な姿を今更の如く物珍らしげに飽かず眺めて、さて口を切つた。

「斯うして御互ひに心が解けて了へば、什麼ぞ又元々通り、玉枝さんも始終遊びに来て下さいねえ、貴女がお正月からチツとも来て下さらないので、ごんなに寂しかったでせう、是からは玉枝さんが出入りして下さると、家が賑になつて、妾の病氣もちきに治りますわ。」

「エイ、是からまたチヨク／＼寄せて戴きますけれど……伯父さんや、一雄さんが何んと思召してゐらつしやるか、それが判りませんわねえ。」

「ナアニ伯父さんや、一雄の方は妾が宜いやうに取り做して置きますから安心してゐらつしやい、一雄も此頃ではねえ、大阪の方に勤めてゐますので……。」

「エーッ、では何んですか、大學病院の方は辭職なすつたの、まア然うでゐいますか、大阪は何方なの……。」

玉枝に斯う聞かれて、おなかは、ハツと思つた、外島の癩療養所に奉職するとも曰はれないので、一寸返答に迷つたが、去り氣ない體で。

「何んでも郡部の方の病院だといふとでまだ實はよく聞きもしないのです。」

「それで今日はお留守なの。」

「急に用があるツて、昨日歸りました、モウ一度此方へ來ます、程なう來るでせうよ。」

玉枝はギョツとした、一雄は昨日自分が罵つた詞に刺撃されて、何等かの方略を講じるために歸阪たのではないかと思ふと、今更おなかを手に收めた所で、覆水容易に盆に歸り難いと思ふ、で、試に鋒先を轉じて、まづ静子の消息にさぐりを入れて見る。

「それは然うとねえ伯母さん、一雄さんの好きな静子さんねえ。」

玉枝が口を切りかけると、おなかは不快さうに顔色をして。

「玉枝さん、静子なんていふ娘の話は止しにしませうよ。」

「イ、エ伯母さん、静子さんはねえ、死んだんですツて。」

「ナニ、静子が死んだ？、玉枝さん、本統？、貴女什麼して知つてゐらつしやるの、そして又什麼して静子が死んだんです？」

「アラ、伯母さんは御存じないの？、まア、妾もよく知らないのです、昨日一雄さんから聞いたんですよ。」

「エーッ、一雄が然う曰ひましたか、妾達にはまだそんなこと一ツも曰はないんですよ、まア本統に静子とか、死んだのなら、妾達は安心しますけれど……。」

「何故？、伯母さん！、静子さんが死んだら御安心なさるの……。」

「静子といふ女が、妾達母子の仲を悪くさせたのですもの、玉枝さんでも然うです、まア早く曰へば静子が死ばね、玉枝さんだつてまた妾達に免じて嫁て下さらないこともないだらうと思ひます、然し玉枝さんは兎てももう嫁ては下さらないわね。」

「アラ、伯母さん、そんな水臭いことはなくツてよ。」

玉枝は嬉しいのやら耻かしいのやら、道に俵な女も顔を赫めて俯首いた。

丁度その時一雄が歸つたらしい、次の室で次雄と何か話をする聲が聞えたので玉枝は今一雄と面を合してはバツが悪いと見て取つて、慌てたやうに暇を告げる、おなか、強ひて引き止めるのを、又の日と曰つて、バツと歸つて行つた。

入れ違ひに一雄は母の病室に這入つて來た。

(五)

「玉枝さんは何んの用があつて來たのですか、實に圖々しい女だ。」

一雄は稍々怒氣を含んで、詰り氣味に母の枕許に座つた、然うして斯う曰つた、母はその詞を答めるやうに。

「お前はまア何をいふのです、然ういふことをいふから丹羽一家から怨まれるのですよ、玉枝さんは今までのことを謝罪りに來たのです、オウさうく、昨日お前が出た後、すぐ差押を丹羽の方から取下げに來ました、そしてその後からア、して玉枝さんが挨拶に來たのです、何事も水に流して元々通り仲よくしやうツてね、それはモウ此方から願ふ所なのだから……況してお前がア、して去年の暮に玉枝さんをあんなに耻面搔したのだから、妾達はモウ玉枝さんに怨まれたつて仕方がないと思つてゐるんですよ、それに先方から挨拶に來られて、そのまゝ黙つてゐる理由には行きません、此方からも誰か挨拶に行かなければなりませんよ。」

「エーッ、あんなに辱められた丹羽の家へ挨拶に行くんですか。」

「まさかお父さんとも曰へまいから、お前に行つて貰ひたいと思ふのです。」

「……………」

一雄は黙つて俯首れた、おなかはその氣色を見て取つて。

「お前行くのは否なのかい？」

「ハイ………什麼も僕は………」

「行つてくれないのですね、お前は妾達が斯うまで苦勞をしてゐても、まだ自分の意地を立て通すつもりなのですか、それならそれでよろしい、お前は親がのたれ死に死んでも自分の意地さへ立てばそれで宜いんでせう、それならそれで宜ござんす、妾達も覺悟をしますから………」

一雄はほと／＼當惑した、母は昨日自分が丹羽の家へ行つて、あれほど玉枝に辱められたことを知らないのだ、それを曰へば自分にも少しは同情を寄せてくれるだらうが………そんなことを曰つて病中の母にまた心配をさせたくはない、然う思つて一雄は何事も母に告げなかつた、今更斯う／＼だとは尙以て曰へぬ、況して母は病氣のため疔が高くなつて、何んでもひがんで聞く、滅多に抗へば病氣にも障らう、それを思ふと、一雄は自分の意地を主張することはできぬ、彼は煩悶懊惱した、母はそんな事情を知らないのはいよく／＼疔を強め。

「一雄！、什麼おしなの、愈々行つてくれないのですか。」

一雄は力ない聲で。

「ハイ、イエ、アノ參ります！」

「エ、お行きなのかい、行つてくれるのだね、それで妾も安心しました、それでね、妾一つお前に聞きたいことがあるんです、隠さずに曰つて下さいよ。」

母は疊かけて何か又聞かうとする、一雄は何かは知らず胸を躍らした。

「外でもないんですがね、お前が喧しく曰つてゐた静子といふ女ね、彼れは死んだんだつて曰ふちやアありませんか、本統ですか、隠しちやアいけませんよ。」

一雄は刎ね返されたやうに吃驚した、同時に玉枝が之を洩らしたといふことが、電光の如く頭裡に閃いた。

「貴母、ド、什麼してそれを御存じなのです、エッ、おッ母さん。」

「什麼してツて、妾玉枝さんから聞きましたよ、お前自分で然うお曰ひだといふから本統でせうね。」

「事實です、可憐なる静子は死ました、然かも天命ではありません、彼れは非業に死んだのです、ハイ隅田の川の藻屑と消えました。」

一雄は観念したやうに、ハッキリと斯う曰つて、長歎瞑目する。
裏の林がザワついて梧桐の葉が二片三片バサ／＼と音して地に落ちた。

(六)

おなかは床の上に膝を乗り出して、俛首れてゐる一雄の面を覗き込みながら。

「今のお前の詞によると、静子は非業に死んだとお曰ひだつたねえ、非業に死んだとは什麼いふ理由なのです！」

了得に斯う聞いては、おなかも事の意外なのに驚かれずにはゐられぬと見え、心配さうにその仔細を訊ねた。

一雄の面は見る／＼曇つて、目には何時か露が宿つてゐる、彼は病める母の前に、弱い氣を見せまい、男らしくもない態度を見せまいと、齒を喰ひ縛つて切なる胸を押へた、が、然し、斯ういふ場合になると、更に／＼深く／＼静子の上を思はずにはゐられなかつた。

母はもごかしさうに、一雄の返答を催促するのである、一雄は思ひ切たやうに。

「静子が隅田の底の藻屑と消えたのは、別に仔細のあることではありません、只その不幸な運

命を悲んで、生き詮のない身を捨てたのです、思へば不慮な女でした、幸薄き薄命な人でした。」

「そんなら例の病氣を苦しめて、身を投げたといふのですね。」

「それにはいろ／＼深い事情もあります、今私の口から委しく曰ふには忍びませんが、たゞ静子が死んだのは、その罪私にあるといふだけのことを申し上げて置きます。」

「エーッ、静子が死んだのは、お前の罪ですッて、ちやア何か關係でもあつたのかい。」

「おッ母さん、貴母は怪しからんことを仰有いますな、私がそんな不埒な人間であるか什麼か御自分で二十幾年お育てになつてお判りにならない筈はないでせう、實に情ない仰有りやうです。」

「ソリヤモウ、お前に限つてそんなことがあるとは思ひませんけれど、何といつても水の出際の若い者同士、ヒヨットまた魔が魅してごんな間違がなかつたとも限らないから、案じて聞いたまでのことです……然し然う聞くと静子も可愛さうなことをしましたね。」

「實に可愛相な女です、静子の運命は世の中に迫害されるやうに定められて生れて來たのです。」

「然し一雄！、成るほどそんな最後を遂げたとすれば、氣の毒でもあり又可愛さうにも思ふが死んで了つたものが今更ら生きて歸る理由でもなし、そんなことを何時までもクヨクヨ思つてゐた處で仕方のない話でせう、夫よりは佛のために訪ひ弔ひを缺さずしてやる方がどのくらゐ功德になるか知れやアしませんよ。」

「それは無論です、然し僕は別に思ふ仔細もありませんので、一生を獨身で暮すつもりです、そして學問のために一身を犠牲に供しやうと決心してゐるのです。」

「何ですって、一生獨身？、家内を持たない、まアお前は何といふ不心得なことをいふのですか、お前が一人前の人間になつてもまだ嫁を貰はずに、一生ノラクラされてゐて、何時妾達が樂になると思ひます、お前は一體親や兄弟のことならどうなつても宜いと曰ふのですか。」

「……飛んでもない、什麼してそんなことがあるものですか、無論御二方に對して奉養の義務は盡します、奉養の義務と無妻主義とは問題が別です。」

「イ、エ、そんな理由には行きません、妾達も世間様に對して、一人前になつてゐるお前に嫁も迎つてやらないと曰はれては親の顔が潰れます、幸ひア、して玉枝さんも元々通り仲善くしたいといつて來られるし、今までのとどつて別に兩方とも悪い氣があつた譯ではなく、たゞ一

時の行きがよりで仲違へをしたとですから、一層話を元へ返して玉枝さんをお貰ひなさい、然うすれば雨降つて却つて地が固まる道理、何事も圓く納つてお父さんも御安心です。」

おなかは尙も詞をつつけて一雄を説き伏せやうとした處へ、父の政則が用事を済して歸宅し襖を開けて其處へ這入つて來たので、一寸話の腰を折つた。

(七)

政則は自分の不在中に玉枝が謝罪りに來たこと、それから一雄が歸宅して静子の死んだ話をしたこと、ついで玉枝の結婚談になつたことまで委しくおなかより聞き取つた、そしておなかは、最初の約束通り、静子が死んだ以上は、自然一雄のいふ三年間の結婚猶豫も消滅するにだし、また血液の試験をする必要もないのだから、玉枝を嫁にする主張したのである。

政則はおなかの曰ふ所を逐一聞いて、更にまた一雄の主張をも聞いた、然し彼は黙して何事も語らぬ、腕を拱いて深い思案に耽ける様子である。

おなかは耐りかねて、政則の意見を促した。

「貴夫、何とか仰有つて下さいませんか玉枝さんの方だつて、一旦あゝいふ行きさになつたの

ですから、屹度承知をしてくれるか什麼かがまだ判らないんですが、もともと事の行違ひですから、妾でも行つてよくお話をすれば、丹羽の方だつて別に隔てはあるまいと思ひます、ねえ貴夫、什麼でムいませう。』

政則は始めて口を開いた。

「俺も一雄がいふ無妻主義などは不賛成ぢや、両親が附いてゐて、嫁も迎へてやらぬとあつては、世間が承知せぬ、静子の死んだのは可愛相ぢやが、然し俺は小金井一家に取つて静子の死んだことを幸福に思ふ、之を機會に早速他から嫁を迎へねばならん……。』

「それ御覽なさい、お父さんだつてあゝいつてゐらッしやるでせう、ですからモウ玉枝さんを貰ふことにお決めなさいお前がさうしておくれでしたら、妾達は全く肩の重荷を下すのですから……。』

おなかは得意になつてどうでも一雄を屈服させやうとする、政則は何故かそれを遮つて。

「なか！、待ちなさい、俺は一雄に嫁を取れとはいふが、丹羽の玉枝を貰ひたいとは曰はないぞ。』

「も二もなく賛成することゝ豫期してゐたおなかは、政則が意外の詞に吃驚した、一雄も比

しく驚いたやうに父の面を熟視する、政則は更に詞を續け。

「イヤ別に驚くことはない、小金井と丹羽とがかういふ風に仲違ひをせなんだ時なら、俺も玉枝を貰ふことに異議はないのぢや、けれども、彼女憎い奴ぢや、自分の思ふことが遂げられない腹癢に、舊債をホジリ出して俺は固より一雄まで苦しめ居つた、然ういふ女を一雄の嫁にはされん。』

「ですけれども、それはモウ取り下げて了つたぢやアムいませんか、而して自分で悪かつたと謝罪りにまで來てゐるのである、妾は玉枝さんが一雄を怨むのも無理はないと思ひますよ、玉枝さんの心持も少しは察してやらなければなりません、彼のことだからつて元を糺せばあんまり此方が投げ遣りにしてゐたからです、丁度今日玉枝さんが來たのを幸ひ、これを切ツかけに兩方が元々の仲になれば之に上越すことはないぢやアムいませんか

「イヤ俺は什麼も承知ができません、第一差押をされて苦しくなつたために、到頭玉枝を息子の嫁に貰つたと世間から曰はれて見、俺の名譽が汚れる、金ゆゑ意地を折つたといはれては、俺の男が立たぬのぢや。』

「それは貴夫の僻見でムいます、妾は玉枝さんを貰つてこそ、世間さまにお顔が立つのだと存

じますわ、一雄と玉枝さんとは何れ夫婦になるものと、世間の人は承知してゐるので、
 よ、それが彼れ以來ア、して仲違ひをしてゐたのでは餘計世間の物笑ひになります、
 貴夫からそんな判らないことを仰有るから一雄が自分勝手なことをいふのです。』
 『ナニ俺が判らんことをいふ！、貴様は怪しからん奴ぢや、什麼して判らんぢや。』
 『判らないぢやアムいませんか、自分の方のことは棚に上げて、丹羽の方ばかり怨んでゐるの
 ですもの。』
 『誰が丹羽を怨んだか、怨むのではないぞ、俺は男の意地をいふのぢや。』
 『そんな意地を張つて、それが何んの役に立ちます？……。』

おなかは眼の色を代へて政則に食つてかゝらうとする、彼は興奮してやゝ常識を失つてゐた
 政則も老いたれど軍人氣質の、たゞ一徹におなかの病氣など忘れた如く飽くまでも意地を張ら
 うとする、一雄は自分のことでもかゝるまで両親の感情を衝突させ、父と母とに苦勞をかけると思
 ふと、耐へられないほど苦痛を感じる、どうせ自分は何かの犠牲に供される體だ、自分が玉枝
 と結婚することだに承諾すれば父として強ひて意地を張らうともいふまい、母は無論喜ぶに違ひ
 ない、と咄嗟に思案を定めて。

「お父さん暫らくお待ち下さい、僕は玉枝さんと結婚します。」

「エーッ。」

父も母も一様に驚いて、呆氣に取られた體であつた。

(八)

おなかはやがて、床の上に一膝乗り出して、氣もそゝろに。

「一雄！、お前ソリヤア本統だねえ、本統に玉枝さんを貰つて上げるんだね、まアよくその氣
 におなりでした、それで妾も本統に安心しましたよ、貴夫！、一雄は本統に玉枝さんを貰ふと
 曰ふてゐます。」

政則はおなかの詞に耳も藉さず、俯首れてゐた一雄に打ち向ひ。

「婚姻は人生の大事ぢや、一雄！、本統に玉枝と結婚するのぢやな。」

「ハイ、本統です、苟くも一生苦樂を共にすべき妻を選むのですもの、冗談にそんなことがい
 はれるものではありません、種々と熟考の末、お母アさまの意に従ふことに決心したのです。」
 「確と左様ぢやのう。」

「ハイ……。」

「本人に異議がなく、玉枝を貰ふといふなら、最初からの話もあること故、今までの悪感情、水に流して、然うするも宜からう、俺が今まで反對したのはたゞ行がりの上からちや、たゞあまりに意氣地のないことと思ふからちや、今度の一件さへなければ固より喜んで迎へる筈ぢやツたのだ、然し此方が然うはいふものゝ、先方が什麼いふ氣でゐるか、判らんちやアないか。」

「いゝえ、先方はモウ大丈夫でムいますよ、それは妾が御受合申します、何れ少しでも快くなり次第、妾が丹羽へ行つて確と話を取り極めて參ることに致しませう。」

「おなかはたゞイン、〜として、自分の病氣も忘れたやう、政則も重ねては曰はなかつた、一雄も無言のまゝ。」

x x x x x x x x x x x x x x x

やがて一雄は己が部屋に歸つた、大阪に両親を引き取つて暢氣な生活を送るべく、借りる家の準備まで整へて來たのだが、歸つて見ると、事の意外の邊に進捗して、自分は到頭憎むべき敵と手を握ることゝなつたのだ、一雄は天を仰いで長大息した。

「昨日の玉枝の悪罵を思ひ出すと、身内の慄ふのさへ覺えて、殘念で耐らぬ、玉枝にしてからが、彼れほど自分を罵つて敵にして置きながら、自分の留守に母を擧にして掌を返すやうなことをいふ、實に恐るべき權變に富んだ女だ、擒縦自在とはこんなのをいふのだらう、自分は自分の趣味、性格に反對した這んな女を母のために妻にしなければならぬことになつたのだ、勿ね附けるのは易い話だけれども、此上父を苦しめ、母に心配をかけるには忍びぬ、ナアニ妻にするといつた處で、それは形式だ、斷じて玉枝に對して愛の起らう筈はない、愛のない結婚は到底圓滿な家庭を作ることではできぬ、さうなれば玉枝は小金井の家を去るに決つてゐる、之も一種の復讐だ、愛のない冷たい結婚、然うだこれで玉枝に復讐して遣らう、玉枝の求むるものは愛だ、彼は愛のない結婚に耐へ得る女ではない、それがせめてもの慰めだ。」

x x x x x x x x x x x x x x x

おなかの病氣は次第に快方に向つて行く、玉枝はそれ以來また毎日のやうに見舞に來てゐた。そしておなかの歡心を買ふことに勉めてゐた、イヤおなかばかりではない、政則のことなども實々しげに世話をしてゐた、その中におなかから一雄が結婚を承諾したと聞いて、いよゝゝ

戀の勝利を喜ばずにゐられなかつた。
おなかは病氣が全快次第正式に儀三郎と逢つて結婚の申込をするといふ、それに就いては玉枝とも打ち合せをして置いた、今の玉枝はたゞ一雄と親しく物語らないことを物足りなく感じてるのであつた。

(九)

小金井學士の後を追ふて大學病院を去り一旦河内に歸つた久保田學士は、今年の春大阪に出て開業した。

玉造に一戸を借りて「久保田醫院」の看板を擧げたものゝ、新開業では却々固定した患者がないので、收支が容易に償はない、其處で午前中は大阪生命保險會社の保險醫に雇はれ、朝の診察を終つてから二時間ほど、隔日に保險會社へ通勤して收入の一部を補つてゐた、獨身のことはあり、萬事に不自由を感じるので、郷里から母を引き取つて家政のことを賄つて貰ひ、車夫一人と看護婦と下女とを置いて小やかに暮らしてゐた。

小金井は什麼したらう、憐むべき静子の最後は……なぞ、時に觸れ物に感じて思ひ出さぬこ

とはない、友情に厚い久保田はモ一度一雄と肘を執つて過去を語りたと思ふ、ツイ目の前に一雄がゐることを知らないのだ。

秋も過ぎ、冬も暮れて新しい年を迎へた、道頓堀の五座は櫓を並べて春芝居の蓋を開けるとり／＼に人氣を呼んで盛況を極むる中に、取分け、辨天座の東京女優大會が滿都の評判に上り、日々大入滿員の割るゝやうな入を占めてゐる。

久保田學士は芝居なぞにあまり趣味を持つて居らぬが、郷里から來てゐる母が新聞の評判なぞを見て見物したいといふので、家を看護婦に任せ、下女を連れて見物に出かけた。

學士が入場つた時には前狂言が濟んで之から呼物の「安宅關」が開幕うといふ處だ、座頭の岩井七五三が故團十郎の型で、辨慶を演る、花道の引込み六法が素敵に宜いといふ評判だ、それに松本錦昇の富樫が先代左團次そのまゝだとして、好古家が切りに隨喜湯仰する。

やがて幕が開いた、見物は鳴りを靜めて舞臺に身を入れる、久保田學士の母は丁度宜い所へ來たと下女を相手に、ホク／＼してゐる、學士はつまらなうな顔をして、舞臺は其方脱けにたい小屋の中を彼方此方と見廻し、棚の上の煙瓶と首ツ引きで、グビ／＼と好きな酒を飲んでゐる、やがて眠氣が魅したと見えて、背後の戸に凭れて居睡を始めた。

ツケを打つ音に眼が覺めて、何んの氣なく舞臺を見た、辨慶が金剛杖で義經を毆つてゐる、何んだか知らぬが、大向から『成田屋ッ』と頓狂な聲が出て、バチバチと急霰のやうな拍手が湧く、隣の棧敷には二三人の藝妓が陣取つてゐたが。

「宜えわ、惜しいことに辨慶の寸が足らんし、女はんやよつてしやうがおまへんなア。」
一人がいふ、すると年増の一人が。

「義經に扮つてる役者は何といふ人や、ナニ、岩井七五三花！、七五三八ッあんの弟子やなアえらい宜いし、顔も奇麗な宜え顔やが、痛々しう見えて宜ろしいがな。」

「ほんまに然うやなア。」

とまた一人が調子を合す、學士は喋々と喋舌る藝妓の品定に、好奇心を唆られて再び舞臺に目を移した、そして義經に扮した役者を見た時、思はず不審の眉を顰めた。

「舞臺顔で判らないけれども、實によく似てゐる、瓜二ツだ、什麼も可笑しい、ハテな。」
獨語のやうにいふのを、母が聞き答めて。

「何です、大層不思議がつてゐるぢやアありませんか。」

(十)

久保田學士は母に聞き答められたのを幸ひ、自分の迷つてゐる判断を確めて貰はうと。

「おッ母さん！貴母、義經に扮つてゐる役者を見たことがあるやうに思ひませんか。」

母は實にかう曰はれて、改めて又義經の舞臺顔を噴つた。

「什麼も妾には判らないよ、何んだい、誰か知つたお人でやもあるの……。」

「貴母山田の静子さん御存じでせう。」

「山田の静子ッて、アノ悪い病氣のあるあの女かい。」

「エイ、僕は什麼もアノ義經が静子によう似てゐると思ふんですが、おッ母さんには判りませんか。」

んか。」

「妾には判らないよ、静子さんッていふ娘は十四五の時に見た限りで、よく顔も覺えてゐない位だからねえ。」

「然うですか……。」

學士は再び母には聞かなかつたが、見れば見るほど、義經が静子に酷肖してゐる、什麼も不

思議だ、他人の空背といふことはあるが、これほど似るものではない、然し静子は死んだ筈だ
死んだものが生きてゐる理由はない、けれども我々は静子の死を突き止めた譯ではないのだ、
若し什麼かして助けられたのではあるまいか、それにしてもアノ内氣な女が、女優になるとい
ふやうな譯もなし、あまりに變化が甚だしい、と、學士は種々に思ひ惑つた。
その中に幕が閉つて辨慶が幕外で六法を踏んで向ふ揚幕へ消えた、棧敷も土間も一時にワツ
と喧しくなつて、お茶子が右往左往する、見物が右に左に駆け違ふ、學士も母を對手に今の出
來榮などを批評した。

閉場を待つと遅くなるといふので、二番目の『白石噺』を上だけ見て、學士は母を促し辨天
座を出た、玉造へ歸る車の上でも思ひは義経役者の上にのみに馳せてゐた。

用事にかまけて数日の間、久保田學士は義経役者のことを忘れてゐた、朝の診察を了つて己
が部屋で茶を入れながら見るとはなしに今朝の新聞を披けて七面の標題を眺めてゐると『新劇
壇の新女優』といふ二號一本標題の記事が目についた、小標題に『辨天座出勤の岩井七五三花』
とある、學士は何んとなく胸の轟くを覺えて、手早くそれを讀み下した。

記事は冒頭に辨天座の女優大會が盛況であること、岩井七五三八の『安宅の辨慶』が故團十
郎を髣髴させることなど簡単に記した後、此女優大會には新時代の新女優とも見るべき一明星
があるとして前置して、中幕に義経を扮する岩井七五三花の出身や素性が記されてあつた、そして記
事の中には義経に扮した七五三花の寫真まで載せられてある。

學士はその記事を読み終つて、我知らずハタと小膝を打ち。

『やつぱり然うだ、静子さんだ、然し此記事に依ると、東京の某慈善學校の教師からすぐに女
優になつたやうに書いてある、その間の消息が少しも判らない、而して投宿してゐる宿も判ら
ないのだ、然し静さんと判つた以上は此まゝに捨て置かれぬ、什麼しても一度逢つてその
間の事情を聞かねばならない、自分も静さんには懺悔をしなければならぬことがあるのだ。』
久保田は然う思つてすぐに車夫を呼んだ、然して辨天座について七五三花の旅宿を問ひ合せ
て來いと命じた。

車夫は怪訝な顔をして出て行つた。

辨天座に出勤して『宅安關』の義經と『吉原揚屋』の信夫に初し、満都の好評を受けてゐる岩井七五三花は、師匠の附人として七五三八と一緒に、日本橋の濱澤屋に投宿してゐた、師匠の七五三八は名代の氣難し屋で、あれほどの名優でありながら、まだ推服する弟子が一人もない、適々その門から將來のある女優を出しても一人前になると、すぐ離反して七五三八の門を去つて了ふ、従つて個人としても師匠としてもその仲間ではあまり評判がよくなかつた。

七五三花は去年の秋から、七五三八の許に弟子入をして初めて女優になつたまだ駈出しの役者である、舞臺でこそ義經や信夫のやうな大役を勤めてゐるが、舞臺を退いてからは、全く七五三八の女給仕に過ぎないといふし、がなき境遇である、従つて宿屋の出入なぞ一々師匠の許して受けなければ勝手に自分の體を處理するのできない窮屈な身の上であつた。

二十日立の芝居がモウ一週間ほど大入を通してゐる、勿論七五三八の辨慶と宮城野とが呼物になつてゐることは争へないが、然し一般の素人向には七五三花の義經と信夫とが一は上品一は可憐だといつて満都の人氣を呼んでゐるのである、自然男の客なぞが、閉場つての後に座敷をかけるものも少くない、然し七五三花は何故か夫を斷つてまだ一度も行つたことはない。

氣難屋の師匠も今度は歩を持つてゐる、こではあり、此人氣が興行中繼續すると否とは懐

合に大分關係があるので例時とは違つて七五三花を大事にしてゐる、今此優に駄々を捏ねられ

たら芝居は滅茶々々だ。
八日も晝の中から大入満員の中に八時頃中幕が済んだ、七五三花は舞臺からすぐ風呂に入つて、襟のかゝつた御召の平生着に浴衣を襲ねた樂屋着に着換へ、部屋に這入つて鏡臺の前に座ると、一通の手紙が白粉箱の下に置かれてゐる、不審に思つて何心なく手に取つて見ると、表面には『日本橋北詰東へ入る旅館濱澤屋方岩井七五三花さま』と筆蹟鮮かに認められて、確に自分の處へ届いたものに違ひない、裏面を回して見るとたゞ『正月八日』と日附があるばかり。

七五三花は封を切らうか什麼かと迷つてゐる處へ、濱澤屋の女中が這入つて來た。

『七五三花さん、今ね、その御手紙を車夫が宿の方へ持つて參りました、是非御返事をツて待つてゐるのですよ、芝居の方へ御持ちなさいと申しましたら、是非取次いでくれツて強つての御頼みでしたから持つて參りましたのよ、御覽なすツて。』

『イ、エ、まだ拜見しません、何處から來たのでせう。』

斯う曰ひながら思ひ切つて封を切り、書狀を抜き出して讀み下した七五三花は、痛く驚いた

様子であつたが、去り氣ない體に裝つて。

「誠に濟みませんが、承知致しましたと返事をして下さいな。」

「それだけで宜いのですか。」

「エ、それで判ります。」

「ちやア然う申しませう。」

女中は別に氣にも止めず、そのまゝ樂屋を出て歸つて行く。

七五三花はモ一度手紙を繰り返して讀んで見た、正しく久保田學士の筆蹟に相違ない。

(十二)

……死に赴き給ひし静子嬢が、再生して激變せる境遇にあらんとは、何人も思ひ設けざる所に之あるべく候。小生は御身の舞臺を一見して然らざるかを疑ひ、あらゆる方法を竭くしていよく夫に相違なきを確め候。お身生存せる以上は、いろ／＼積る御物語致したく、殊に小金井學士の消息を知るべく御協議申上たき儀も有之、今夕御手隙次第左記の處まで御出で被下度、委細は御面もじの上にて萬々申述べ度、否や使

のものまで御返事煩し度候 早々

八日夜

静子さま

御もとへ

離波春琴亭にて

久保田 實

之が七五三花の許へ届いた手紙の文言であつた、差出人は醫學士久保田實、七五三花は山田静子であらぬばならぬ。

十時半頃に芝居が閉場つた、七五三花は師匠の入浴から、着換まで世話をして俾で濱澤屋へ送り返した後で、ソツと妹弟子に頼んで、地味な着物を取り寄せてそれと着代へ、濱澤屋へは歸らず、そのまゝ春琴亭へと赴いた。

久保田學士は待ちかねてゐた、七五三花は仲居に案内されて、學士の座敷に打ち通る、敷居際に手を突いて、仰いで學士の面を見た時、静子の七五三花は胸が一杯になつて、思はず聲を飲んだ、仲居が立ち去るのを待ちかねたやうに、我を忘れて學士の傍に駆け寄り。

「先生！、久保田先生！、面目次第もムいません。」

静子は張り詰めた氣が弛んだか、大島の羽織の袖を顔に當て、耐へ得ぬやうに俯伏した、學士は同情深い眼を静子の上に投げて。

「静さん！、まア何かからお話をして宜いのか判らんくらゐです、兎に角寒い、冷えますよ、火鉢の傍にお寄りなさい、今何か暖いものを命じましたから、その中に持つて來ます、仲居でも這入つて來てその容子を見ると五月蠅いです。」

静子もなるほどと思つて、涙を納め、氣づくなささうに手を火鉢に翳した、學士は無言で巻煙草に火を附けたが、胸の中で話の順序を鹽梅するものゝ如く。

「静子さん、貴女變りましたなア、非常な變化ですなア、然し生きてゐて下すつたので、僕は小金井に一分の面目が立つといふものです、それにしても一足飛びに女優……、驚くべき變化ですな、まづあれ以來今日までの経過を聞かして下さい、僕の方にも一夜で語り盡せぬ複雑な経過があるんです、エ、静さん、什麼か聞かして下さいな。」

静子は自分の耻づべき経過を語ることを好まなかつた、たゞモジ／＼して。

「先生！、妾の経過は山田静子の墮落史です、精神は墮落しないでも形は既に墮落してゐるんです、お願ひですから妾の経過を御聞き下さる前に、貴郎方の消息をお聞かせなすつて下さ

い。

「宜ろしい、ちやア私から御話し致しませう、多少話が前後するかも知れませんが、要するにアノ時貴女の出された遺書、アノ手紙がその夜一雄君の手に落ちて披見されたのです、小金井はそれを半讀んで卒倒しました、僕は驚いて駆け付け、介抱して共に全文を讀むと、自殺身投！、二人は驚いたです、途方に暮れました、僕はとも角もその筋へ保護願を出して、それか、心當りを探さうと曰つたんです、然しそれは小金井に止められて中止しました、そして手を束ねて貴女の死を待つてゐたのです、けれども貴女をしてかういふ覺悟を極めさせるに至つた責任は全部僕にあるのです、僕は小金井を前に置いて過去を懺悔しました、此懺悔は改めて今貴女にもお話しなければなりません。」

久保田はかう曰つて、傍にあつた茶で咽喉を潤した。

静子の七五三花は、膝を揉り寄せて耳を聳てる。

(十三)

一杯の茶に咽喉を濕した久保田は、更に詞を續けて。

「静さん、驚いてはいけません、頭腦を冷靜にして平氣で聞いて下さいよ、宜ごさんすか、僕は決して静さんの信する如く、貴女の味方ではなかつたのです、寧ろ貴女の敵でした……。」

「エイッ、貴郎が妾の敵……。」

「さア頭腦を冷靜にして下さいといふのは是處のことです、僕の話を最後まで聞いて下さらないと事情は判りません、此期に及んで僕はモウ遠慮も何にもしませんぞ、言ひ難いことも何も曰つて了ひます、静さん！、僕は夙くから貴女の血統の事を知つてゐたのです、それがために僕は貴女のため、小金井のため善意の敵になつたのです。」

「エーッ、先生が妾の……アノ血統を……。」

静子は思はず後さまに仰反つて、危く卒倒しやうとした、實は慌てゝ席を起つて辛くそれを抱き止めた。

「静さん、確乎して下さい、貴女が然う氣が弱くツては話はできませんぞ。」

「先生！、キ、氣を確乎に、エイ確乎にしますから、ド、什麼ぞその先を、オ、仰有つて下さい、モウ大丈夫です、お放しなすつて……。」

「宜ごさんすか、大丈夫なら話しますが……あまり神経を刺撃するやうならまたのことにはしま

す。」

「ド、萬望さう仰有らないで、聞かして下さい、それで一雄さんは、ド、何處にお出でなさるのです。」

「小金井君ですか……小金井の在家は判りませんが、飄然去つて行く處を知らないのです。」

「アノ、そんなら先生は……一雄さんは貴郎と御一緒ぢやアないのでございますか。」

「然うです、貴女が遺書を殘して出られた大破綻以來、僕と小金井君とは袂を分たねばならぬとになつたのです、夫れ以來小金井學士は杳として判りません、それを曰ふには話を順序立てねばならない、暫く僕の曰ふ所を黙つて聞いて下さい。」

久保田は撫然として聲を曇らせた、静子は息を喘ませて、實の詞を一語たりとも聞き洩すまじと膝を摺り寄せる。

「僕は貴女と小金井とが戀に陥ちたことを知つた時に、非常な罪惡を作つたやうに思つたのです、僕は小金井なり貴女なりの媒介者です、小金井を紹介したものは久保田、静子さんを照會したものは實であつたのです、僕は此戀の圓滿に遂げられないことを望みました、何故？と聞いては困りますぞ、此戀が圓滿に遂げられることは、即ち小金井の不幸で、また静さんの堅固

な道心を破壊し、平凡な痴男痴女に終らせ、而して累を子々孫々に及ぼすことを恐れれたからで
す、僕は窃にあらゆる手段を以て、此戀の成らぬやうに企てました。」

久保田は感情が激したやうに、幾度か目を瞬たいて聲を飲んだ、静子は石像の如く俯首いた
まゝ身動きもしない、久保田はその以前仲居が運んで来た、料理を前にしたまゝ、自分で冷え
た銚子を酌して、グツと煽り勢を附けてまた詞を續ける。

「静子さん！、能く聞いて下さい、誤解をしてはいけませんよ、僕は決して心から貴女の敵で
もない、また小金井の仇でもないのです、小金井は相許した刎頭の友、静さんは同郷の淑徳高
い處女です、僕は二人を見るに決して甲乙はありません、それですから二人の高潔な心事を傷
けたくない、一時の樂みが後で長い苦痛になることを悲んだのです、僕は二人が似合ひの夫婦
申分のない好一對の伉儷であることを認めながら、友人として之を妨げなければならぬかと思
ふと斷腸の思に耐へなかつたのです、その當時の苦しさを、静さん！、萬望察して下さい、僕
は心を鬼にして二人の戀を割かうとしました。」

(十四)

久保田の眼は愈々熱情に燃えて、激した感情は増々煽り立てられた。

「然し僕がかく苦心するのは反對に、小金井は愈々増々熱心の度を高め、貴女の血統をそれ
と知つて尙頑として動きませんでした、静子さん！、貴女は此點に就いて深く小金井君に感謝
しなければなりません、僕をして曰はしむれば、二人の戀は精神上において立派に遂げられ
たものです、小金井は實に愛情に深かつた男です、彼の戀は決して浮華輕佻なものではなかつ
たのです、小金井が醫學者でなかつたならば無論僕の妨害運動は功を奏した筈です、幸か不幸
か彼は醫學を學び、癩病に對して新しい學説を持つてゐました、必らず治るもの、又傳染病
ではあるが遺傳病ではないといふ確信を抱いてゐたので、少しも此病に對して恐怖してゐな
つたのです、それですから、貴女の血統を知ると共に、彼の戀は一層切なる同情に燃えて、如
何なる障害をも排斥して、その目的を達しやうと試みたのです、静子さん、貴女は小金井がこ
れほどまで苦勞をしてゐたことを知らなかつたでせう。」

久保田はそれからそれへ、次から次へと詞を續けて、一雄が郷里に歸省して両親に結婚の同
意を求めに行つたこと、それが破裂して結局静子の血液試験をなし無菌であつたら結婚を許し
若しまた有菌であつたら、全治させるために三年間の猶豫を乞ふて来たこと、一雄は両親にか

う約束はして来たものゝ、さて静子の血液を如何にして採取したら宜からうか、途方に暮れて久保田に頼んだのを幸ひ、久保田が詐謀を用ひて、全生病院の一患者から有菌液を採取し來りこれを静子の血液と欺つて、一雄に提供し試験させた、その結果有菌の事實が確められて終に彼の夜の大破綻となつたことまで落もなく物語つた。

「判りましたか、静子さん、驚いたでせう、驚くのが當然です、實に僕は罪惡を犯しました、改めて貴女の前に悔懺してその罪を謝します、之は小金井君の前にも謝罪したことなのです、僕が善意を以てしたことが仇となつたので、然し今更曰ふても歸らない愚痴です、貴女がまだしも生きてゐて下さつたので、幾分か僕の罪が軽くなつた道理です、今後小金井に逢つてもこれだけは僕自身で發見したので、大に鼻が高くされます、と曰つても、小金井の行先が判らないのだから、静さんを逢はせる譯にも行かず、ア、實に残念だ。」

久保はまたグタリとして、失望の溜息を洩らした、静子の七五三花は聞く事毎に意外な話……といふばかりでなく、一雄が自分に瀆いでくれた愛情が極めて強烈であつたと共に、眞に献身的の戀であることを知つて、今更のやうに一雄が戀しく、また慕しくてならなかつた、モ一度一雄に逢つて禮も曰ひたし、積る話もしたいと思つても、その人の所在は不明なのだ、イヤ

判つてゐた所で、自分はモウ元の清い静子ではない、汚れた體で清い一雄に逢ふことはできない筈だ、と、思ふと急に悲しくなつて、今まで張り詰めた氣も一時に弛み、又もその場に打ち伏して忍び音に泣くのであつた、久保田も今は何んと慰むべき術もなく、腕を拱いたまゝ、無言で俯首れた。

忽ち四隣の寂寥を破つて、静子はその泣き膨らした面を擧げつゝ、痾高い聲で。

「久保田先生、妾はモウ諦めました、いろ／＼とお心づくしのほどは御禮の申しやうもムいません、今、小金井先生の在所が判つても妾は御目にかゝれる體ではないのですから、此まゝお別れた方が却つて兩方の爲だと思ひます。」

「それは静さん、ド、什麼いふ理由なのです。」

久保田は慌てたやうに急ぎ込んで聞くのであつた。

(十五)

久保田が慌てゝ急ぎ込んだのと反對に静子の七五三花は却つて冷靜に、沈着拂つて口を開いた。

「何故とお聞きなさるまでもありません、その後の妾の成る態をお話しすれば判るのでございます。」

「成る態ッて貴女が一躍女優になつたことでせう、それなら別に小金井君に逢はす顔がないといふほどの問題ぢやありません。」

「いえ、そればかりではないのです、まア一通り妾の申上げることをお聞きなすつて下さい。」

「宜しい、什麼してもお聞きしなければならぬことなのですから、萬望話して下さい。」

久保田は更に冷えた盃を乾して膝を進めた、静子の聲には生氣が失せて力なく聞える。

「一雄さんから絶縁の御手紙を戴いてそれを見た時には、妾はモウ夢中でございました、廣い世界に唯一人の同情者、唯一人の慰められる人、その人に妾は捨てられたのでございますもの、久保田先生！萬望お察しなすつて下さい、妾は死ぬより外に自分の身の振方の附けやうがないと思ひました、夢中で家を飛び出して、三圍の堤から隅田川に身を投げやうとする處を柳橋の藝妓屋の主人に助けられたのです。」

「エーツ、藝妓屋の主人に助けられたのですか。」

「然うでござります、妾は到頭藝妓になりました、柳橋から小静と名乗つて左様を取つたのでございますよ、ハイ、女優になる前に、一度然ういふ墮落の歴史を作つて来た驅でござります。」

静子は沈着いて静に話をしてゐるやうでも、その顔には失望の色が瞭々と現れて、自分で自分を嘲つてゐるやうにも聞える、久保田の眼は好奇心と同情とに輝いた。

「静子さん！それは本統のことでござりますか、ではその藝妓屋の主人といふ奴は悪人ですな助けたのを枷に賤しい營業を貴女に強ひたのですな、怪しからん奴だ、その男は、ナ、何んといふ奴ですか。」

拳を握つて静子に詰め寄せた、静子は慌て、學士を遮り。

「先生！、久保田先生！、まアお待ちなすつて下さい、飛んでもないことです、藝妓になつたのは、妾が望んでなつたのでござりますよ、その主人といふのは日本橋の消防の頭で、情もあれば義侠心も深かつた人です、苟且にもそんなことを曰つては罰が當ります、また女將さんといふのも、元はやつぱり藝妓をしてゐたのですが、此女がまた親切な人でございました、妾はその親切な夫婦に背いて家出をしなければならぬやうな事になりましたのです。」

静子は何を思ひ出したのか、耐へ得ぬやうに復も潜々と泣いた。

静子は何を思ひ出したのか、耐へ得ぬやうに復も潜々と泣いた。

久保田は殆んど判断すべき目的が附かなかつた、たゞ何かは知らず数奇な運命に弄ばれた静子の境遇が可愛相で耐らない、何時か貫泣させざるを得なかつた。

「それぢやア何故に貴女は自ら好んで藝妓におなりなすつたのです。」

「何故と仰有られますと妾、言譯をするやうに當りますが、結局心機の一轉とでも申すので、いませう、絶望から生じた反抗心、とでもいふので、自分でも判らないのです、兎に角今まで浮世の浪に揉まれて來ましたから、今度は是方から浮世を翫弄にしようとしたので、いませう、然し女は何もして弱いもので、いませう、久保田先生！」

静子は再び撫然として俯首れた。

(十六)

「女は弱いものと仰有いますと……。」

久保田は静子の意味ありげな詞を訝しんで、斯う聞いた、静子はハツと思つて俄に顔を赧めたが、それも瞬間、すぐ元の態度になつて。

「弱いと申す譯でいいますか、それはごんなに冷かにしてあましても、終に性情を枉げること

は出來ないといふ意味なので、いませう、弱きもの爾の名は女なりと西洋の人が申したさうですが、本統に千古の金言でいませう、妾はまだ悟り切れなかつたので、いませう、わねえ。」

静子の詞は愈々出で、愈々意味ありげに聞える、久保田學士は早くもその間に事情があることを察した。

「然し貴女が如何に浮世を達観すればとて、自ら進んで藝妓になつたなどは實に意外千萬です、それから、今日までの経過は何なつたのですか。」

「仔細あつて菊中村といふその主人の家を去らなければならぬことができましたのです、妾はある雨の夜を幸ひに、ソツと其處を抜け出して、平生相談相手になり、何かと世話をしていた朋輩が落籍されて淺草の方に圍はれてゐましたのでその女を頼つて、事情を話して暫くお世話になつて、その女の口利で手蔓に手蔓を辿つて今の境遇に落ちたのです、女優になるのに就いても亦妾が好んでなつたので、いませう、静子は、何れにしても墮落した女に違ないの、いませう。」

「その仔細あつてといふ理由は、何れいふことなのですか。」

「何れいふだけではお聞き下さいませうやうに……。」

といつて、肝腎のそれを御話しなさらなければ佛作つて魂ひ入れずでせう。』

『でもムいませうが……。』

『それは静さん、貴女卑怯といふものです、それまでの事情を打ち明けて置きながらたゞ此一事のみを仰有らないのは、何か久保田に對して不安なことがあるからでせう。』

『イ、エ飛んでもないことでムいます、では申上げます、博愛學校の辻訓導が銀行員になつてゐるのにお座敷で逢つたのでムいます。』

『は、ア、すると辻が昔の戀を遂げやうとしたのですな。』

『……。』

『貴女がそれを拒んだので、辻は金力に依つて左右しやうと抱主の方へ談判したのですな、然うでせう、ねえ静子さん。』

『……。』

『貴女は恩義のある抱主に對して板挟みになつた義理から、止むなく家出したといふのでせう、什麼です違ひますか。』

『久保田は静子の性質から想像して斯う聞いた、静子はその間胸の中で悶えに悶えた。彼は生

れてまだ偽りを曰つたことのない女である、然し道に辻のためにあらぬ辱を受けたといふことを自白するだけの勇氣はなかつた、幾度かそれを曰つて懺悔をしやうと口まで出たけれども終に曰ひ出すことができなかったのだ、彼は終に久保田を欺く決心をした、そんなことゝは知ぬ久保田は尙も疊かけて。

『什麼です静さん、僕の推察した通りでせう、違ひますまい。』

『ハイ……。』

『然うですか、實に思へば貴女はお氣の毒な人です、小金井君は何んと曰ふかも知れませんが僕は決して貴女の境遇を以て墮落したものとは認めません、餘義なくされた運命です、女子はその節操だに清くして心さへ潔白であつたなら、藝妓にならうと女優にならうと、運命に依つてされた境遇なら仕方がないです、小金井君だつて貴女の心事の潔白な事はよく知つてゐる筈です、兎も角も此上は一刻も早く小金井君を探し出して過去を語ると共に未來のことも相談せねばなりません、少くとも僕は貴女の生存してゐたことを確めたのですから、之を小金井君に報告するだけの義務があります。』

何故か静子は斯う曰はれて、却つて慄然として身を慄し、齒を食ひ縛つた。

(十七)

久保田は更に詞を續けた。

「小金井君が大學病院を去つて、親友の僕をも捨て飄然行く所を知らないやうになつたのは偏に貴女の犠牲になつたのです、小金井君は地下の静子のために、癩病に關する新發見をなし、決して之が忌むべき病氣でないといふことを世間に發表して見せる、それを畢生の事業として今より癩研究の首途に就くといつて東京を去つたのです、小金井君の貴女に竭す可憐なる心事も諒としてやらねばなりません、小金井は決して貴女を捨てたのではないのですよ、アノ絶縁状は僕に強ひられて書いたのです、ですからすぐその後で僕に内密で、それを打ち消す手紙を下谷に出したのださうです、然しそれは時遅れて貴女の手に入らなかつたのだ、それが貴女の手に入らさへすれば、這んな結果にはならなかつたのだらうと思ひます。」

悶えに悶えて涙を飲んでゐた静子は、又も怵へ切れなくつてその場に泣き伏した、それには一雄に對する感謝の意味が籠つてゐることは勿論であるが、更に深く静子の心を衝動したことは、縦しや一雄に邂逅つた處で、自分の軀は清い一雄の前に出される身でないと思つたからで

それを思ふに附けても恐ろしい、辻の凌辱を今更のやうに口惜しく感じたからである。

静子は心ゆくまで泣いて、泣き盡して涙も枯れて了つた。

久保田も此上に加ふべき詞を知らなかつた、氣が附いて帶の間の時計を見ると、夜はモウ一時を過ぎてゐる、仲居は氣を利して少しも顔を見せないけれど、人にあらぬ疑を受けるのも心苦しく、且つは静子とて更深くまで引き止め得べき身でもないと思つたので、その餘のことは更に又明日でもよく談合しやうと決心して、詞を和らげ。

「静子さん、モウ泣くものではありません、夜も更けたやうです、何時までか若い男女、殊に貴女が女優だといふとも是處の家は知つてゐます、あらぬ噂でも立てられることは互に不利益です、萬事は明日でもよく御話しいたしませう、今車を呼びますから、それで送らせませう、僕もモウ歸りますから貴女もモウお歸り下さい、大體の話は之で判りました、腹が減つたでせう御飯を食べて歸つたら什麼ですか。」

静子は漸く面を上げて涙を拭つた、眼は泣き膨れて赤くなつてゐる、何んと思つたか、突如に。

「先生妾一つ御願ひがあるんですが、什麼か聞いて下さいませんか。」

「何んです、急に改まつて、御願ひなんて……。」

「妾の身體を試験して頂きたいのです。」

「ナニ、試験とは……。」

「妾の體に、果して癩病菌が存在してゐるものですか、什麼ですか……。」

「エイツ、貴女の有菌無菌を……。」

「然うです、妾何も一雄さんの希望に副ふといふために試験して下さいといふんではありませ

ん、什麼せ斯うなつた體です、せめては醫學上の参考にでもしたいと思ひますので、先生!

萬望貴郎の手で試験して下さい、お願ひでいます。」

「それはどうも僕の手では忍びないことです。」

「そんなことを仰有らないで、什麼ぞ試験して下さい。」

「とも角もそれは後日にしませう、明日私の宅で御目にかゝりたいです。」

「では明晩何れとも決めて下さいませうか。」

「然うしませう。」

繼て二人は相前後して春琴亭を出た。

(十八)

實に別れて七五三花は春琴亭を出た、難波新地を抜けて道頓堀を真直に日本橋を渡つて濱澤屋に歸る。

思はず時間を過したので、氣難かし屋の師匠が眼に角立てゝゐるだらうと思ふとゾツとした幸ひ濱澤屋はまだ起きてゐたので帳場を通つて己が部屋に這入つた、姉妹弟子は皆舞臺の疲れにグッスリ寝込んでゐる、師匠は……とゾツと部屋を窺いて見たが之もよく寝てゐる様子にホツと安心して自分もそのまゝ床に就いた。

翌くる朝は師匠に暇を貰つて、その邊を見物して來るといひ繕ひ、濱澤屋を出て電車で上本町に下りて久保田醫院を訪れた。

實は今診察を了つた處なので、すぐ客室に通される、薬局の傍を通つて行く時看護婦が險しい眼でジツとその後姿を見送つてゐた、實は紋附の着流しに聴診器を手にしたまゝ這入つて來る。

「什麼もお待たせしました、新店ですから、お得意様を大事にして置きませんと商賣が繁盛目下
しませんよ、煩さい職業です。」

氣輕にかう曰つて其處に座つた、静子の七五三花は憤しさに昨夜の禮を曰つて、さて容を
改めた。

「先生！早速で御座いますが、昨晚御願ひ申しました一條は如何で御座いますか？」

「例の試験のことですか……。」

「何れにしましても、試験をして置いて頂く方が自分の参考にもなり、また貴郎方の御經驗に
もならうと存じますので、什麼ぞ枉げて御聞き入れを願ひたいのであります。」

「什麼も實に困りました、小金井でもゐてくれたら、又相談のしやうもありませんが、今の僕の
立場としては、貴女の體に一指だも染むに忍びないのであります……。」

「そんなことを仰有らないで、什麼ぞお願ひでいますから、試験して戴きたうあります。」

「實に困りましたな、然し試験するといつても、此不完全な僕の醫院ではとても出来ません、
検鏡室、培養室その他細菌試験に必要な器具その他の完備した病院にでも行かなければできな
いことです。」

「では貴郎の御手から其處へ御紹介下さつて、是非貴郎の御立會で、静子の體を試験して頂き
ませう。」

「弱りましたなア、實に困つたです、よろしい、では貴女のいふ通りにします、然し静さん、
試験の結果は貴女の運命の岐れる處ですよ、幸ひにして系統は癩病でも、全く菌を認めないこ
とになれば、貴女の前途は光明に輝きますが、不幸にして有菌者と決れば、貴女の將來は暗黒
です、それを承知ですか、承知ならやります。」

七五三花は平然として驚く様子も見えなかつた、彼は堅く何等かの決心を極めてゐるらしい
同時に一雄との戀が破れて了つたことをも自覺してゐるので、什麼で汚れた軀、墮落した一身
縦しや一雄に邂逅つた處で、此汚れた軀を什麼することができるものか、と、幾分捨鉢の氣味
もあるらしかつた。

「何事も定る運命です、今更になつて光明でも暗黒でも結果の如何は、妾、何んとも思ひませ
んわ。」

「よろしい、そんなら斯うします、大阪には西成郡に外島といふ所があつて、其處に癩の療養
所があります、僕が院長にも醫員にも知己はありませんが、醫師として頼みに行つたら、試験

に應じてくれませうから、早速外島へ行つて院長に逢つてよく話をして來ませう、そしてその承諾を得た上で御同行することにします。」

「では、貴郎からの御たよりを待つてゐますわ。」
「さうして下さい。」

(十九)

久保田學士は静子の餘義ない頼みに促されて、外島癩療養所に所長を訪問した。

刺を通じて面會を求めると、所長は出勤して居らぬといふ、さらば院長にといふたが院長も兼務で重に府立病院の方にゐるといふ、止むなく當直の醫員に逢つた。

應接室に待つてゐると、若い助手らしい二十八九の學校を出たばかりといひたさうなのが、手術衣のまゝ其處に這入つて來た。

「久保田學士でいますか、僕は當所の醫員で太田と申すものです、什麼ぞおかけ下さい。」
挨拶が済んで久保田は椅子に腰をかけた、若い助手は切りに愛想をして、來訪の用向を聞く。

「外でもありませんが、實は少し御願ひいたしたいことがありますので、所長か院長に御面會を願つたのですが、御不在ださうですので、貴下まで御話し致して置きたいと思ひますが……。」

「ハイ、僕で判りますことなら承つて置いて、所長なり院長なりの指揮を受けることに致します。」

「イヤそれほどの問題ではないのです、一癩病系の婦人が、有菌か無菌かを試して貰ひたいと申しますので、私が立會ひますから試験して頂きたいのです。」

「ハイ、然うですか、それなら別に大した問題ではありませんな、然し僕では什麼も何んとも御受けは致しかねますが、相憎醫長の次席も一寸不在なので、次席の小金井學士がお出ですと醫長は不在でも御返事が出來ましたのです……。」

「御詞の中で失敬ですが、貴下の唯今仰有つた小金井學士といふ方は、當所の醫員をなさる方ですか。」

「ハイ、當所の首席醫員で、醫長代理をなさる方です、非常に癩の研究に熱心な方で、檢鏡その他試験に關する一切のことはすべて小金井學士がなさるので、醫長の菅原博士も深く信頼さ

れて居られます。」

實は愕然として驚いた、正しく一雄に相違ない、一雄がこんな目の前にあるのを今まで同業者として知らなかつたのかと、咄嗟に思ひ附いて、急ぎ込んだ調子に體を乗り出し。

「ソ、然うですか、その、エイ小金井學士といふのは、若しや名を一雄といひはしませんか、小金井一雄といふ和歌山の人ではありませんか？」

「よく御存じてゐらっしゃいますな、御同窓ですか、如何にも小金井學士は一雄さんと仰有つて和歌山出身の方です。」

「然うですか、そんなら私と同期に大學を出た親友です、仔細あつて暫らく消息を通じなかつたのですが……で、今は不在と仰有いましたな、何方かへ外出されてるのですか、何時頃歸られませうか。」

「郷里へ歸省中でゐらっしゃるのです、一週間の賜暇で先刻歸られたばかりですから、まだ五日は御歸りがないでせう。」

「エイ、それでは小金井學士は歸省中なのですか、何んぞ用事でもあつて歸省してゐるんでせうか。」

「さアその邊は僕もよく存じませんが、何んでも結婚なさるとかいふ話で、その準備に歸られたといふやうに聞いて居りますが……。」

「エーッ、結婚の準備！、小金井が結婚する？」

久保田は愈々出で、愈々意思の外なる一雄の消息に、たゞ愕然たるばかりであつた。

若い助手には厚く禮を述べて、試験のことを依頼し、といふよりも今は小金井の消息を知つたので、試験のことよりもその方に氣を取られて、心も空に外島の癩療養所を出た。

(二十)

國許の母から手紙を受取つて小金井學士は一週間の休暇を貰ひ、結婚準備のため郷里に歸つた。

おなかの病氣はその後全く家復して、病氣の前よりも一層元氣になつてゐる、政則は別に變つたこともなく、たゞ日々知れる人を訪れては好きな碁や謡曲に日を過してゐる、次雄は昨日あたりから學校が始つて相變らず通學してゐる。

此中で一人ヤキモキして忙しさに奔走してゐるのがおなかである、玉枝は毎日日課のやう

に小金井の家を訪れて、二三時間づゝはおなかの手傳もしまた話相手などになつて、全く家族のやうにしてゐた。

然ういふ變化した故郷の家庭に一雄は歸つて來たのだ、母の喜びは一通りではない。

「まあ汝大層早く御歸りだつたね、いろ／＼病院の方の都合もあることだから、多分明日になるだらうツて噂をしてゐたのだよ、然う／＼まだ御年始の挨拶もしなかつたわね、まづ明けましておめでたう、度々手紙で知らして上げた通り、此方の方も宜い工合に滞りなく運んで、モウ日取さへ極めれば宜い處まで漕ぎ附けてあるんだよ、それでね、汝に一度歸つて貰つて、その日取を極めて都合に依つてはすぐにも御祝儀をして貰はうかとも思つてゐるんですよ、丹羽の方もね、斯う話が定つた以上は、一日も早い方が宜いつて、仕度を急いでゐるやうな譯なんだから……それにしても汝と玉枝さんとはまだあれきり逢はないのだらう、それでは什麼も工合が悪いツてね、丹羽のお父ツアんや、おツ母さんも然ういつてゐらツしやるから、式を擧げる前に一度よく二人の前で話をして置きたいと思つてゐるんですよ。」

おなかは得意になつて自分のことのやうに一人で喋舌つて欣々としてゐる。

母の得意なのに引き代へて一雄は頗る氣のない様子をしてゐる、彼は一歩々々絶望の深淵に

近づいて行くのだ。

「然うですか、それは種々とお骨折で有難うムいます。」

一雄の態度は極めて冷やかだ、別に嬉しきやうな様子も見えない、おなかは少し不平であつたが、きまりが悪いので口敷を聞かないのだらうと思ひ返して又詞を續けた。

「それでね、こんなことをいふとまた汝が怒るかも知れないけれど、愈々式を擧げて了つたら今の病院なんか辭職して了つて和歌山で一つ開業して貰ひたいんだよ、宜いだらうねえ、それがまあ第一の相談なんです、開業すると決れば、その方の仕度を先にして、宜きさうな宅を借りて了ひたいのです、そしてその新宅で式を擧げて、それから開業することにしたらよからうと、妾は思つてゐるのです、お父さんもそれが宜からうツて仰有つてゐるのだよ、汝は什麼するつもり？」

「僕ですか、僕はまだ開業することを好みません、まだ早いです、もう少し實地に就いて研究しなければならぬことがありますので……、それに第一開業するといつた所で資金もないやうな始末ですからねえ。」

「イ、エ資本のことは心配するには及びませんよ、それは妾が宜いやうにしますから……。」

「おッ母さん！、丹羽の家なぞから融通して貰ふやうなさもしいことではないでせうねえ。」
 「ナニ、さもしい？」
 「イヤ僕は何れにしても、まだ開業はしません、是はたとへお父さんでも、お母さんでも、強ふることはできませんよ、僕がまだ自分の腕に開業するだけの自信がないのですから……。」

(三十一)

おなかは丹羽家、殊に虚榮心の強い玉枝の要求から出た、結婚と開業とを同時にすることを巧みに一雄に得心させやうと苦心した、無論開業の費用は丹羽家から支出すること明かである。
 一雄はそれを見抜いてゐる、どうせ長く続く新家庭でないことを自覺してゐる一雄が、それを承知する譯はない、縦し一雄の心に得心の行つた結婚にした處で新妻の懐から支出される金で開業するなどは決して潔しとせざる處だ、況して彼には醫學者としての主義もあれば主張もあつて、別に或立場を持つてゐるのである、然し今それを露にいふことは母の感情を害する基だと思つたので、唯何んとなく『まだ早い』といふ餘裕のある一語で否定して了つた。
 母も此場合強つてとは曰はなかつた、結婚さへしては了へば、新夫婦の間で什麼でもなる問題

だと思つたので、そのまゝ此事は口を緘んで了つた。

「まだ早いとお曰ひなら、それはまア婚禮を済してからでも宜いけれども、然しその御婚禮の日取ですがね、結納も去年の暮に済してありますし、お前の都合さへ宜ければ明日か明後日も宜のだよ。」

「然うですか、然し何も然う急ぐこともないんですから、春にでもしたら什麼でしやう。」

「春ッて今がモウ春ちやアありませんか。」

「イヤ僕の曰ふのは櫻花の咲く時分の春をいふんです。」

「そんな氣の長いことをいつてゐられますか、結納まで取り交して何時までも引ッ張つて置くといふことは世間への聞えもありますよ。」

おなかが一心に一雄を説き伏せやうとしてゐる處へ、丁度玉枝が訪ねて來た。

玉枝は全く一雄の歸省つて來てゐたのを知らなかつたのだ、例時の如く遠慮なく勝手口から通つて來て。

「叔母さん！、今日は……。」

と、聲をかけながらズン／＼襖を開けて其處へ這入らうとして、後をふり向いた一雄と視線

が合つた時、道に不意を打たれてタジ／＼と二三歩後に退りながらサツと面を赧めて其處に立ち凍んだ。

おなかはすぐ氣を利して。

「まア玉枝さんだつたの、丁度宜い所ですよ、早く此方へお這入んなさいな。」

一雄も黙つてゐる譯には行かないので母の尾に跟いて。

「什麼ぞお這入んなすつて下さい、御遠慮には及びません。」

「では失禮します。」

斯う曰つて氣まり悪さうに、おなかの傍に小さくなつて座つた、而して一雄の面を窺み見ては、衣紋や居住居を氣にして幾度か襟を掻き合したり前を引ッ張つてゐた。

おなかか如才なく二人の間を取り做してゐるので、一雄も玉枝も話の繼ぎ穂を得た。

「一雄さん！、お久しぶりでムいます、何時ぞやは失禮なことばかり申し上げまして……此度は不思議な御縁で……アノ什麼ぞ幾久しく……。」

「お互ひさまで、什麼ぞ宜しく、僕こそ失敬しました。」

「何事も前々のことは水にお流しなすつて、什麼ぞ氣に留めないやうにして戴きたうムいます

ので……。」

「玉枝さん、モウそんなことを曰はなくつても宜ござんすよ、水に流すも流さないもあるもんですか、一雄はそんなことを何時までも氣にするやうな人ぢやアありませんよ、それよりか、日取ですがねえ、今も一雄と相談してゐる處なんです。」

(三十一)

「之はね、お父さんやお母アさんとは概畧打合せがしてあるんですが……丁度幸ひ貴女も來て下すつたし、一雄もゐる所で、本人同士揃つたのですから、確乎相談して置かうと思ふのですよ。」

「什麼ぞ叔母さん！、宜きやうに……。」

「其處で相談ですが、一雄はまだ開業は早いといふんですよ、モウ少し實地を遣つてからでも遅くはあるまいといふんだがね、本人がまだ腕が鈍いといふものを無理に遣らせる譯にも行きませんし、之だけは一雄の氣の向いたやうにさせた方が宜からうと思ひますのでね、兎に角早く式を擧げた上で二人がよく相談したら什麼でせう。」

玉枝は無言つて一雄の様子を窺み見た、一雄は案外平氣な態で。

「然うした方が宜さうですな、家庭を作つて見ると其處にまた變化もありませうし、まだ變つた考がでよくなるかも知れませんよ。」

玉枝もその尾に跟いて、モジ／＼しながら。

「叔母さん！、妾も一雄さんの説に賛成してよ、それで宜いでせう？」

「二人とも得心ならそれで宜いでせう、丹羽の叔父さんや叔母さんの方には妾から然ういふて置きます。」

「ですけれども一雄さんは新家庭を作つてから、什麼なさるの、やはり今の病院にゐらっしゃるお積り？」

「然うですまだ癩病に附いて研究すべきことが澤山ありますから……。」

「開業はモット先へ寄つてからでも宜ござんすが、今の病院だけは罷めて下さいな、幾らお醫者だつて選りに選つて癩病の病院にゐなくつたつて宜いわ、一雄さんなんか立派な醫學士ですもの、何處へ行つたつて押しも押されもしないわ。」

「アハ、、、玉枝さんは何ぞといふと醫學士の肩書を大有變難いものゝやうに思つてゐられ

ますが、醫學士なんぞはそんな偉いものではないのです。」

「ですけれども、妾、癩病は嫌だわ……。」

「嫌ならお止しなさい、僕は僕の信する所に従事するのですから……玉枝さん、結婚すれば夫婦ですよ、今は他人ですが夫婦となつた以上、一々良人の趣味、良人の嗜好、殊に良人の職業上のことに、妻が一々容喙することは僕は好みません、その點に就ては何れいふことをしやうと斷じて妻の干渉を許さないので、その邊は誤解のないやうにして置いて戴かないと、到底永い月日に圓滿な家庭を作ることができないのです、宜ござんすか、その邊の得心が附いてゐないと此結婚は不幸な結果に終りますぞ。」

一雄は意味ある眼を以て儼然とかう曰つた、玉枝は慌て、一雄の詞を遮り。

「一雄さん！、妾、そんなつもりで曰つたんぢやアなくつてよ、干渉するなんてそんなことありやアしませんわ、お氣に觸つたら堪忍して下さいねえ、ねえ一雄さん、妾、そんなつもりで曰つたんぢやアないんだわ、妾が良人の自由に喙を容れるなんて、妾、そんな女ぢやアないわねえ叔母さん！」

「まあそんなことは什麼でも宜いやね、若い人達は下らないことに角を立てて見たいのだからね

え、玉枝さんだつてそんなに氣にすることはありませんよ。」

「でも一雄さんが怒つてゐらッしやるわ。」

「イヤ怒るなんてそんな、大人氣ないことはしません、貴女がその頭さへあれば僕はそれで満足です。」

一雄は力ない聲で淋しく笑つた。

(二一三)

一雄が強ひて平氣を装ふため笑つたので、玉枝も艶姿をしながら嫣然した、玉枝に目も鼻もないおなかは、美しいあどけない娘だと思ふ、一雄はその艶姿をする様子が態とらしいと思ふと同時に、表情的の態度を忌らしく感じた、おなかと一雄が玉枝を見る目は全くその立場を異にしてゐるのである。

おなかは一人ホク／＼して、唯モウ二人が仲好く詞を交すのを幸福に思つてゐる、でも、少しも早く結婚の日取を取り極めて了はうと思つて、また膝を二人の間に押し進めた。

「それでねえ、一雄！、式を挙げる日だが、丹羽さんの方では此次の日曜にしたら什麼だらう

といふお話なんだよ、お前に格別の差支さへなければ、妾達も然うしたいと思つてゐるんですがね、お前の方に差支なんぞないでせう。」

「エーッ、此次の日曜？、大變忙しいのですな、かうつと、今日は火曜日ですな、中四日よりありません、頗る忙しいことですが、然し別に差支はありません、何日でも宜いでせう。」

一雄はモウ覺悟をしてゐるらしく、何を曰つても一向異議を唱へる様子も見えぬ、彼は決して此結婚を重要視してゐなかつた、結婚といふよりは寧ろ嫌な玉枝と同棲するその日取を極めるのだからに思つてゐた、イヤ然う思はなければならぬほど餘儀ない場合に立つてゐるのだ一雄の胸中は寧ろ斷腸の思ひであらねばならぬ。

おなかも玉枝もそんなことは少しも氣が附かぬ、たゞ玉枝は一雄が以前の温かい性質に引き代へて何となく冷かな態度になつてゐるのを嫌らす思ふのである。

「では然う決めますよ、此次の日曜日ですよ、宜ござんすか、ちやア玉枝さんも宜ござんすねえ、何れ今晚でも妾が行つてよくお話をしますけれど、貴女からも然う曰つて置いて下さいね。」

玉枝は話が意外に早く運んで行くのを嬉しく思つた、氣も心もそゞろに、數日の後には小金

井醫學士の新夫人となるのだと思ふと、胸は希望の光りに躍つて、いろいろの楽しい空想を泛べすにはゐられなかつた。

「一雄さん！、貴郎結婚の式が済んだら旅行なすつて。」

「旅行とは？、新婚旅行のことですか。」

「然うよ、新婚旅行よ、ねえ叔母さん、何處が宜いでせう、妾、東京から日光の方へ行きたいわ。」

「新婚旅行などといふものは贅澤なものです、僕はそんなハイカラなことは好みません。」

一雄は膠もなくいひ放つた、玉枝は目を睜つて驚いてゐる、其處へ下女が和歌浦からだといつて一雄に宛てた使ひ手紙を以て這入つて来たので、話の腰を一寸折られた、一雄は手早くその手紙を受取つて裏を返して見ると、差出人の名はないが、たゞMK生と記してある、封を押し切つて、スラ／＼と読み終つた一雄は慌てたやうに、敷居際に手を突いてゐる下女をふり返つて。

「使は待つてゐるのか。」

「ハイ、御返事を戴きたいと申して居ります。」

「然うか、ちやア直ぐ行くつて曰ふてくれ。」

「それだけで宜しいのでムいますか。」

「あア、それで宜いのだ。」

下女が立つて行くのと殆ど同時に一雄もまた立ち上つた、おなかは慌てし。

「何ですなえ、慌てたやうに、何處かへ行くんですか。」

「エイ、一寸和歌浦の蘆邊屋まで行つて来ます、久しく逢はない久保田が突如に現はれたんです。」

「まア久保田さんが……什麼してやせうねえ。」

玉枝は險しく眼を動して一雄の様子を注意する、おなかは別に氣にも止めてゐないらしい。

一雄はそのまゝ家を出て和歌浦行の電車場に急いだ。

(二十四)

和歌浦の觀海閣を前にした多寶塔下の蘆邊屋の離敷座に、久保田實はたゞ一人久しく逢はない親友小金井學士の來るのを待つてゐた、使ひの車夫は今し方歸つて來て、直ぐに行くといふ

返事だ、實は幾度か廊下に出て街道の方を眺めた、待ち飽んで既に手酌で數本を倒してゐる。庭下駄を引摺、音がして、ついで仲居が「萬望此方へ」といふ聲がした、小金井が來たのであつた、實は席を起つて自分で障子を開けて上座に招じた、仲居は膳の都合を聞いて出て行く。

「小金井君か……。」

「オウ久保田君か……。」

二人は犇と手を握つて、深き感慨に打たるゝものゝ如く、物を曰はうとするのだが口が吃つて何事も曰ひ得ない、感情に強い小金井は早やその眼には一杯の涙痕を止めてゐる、やがて二人は握つた手を放した、久保田は席を一雄に薦めて。

「さア何から話して宜いのやら……然し無事でゐてくれて、俺も安心した。」

「君も達者で嬉しい、然し什麼して僕が和歌山の宅にゐたことを知つたのか。」

「什麼したツてかうしたツて君！、實に莫迦々々しいくらゐのものだよ、君と俺とは目と鼻の先にゐながらお互に知らなかつたのだ、俺は君と袂を別つてから、郷里へ歸つて間もなく大阪に出て開業したのだよ、今は玉造に店を出してゐるんだ。」

「ナニ大阪にゐた？、少しも知らなかつた、ぢやア君は僕が外島にゐることを知つたんだね。」
 「それが實に偶然と曰はうか、意外と曰はうか、イヤ實に不思議なんだ、實はソノ……エイ……ある患者がね、僕が診斷してやつてゐる患者がさ、癩菌の試験をして貰ひたいといふので、外島へ頼みにゐつたんだ、すると君の話が出て、今日歸省したばかりだといふんだらう、急に君に逢ひたい用事もあるんで、いろ／＼思案したが、待つ暫しを曰つてゐられない場合なので患者も何も打捨らかして置いてその足で飛んで來たのさ。」
 「然うか、實に奇遇だ、やはり天が我々二人の友愛を捨てなかつたのだな、そしてその後のことは什麼した。」

「まアその後のことなんか什麼でも宜い、後で悠然話せることだ、それよりか俺が第一に聞きたいのは、君！、結婚するといふんぢやアないか。」

「エイ、什麼してそれを知つてゐる？」

「太田といふ彼所の醫員が然う曰つてゐたぞ、まア誰が曰つても宜いんだ、それが事實か什麼か聞きたいんだよ。」

「事實だ、然かも次の日曜日に式を擧げるんだ、僕はいよ／＼此結婚に依つて社會的に自殺を

することになるのだ。」

「ナニ社会的自殺だ？、ウム、君は玉枝さんを貰ふんだらう！」

「然うだ、憎むべき悪鬼と握手せねばならぬ境遇に餘義なくされたのだ、多くをいふ必要はない、久保田君！、察してくれ。」

「ウム、然うか、多分然うだらうと思つてはゐたが、そんなら事實だな、式を擧げるのは次の日曜日だといつたな、かうつと今日は火曜か、水、木、金、土と中四日だな、よしそれまでに解決する。」

久保田は何か一人で飲み込んで一人で合點してゐる、一雄は訝しうにそれを聞き咎めた。

「何んだ、それまでに解決するといふのは……。」

「イヤナニ、別に君に關係したことぢやアないが……、然し小金井君！、茲に僕は君の驚くべき一新事實を報告するぞ。」

「何んだ一新事實だなんて……。」

「驚くな、静子さんは生存してゐる！」

「エイ、静子さんが生きてゐる？。」

一雄は目の色を代へて膝を詰寄せたし

(二十五)

「静子さんは確に生きてゐる、危い命を助けられて生存してゐるのだ。」

「ド、何處にゐる！、生きてゐるのなら一目で宜い兎に角逢はしてくれ、久保田君！」

「逢はず、無論逢はず、此消息を知つて静さんを君に逢はさずに置かれるものか、又逢はさなければ僕は友人としての義務が済まん、然し小金井！、氣を落ち附けてくれ、少し事情があつて今すぐ逢はず譯には行かないのだ、二日間の猶豫を頼む、今日から三日目には必ず静さんを連れて立派に對面させる。」

「何故だ、何故すぐ逢はずことができないのだ、そして蘇へつた静さんは何處にゐるのだ、オイ、キ、聞かしてくれ、後生だ！、久保田！」

一雄の神経は強く衝動された様子で、雷ならぬ態度に急き込んでゐる、久保田は眼を瞑つて一度考へを頭に纏め、順序を立てる様子であつたが、忽ちその膝を押し進めて、情に燃ゆる眼を一雄に注いだ。

「小金井君！、然う急いではいかん、俺が知れる限りの消息は盡く君に話すよ、何で君に隠すものか、隠すほどならかうしてワザ／＼俺は君を訪ねて来はせん、氣を落ち附けてくれ、宜いか、俺が二日待てといふのも、君のために圖る厚意だ、是は何しても聞いてくれなければ困るぞ。」

「待てと曰ふなら素直に待ちもしやう、然し静さんは什麼して蘇生つたのだ、蘇生つてから何處にゐたのだ……。」

「彼の夜三圍の堤から既にかうと見えた處を助けられたのだ、助けられて以來の静さんは数奇な運命に捕はれて今も尙その薄命に泣いてゐるのだ、静さんは一たび藝妓となつた、二たび俳優となつたのだ……。」

「ナニ、静子が藝妓！、そして俳優！。」

「然うだ、之には小説のやうな長物語があるのだ、小金井君！、可憐なる静さんの不幸な運命に同情して遣つてくれ給へ。」

久保田は聲を曇らして詞に力を入れつゝ一別以來の静子の消息を落もなく物語つた、たゞ女優となつてから今大阪に来てゐることだけは何故か口を緘んで話さなかつたのである。

聞く小金井の驚きは一通ではない、久保田が一語を續くる毎に、その眼は烈しく動く感晴の高潮に刺撃されて、血を漲らしてゐる、胸は早鐘を打つやうにワク／＼としてゐる、その鼓動が全身に傳はつて傍目にも確にそれと知られるのである。

「一別以來僅に二年だ、此短い月日の間に静子さんは纖弱い身に耐へ得ぬほどの重い運命を擔つて險しい世路の浪と闘つて來たのだ、然も一難を経る毎に志操益々堅確にして男も及ばぬほど確乎してゐるのだ、僕は取り敢へず是れだけのことを君に報告する義務があると思つて、君の所在を確むると同時にこの事を話しに來たのだ、今より三日目には屹度君に静さんを逢はせる！、その上の處置は君の思ふ所に任せるより外はない、但し静さんを君に逢はせる場合、よき消息を齎して逢はせ得るか、依然たる静さんとして逢はせねばならぬか、僕は偏に神が静さんの一身に加護を加へられんことを祈つてゐるのだ。」

「然うか、よく話してくれた、不思議な運命だなア久保田君、事實は小説よりも奇なりといふが、静さんの運命が即ち夫だ、濟まん、静さんをして然ういふ不幸な運命に陥したのは僕だ、之は速に自分の罪を償はなければならん、然し、什麼しても今より三日を待たねばならぬのだなア。」

「一雄はグツタリしたやうに腕を組んで俯首れた。
久保田は患者を預つてゐる身の、長居はできぬと、席を立つた、一雄はまだいひたいこと、聞きたいこともあるが、職業を有つてゐる人を強ひて引止める譯にも行かないので、二日の後を約し共に連れ立つて蘆邊屋を出た久保田を電車から停車場まで送つた。」

(二十六)

「静子さん！、試験の結果が判りました、今外島保養院から報告を受取つたので、早速来て戴いた理由なんです、よくすぐに來られましたな。」

久保田醫院の客室に今打ち通つた静子は實から此詞を聞いて、胸の躍るを覺えた、かねて覺悟を極めてゐる身とはいへ、此報告の一片が自分の運命を定めるのである、死刑か無罪か、静子は重罪を犯した判決の法廷に立つの思ひで、體がワナ／＼と慄へた、顔は一度紅みを潮したが、すぐ血が逃げて土のやうに青くなつた。

之に反して實は押へ切れない喜びの色を満面に湛へてゐるのだ、然し俯向いてゐる静子には更に久保田の顔色を判断することができぬ、凶か吉か、静子は観念の眼を閉ぢた。

「静さん！、お喜びなさい、結果の報告は大吉ですぞ、貴女の體には何等癩の特徴を認めないので、イヤ、特徴ではない、系統は癩病でも、その血液に微菌を傳へてゐないので、即ち貴女の體は無菌です、貴女は健全な人間として、何等耻づる所のない、立派な體たといふことが保證されたのです。」

「エーッ……妾が……アノ無菌……そんなら癩の血を傳へてゐないのでムいませうか、アノ健全な……普通の人と變りのない體なのでムいませうか……。」

「然うです、立派に保證されたのです、曰はゞ貴女の體に保險が附いたのですよ、嬉しいでせう、僕も實に嬉しいです、静さん、僕は貴女の爲に萬歳を叫びたい。」

「ソ……そんならいよく妾……アノ……立派な一人前の……然うでムいましたか、ア……ア……有難うムいます、先生！。」

静子は嬉し泣きに泣き伏して面を覆ふた、久保田は何んとなくソワ／＼して。

「天帝の支配は公平です、静さんが今日まで苦しめられた報酬としてもかうあるべきが當然の結果なのです、静さんも嬉しいでせう、然し僕も實に嬉しいです、僕はこの好消息を齎らして清い静さんをいよく明日小金井に逢せることができると思ふと、僕は急に肩身が廣くなつた。」

心地がします、是で僕は全部過去の罪を小金井にも、静さんにも帳消しにして貰ふのです。』
實の面には禁じ得ぬ希望の光りが輝き渡つてたインソ〜と、いふとも稍々順序を失つてゐるやうに思はれる、果して静子は久保田の詞を聞き答へた。

『先生！、アノ唯今貴郎、何とか仰有いましたねえ、明日小金井に逢はせるツて、先生！、貴郎一雄さんのお出なさる處を御存じなのですか……。』

静子は息を喘せてかう聞いた。

『イヤ……、什麼も肝腎なことを貴女に曰ふのを忘れました、静さん、貴女は高い報酬を拂つてあらゆる艱苦を嘗められたが、然しその報酬は決して高いものではなかつたのです、此二年間の苦勞は今一朝にして報いられました、と、だけでは判りますまい、静さん！、小金井の居所が判りました。』

『エーッ、一雄さんの在家が……アノ判つた……のでムいますか、ド、何處にお出なのです……。』

『實に奇遇です、不思議です、大阪にゐたのです、この大阪にゐたのですよ、我々二人、目と鼻の間にて之を知らなかつたのです、而も昨日貴女と一緒に رفتつたアノ外島の保養院に醫員

して奉職してゐたのです。』

『エーッ、外島に……保養院に……妾……まア什麼しませう！。』

(二十七)

『驚くのは有理です、然し小金井は昨日は外島の病院にゐなかつたのです、是處數日郷里和歌山に歸つてゐます、僕は既に小金井と逢ひました、さア……それを今日まで貴女に曰はなかつたのは決して悪意ではありません、僕はこの試験の結果を待つて、二人を逢はせるつもりでした、小金井は貴女の有菌無菌に拘らず、貴女を妻にする意志を持つてゐる男ですが、幸ひ貴女から試験の事を持ち出されてゐましたので、その結果を待つてのことにしやうと、小金井には何んにも曰はず三日間の後といふ約束で別れてゐるのです、その三日目が即ち明日になるんです、僕は此喜ぶべき消息を携へて、前さんを小金井に逢して上げるのです、イヤ、逢はすことが出来るのです、小金井も喜ぶでせう、僕も嬉しい！、静さんも嬉しいでせうねえ。』

久保田が欣々として喜ぶに引き代へ、静子は何事かを胸に悶ゆる如く齒を食ひ縛つた、静子とて戀しい小金井に逢ふことを嬉しく思はない筈はない、また自分の體の問題が根本から解決さ

れたことを嬉しく思はない筈はないのだ、静子の胸には飛立つほどの喜びが溢れてゐるのである、が、然し、然し、さて小金井に逢つた時、自分の體を久保田がいふやうに清いものとして逢はせることができやうか、癩病の血系はないとしても、自分が今度一雄に見える時は、元の清い處女ではない、静子の胸には悲喜交々往來して悶え悶ゆるのだ、彼は心の中で『ア、悪魔！ 辻！』と叫んで今更の如く無念の齒を嚙んだのだ、それにしても久保田は何して小金井と逢つたのだらう、それが聞きたいと思つた。

『セ、先生！、それで一雄さんに御逢ひなすつて什麼いふお話を遊ばしたのでムいます。』

『それはかうです、保養院へ貴女の試験のことを頼みに行つた時、小金井が癩の研究者として同院に奉職してゐることを他の醫員から聞きました、僕は驚いたです、それと確めて逢はうと思ふと、小金井は先刻結婚準備のため和歌山に歸つたと聞いて、そこへ保養院を出で、とつおいつ思案しましたが、結婚準備といふ詞が妙に僕の心をして不安に陥らしめたので、すぐその足で和歌山へ飛んで行つて或る處へ小金井を呼んで面會したのです、その結果三日目に貴女を逢はすといふ約束をして來たのでした。』

『ソ、そんなら、アノ……一雄さんは結婚遊ばすのでムいますか、アノ……若しや玉枝さんと

ではないのでムいませうか？』

『然うです、然し之にはいろ／＼混み入つた事情があるらしいのです、其日僕は急いで返らなければならぬ體でしたから、ジツとして委しいことを聞くべき違がなかつたのです、然しこの結婚なるものが決して一雄君の本意でないことは明かです、何故と曰へば、小金井は僕がそのことを聞いた時に、自分は此結婚に依つて社會的自殺をするのだと、たゞ一言失望の歎聲を以て答へたです、それでよくその間の消息が分ります、僕が三日を約して分れたのも之あるがためです、小金井の結婚はその時から五日の後に迫つてゐたのです、ですから僕はそれより以前即ち三日間の中に此方の問題を解決しやうと思つてその約束をしたのです、若し不幸にして試験の結果貴女が有菌者であるならば、貴女を説得して小金井を諦めて貰つて、切角運んでゐる結婚準備を成立させやうと考へました、然し果して此結婚のために小金井が社會的に死ぬものとするれば、黙つてはゐられませんが、兎も角も貴女と小金井とを逢した上で最後の決定をお二人の自由意志に任せるより外に手段がないとも思つてゐたのです、然し萬一にも貴女が無菌者であつたら、その時こそ久保田實は堂々と小金井に談判を試みて、たとへ如何に運んでゐる準備にもせよ、僕自ら障頭に立つて之を打ち敗り、改めて静子さんとの結婚を強ふるつも

りだつたのです。』

(二十八)

『まあ先生！、飛んでもないことでムいます、そんな亂暴なことを……。』

『アハ、ハ、ハ、お待ちなさい、心配することはないです、僕は然う考へてゐたのですが、試験の結果は上々吉で何事も思ふ通りに運ぶやうになりました、小金井に對しては僕の最後の手段を取るやうになつたのです、最も喜ぶべき手段を取るやうになつたのですから、小金井も満足するだらうと思ひます、其處で々すねえ、愈々明日が約束の當日ですから、兎も角も貴女を同行して小金井に逢はせねばなりません、無論貴女に異議はありますまい、什麼です静さん。』

『……………。』

静子は今更の如く面を赧めて、黙つて俯向いた、胸にはいろ／＼の思が往來して、一たび枯れた熱い血汐が血管に 進るやうに胸がワクワクして心臓には高い波を打つてゐる。

『小金井はどんなに喜ぶでせう、今から目に見るやうです、その筈ですな、死んだと思つた戀人が蘇生つて突如に其處に姿を現すのですもの、夫ればかりか二人の仲を隔てる堰とも見え

た大問題が一朝にして解決され、戀人は全完な體になつたことが保證されてゐるのですもの……静さん！、小金井は此の嬉しい消息を聞いて、屹度玉枝さんとの婚約を破るに違ひないです自ら進んで破談すること、僕は信じて疑はないのです、けれども僕はまだ小金井から今度の婚約が成り立つた事情に就いて何んにも聞いてゐないので、或は今に及んで之を破り難いやうな事がある間にあるかも知れません、然し今は少しも憚る所がないのですから、縦令什麼な事情があらうとも斷じて玉枝さんとの婚約を破棄させます、それは僕が今茲で誓つて置きますよ、宜ごさんすか静さん、其處で々すね、僕一人力味返つて力瘤を入れた處で、肝腎の貴女が例時のやうに弱くつては困ります、今度は久保田といふ後見が附いてゐるのですから、貴女も少し腰を強くして下さらんと困りますよ、元來貴女はあまりに弱過ぎる、少し玉枝さんの圖々しい處を見習つても宜ごさんすよ、アハ、ハ、ハ、。』

久保田は無意味に笑つて静子に力を添へた、静子も釣り込れて淋しく微笑んだが、その面は相變らず生氣が失せて如何にも力なさうに見える。

『段々との御骨折やら、厚い御思召、妾死んでも忘れは致しません、ですけども、先生！、妾モウ疾うから覺悟して、縁のないものと諦めてゐるのですから、今更それまでにお運びなす

ッてゐらッしやる玉枝さんとの御縁談を破るには忍びませんわ。』
 『ッ、それが氣が弱いといふものです、そんな弱腰で什麼しますか、小金井と玉枝さんとの結婚は決して幸福なものではありませんぞ、不幸な縁談、餘儀なく成り立つた結婚、だらうと僕は思ひます、それを破ることは決して罪悪ではないのです、モット確乎して下さらなくッちやア困るぢやアありませんか。』

『ですけれど、妾、今ちやア一雄さんの奥さんになる資格がないのでムいますもの……。』

『何んですと、小金井の妻君になる資格がないッて、ド、什麼いふ理由です、什麼いふ理由で小金井の妻君になれないのですか。』

久保田は色を代へて膝詰め寄せた、静子は思はず身を慄はして、ゾツとした。

(二十九)

憐れなる静子は久保田に追及されて、答ふべき詞が出なかつた、小金井に逢ふのは此上なく嬉しい、兎ても逢へないと思つて諦めてゐた戀人に圖らずも逢ふのであるから、嬉しくない筈はない、況して検鏡試験の結果自分の體は誰に憚る所もない完全な健康體であることを證明さ

れたのだ、之が俳優となり藝妓とならない前の静子であつたなら、什麼なに嬉しからう、一雄さんは自分が藝妓となり、俳優となつたことが止むを得ざる境遇に出でたものとして許して下さるにした處で到底許されない、永久に取り返し附かない、自分の體に新しく印された辻芳三から被つた耻辱は、どうしたッて拭ふことは出来ないものである、汚れた軀を錦に包んで清い一雄さんを欺く……什麼してそんな罪深いことができやう、と思ふと身を掻き撈られるほどに口惜しい。

静子は久保田がゐなかつたら、心ゆくばかり泣いて泣き明かすのであつたらうが、この胸の悶えを實に打明することができないだけ、泣くにも泣かれず、ジツと胸に包む心の苦しさを、静子は思はず口を滑らしてその資格のないことを洩らした、静子は辻に汚された處女の節操を深く恥ぢたのである、久保田は固よりそんなことゝ氣の附く筈がないので、飽くまでも静子を追及する。

『什麼して、静子さん、什麼して小金井の妻になる資格がないのです。』

『……什麼してッて、妾、妾は御存じの通り、賤しい藝妓となり、今はまた萬人に面を驅らす俳優になつて、處女といふものゝ資格を破つてゐる女でムいますもの。』

静子は苦しうにかう曰つてその場を言ひぬけやうとした。

「アハ、何を曰ふかと思つたら、それがためですか、そんなことは意とするに足らんです昔風の眼から見たら、或はそんな野暮なことをいふ人もあるでせう、然し我々にしろ、小金井にしろ、多少は進歩した頭脳を持つてゐる人間ですそんな、野暮なことは曰はせません、安心してゐらっしゃい、大丈夫です、況して貴女のは心からの藝妓ではなし、また俳優ではなし、世間普通の藝妓や俳優とは事情が異つてゐます、安心してゐらっしゃい、萬事は僕が附いてゐるんですから悪いやうにはしません、まア僕に任してお置きなさい、宜ごさんすか、大丈夫ですよ。」

「ですけれど、妾、什麼しても氣が咎めますから……。」

「宜ごさんすよ、宜ごさんすつては、萬事は僕が飲み込んでゐます、然し愈々明日……ふにした處で、かうつと、和歌山まで出て行くのも少し愚ですな、急いだもんだからついその邊の約束もして來なかつたのですが、エ、と、僕の家でも宜いけれど……：…：…いつも工合が悪いなア、静さんだつて舞臺の方の都合もあるでせうし、かうしませう、今から電報を打つて小金井に來て貰つて、然うだ、濱寺にしませう、濱寺なら小金井が來るにも近いし、此方から行くにも都合

が宜い、濱寺の海濱館、彼所にしませう、明日の朝僕は早く診察を了つて出かけますから貴女もそれまでに難波にいつて下さい、ちやアこれから小金井の方に電報を打つて置きます、時間ですか、然うです、まづ九時頃と思つてゐて下さい。」

久保田は一人で飲み込んで一人で極めて了つてチャンと順序を附けた、静子も今は之を拒むことができないのである、嬉しいのやら悲しいのやら判断の附かない感情を乗せて久保田醫院を出た。

(三十)

静子はいろ／＼の思ひが胸に錯綜して悶へ悶へてゐるため、その夜舞臺に出てもあらぬことのみ思ひもひ浮べられて、體は舞臺に懸つてゐても、心は宇宙に彷徨つて、何をしてゐるのか自分にも判らない、それでも「安宅關の辨慶」だけは無事に勤めたが、二番目の「白石嘶」では肝腎の名乗の處で、什麼したことが絶句して了つて、七五三八の宮城野が臺詞が曰へなくなつて了つた、大向からドツと悪落が來る、幕が了つてから、例の痲癩持の師匠だから耐らない、散々に毒吐いて聞くに耐へないことをいふ、静子の七五三花はたゞ平謝りに謝つてその場を濁

し濱澤屋に歸つたが、師匠の怒りは容易に解けないで、夜半の十二時頃までもブツ／＼と怒鳴り散した。

静子は心から頼りない身の因果を呷たすにはゐられなかつた、東京の下宿を出て以來國許へは音信不通である、父は何もしたらう、母は達者だらうか、両親の傍にゐたらこんなまで、浮世、浪に揉まれはしまい、何といふ情ない薄倅の身だらうと、師匠の室を出て自分の寢床に這入つてからも眠られぬまゝに、またいろ／＼のことを思ひ出して枕紙を涙に濡らした。

明日は戀しい、懐しい一雄さんに逢はれるのだ、今の自分を慰めてくれるものは廣い世界にたゞ一雄さん一人である、早く夜が明けてくれれば宜い、一雄さんに逢つたら何に御話をしやうかしら……嬉しい、一雄さんに逢うのは嬉しいが、さて逢つた處で、何なるのだ、一雄さんは玉枝さんと御婚禮をなさる準備ができてゐるのだ、それを自分が戀争ひをして一雄さんを此方へ取る……久保田さんは罪悪ではないと仰有つたが、何も罪悪らしい、罪悪でも構はない、一雄さんが自分を妻にしてやると仰有つたらそれで宜いのだ、玉枝さんには怨みはあるが、義理はない、戀を譲る理由はないのだ、とすれば、何でもないとだが……ア、何したら宜いのだらう、と静子はまた床上に起き上つて潜々と泣いた。

「藝妓になつたに似た處で、女優になつたに似た處で、處女の操さへ汚してゐなかつたら、自分の心に疚しい處は一つもないのだから、久保田さんの仰有つたやうな氣になれないことも……いと思ふが、汚れた軀、汚れた操を以て、清い一雄さんに添ふことはできない、自分は何といふ情ない身の上なのだらう、折角忌はしい癪病系の名を脱れて完全な軀になつたと思へば、またかういふ拭ふことのできない障はりのために、折角戀しい人に邂逅しながら、戀を語る事ができないのだ、それにつけても憎いのは辻芳三だ、今更曰つたつて歸らぬ愚痴だが……自分は何もして一雄さんとは添はれない運命にあるのだらうか、あゝ情ない。」

静子はまた床の上に俯伏して忍び音に泣いたが、やがて又思ひ返したやうに頭を擡げて、キツとなつた。

「然うだ／＼、やつぱり久保田さんの仰有る通りだ、然う／＼弱い氣ばかり出してゐては、世の中の迫害に打ち克つことはできない、自分では操を汚したと思つてゐるが、それは自分の意思から出て、愛を辻に捧げた譯でもなんでもないのだ、曰はゞ不可抗力だ、拒むことのできなかつた方に強ゐられたもの、一雄さんだつて許して下さるに違ひない、試験を受ける前に自分の軀が有菌と思つてゐても、強ゐて戀を遂げやうとしたほどの自分が、あまりに弱い氣を

出したものだ、さうく自分で自分の身を卑下してゐるのは馬鹿らしいやうにも思ふ、久保田さんの仰有つた通り、氣を強く持つて此戀を遂げる氣で明日は一雄さんに逢はう、然うだ、然うしやう。」

静子は窮して脱れるために、到頭こんな決心をした。夜が明けてから師匠の世話もチャンと済して、八時過ぎにイソ〜と宿を出て、難波驛に急いだ。

(三十一)

朝の用事を滞りなく済して静子の七五三花は、頭髮も鬘下地を久しぶりに結び代へて、手づくの廂髪にし、全く姿を昔の態に返して難波驛の待合室に急いだ。

三十分ほど待つてゐると、久保田が自用の俵で駈附けて護謨輪の轆を驛前に下した、待ちかねた静子は其前に立つて軽く目禮する、久保田は氣の軽い態度で。

「大變早かつたですな、切符はありますか、僕が買ひませう。」
「イ、エ、切符はモウ買つてゐますの。」

「さうですか、ぢやア乗りませう。」

二人は連れ立つて電車に投じた、心地よい南海電車は風を切つて南を指す、三十分の後には濱寺に着いた。

静子は始終俯向勝の態度で、實の後からトボノ〜と跟いて行く、白沙青松の間を抜けて海濱館に辿り付き、玄關の敷臺に腰を掛けてゐた仲居に小金井の來否を聞く、仲居はその方なら昨晚からお泊りになつてゐるといふ、案内されて廊下傳ひに、海に面した静かな座敷に行つた。

仲居が此方ですと襖を開けた、先に立つた久保田は、静子を先に這入らせやうとする、静子は胸がワクワクして尻込みしてゐるのを強ひて押し入れた、案内の仲居は意味あり氣な御世辭笑ひをして、草履をバタつかせながら帳場の方へ引返す。

一雄は十疊の座敷に床を背にして、火鉢を右手にし、今朝の新聞を讀んでゐたが、襖の開く音に、ハツと胸を轟して此方を向くと、久保田が静子と並んで這入つて來た、静子は俯伏いたまふ……。

一雄の眼は驀然に静子を射る、敷いてあつた二つの座蒲團を薦めて、さて改めて挨拶する、久保田は此場合ワザと面を反向けて沈黙を守り、二人が交換する挨拶に注意してゐる。

「静子さん！、好く無事でゐてくれました、大層苦勞をなすつたさうです、實に濟まないことです、久保田君のお蔭で茲に再會を期し得たのは宛然夢のやうですよ、静さん僕は感情が破裂しさうです、ナ、懐しいです、嬉しいですよ。」

「先生！、ア、貴郎も御無事で、ワ、妾、本統にお懐しうございます……。」

静子は胸に漲る情の波に、心弱くも詞が塞がつて、思ふ心の萬分一もいひ得ない、感情が極つて座に耐へず、そのまゝ俯伏に、半巾を顔に押し當て、嬉し泣きに泣いた。

小金井も静子と同じことで、全然夢心地に殆んど無意識の中に静子を嘔めてゐた、久保田は同情深い眼を二人の上に注いでゐたが、やがて膝を押し進めて。

『時に小金井君！、約束の通り三日目の今日、蘇生つた静さんをかうして君の處へ連れて來たぞ、此上は静さんに對する處置を什麼するか、それは君の自由意志にあることだ、但し俺がこの二日間、静さんを君に逢せなかつた理由を今いふて聞かせる、静さんの軀は君の奉職してゐる外島において、君の留守中充分綿密なる試験に依つて無菌者と決定したのだ、何等忌むべき血系を傳へない完全な婦人として保證を附けられて來たのだ、即ち今日まで君と静さんが結婚しやうとしても而かも結婚し得られなかつた幾多の障礙は根本から覆されたのだ、雲霧を拓

いて烈日を見るに至つたのだ、俺が玉枝さんと結婚の當日以前に解決するといつたのは即ち此事だぞ、よき消息を齎して逢はせ得るか、依然たる静さんとして逢はせねばならぬかといつたのは此の事だ、一たび君等二人に怨みを受けた久保田實は、茲にかういふ大なる土産を添へて静さんを君にお渡しすることが出来るやうになつたのだぞ、俺は心からそれを嬉しく思ふよ！』

(三十二)

久保田は我事のやうに熱して、ポケットからかの保養院の報告書を取り出して一雄の前に置いた。

『即ち之だ、之が静さんの體を保證するものだぞ、君の師事し且つ信頼する菅原博士の名に依つて堅く保證されてゐるのだ。』

一雄は久保田が熱心に辯ずる詞を、一語も聞き洩らすまじと、膝を乗り出して黙つて聞いてゐた、面は火のやうになつて全身の血潮が茲に集つたかと思はれるほどである、體は感情の衝動に依つて神経的にブル／＼と震へてゐる。

静子とは見れば、涙を拭つて面を上げたが、絶えず良心の苛責に逢ふやうに俯向いたまゝ面

を挙げやうともしない、時々一雄の様子を窺み見てはゐるが、不安に唆られるらしく、すぐに面を伏せて了ふ。

「ク、久保田！、久保田君！、小金井一雄は改めて君に感謝する、誠心誠意を以て厚い親友の情誼に酬いるつもりだ嬉しい、忝けない、久保田君！、僕は感情が昂つて曰ひたいことが澤山あるのだが詞が詰つて曰ひ得ない、許してくれ給へ、宜いかい。」

報告書に見入つてゐた一雄は、突如に久保田の手を執つて、堅く之を握り占めた、熱い滴が久保田の掌上に玉と落ちた。

「イヤ何も決して俺の骨折でも何でもないのだ、そんなに曰はれると、俺は却つて面目次第もないのだ、何事も天の配劑だよ、循環する運命が自然に二人をめてたく邂逅さしたのだ、僕はたゞ此一事をなし得たことに依つて、君にも静さんにも過去に負ふてゐる罪を帳消にして貰はうかと思つてゐるくらゐなのだ。」

「飛んでもない、何んで君の過去に罪があらう、君が我々二人に盡してくれた心地は始終一貫して誠實であつたのだ、誠實の友！、親愛の友！、僕は感謝する、静さん！貴女も久保田君にお禮を曰はなければなりませんぞ。」

「ハイ……久保田先生、有難うございます。」

「アハ、、然う両方から眞面目で禮を曰はれては、僕は立つ瀬がない、穴があつたら這入りたい位のものだ、アハ、。」

久保田はワザと陽氣に笑つて、陰氣に沈んで行く二人の氣を引き立たせやうと詞を反して話の鋒尖を變へた。

「それはモウそれでよしとして、さて次に來るべき問題だ、静さんは間關流離苦節を保つことに茲に二年有餘、優曇華の花咲く時節が來て君に邂逅つた、そして心配した血統問題はその心配を杞憂に終らせたとすれば、當然起るべき順序は結婚だね、オイ、小金井！、玉枝さんとの約婚を無論破談だらうな。」

「エイ、破談！」

一雄は何故か急に腕を組んでグッタリしたやうに思案に耽つたが、暫くして面を挙げた時には優すべからざる決心の色がほの見えた。

「諾！、之にはいろ／＼の混入つた事情があつて餘義なくする愛のない結婚だが結婚はやはり結婚に相違ないのだ、今更未練らしく何事もいふまい、一切のことは關中に葬つて静さんとの

約束を履行する、断じて履行するから安心してくれ、玉枝さんには早速破談を申入れる。」
 「さうか、イヤ、それで俺も安心だ、一切の責任は之で肩から下りるのだ、ちやア俺はモウ歸るよ、診察時間を繰り合して來てゐるのだから、これだけの話をしたら、後は直接に静さんと對談してくれ！、細いとはまた静さんに逢つて聞く。」

「ちやア君はモウ歸るのか、本意ないなア。」

「先生！、久保田先生！、モ少しゐて下さる譯には行かないのでムいませうか。」

静子は心細さと不安とに胸をドキ／＼させて久保田を引き止めやうとしたが、久保田はワザと氣を利かせて笑ひながら二人を後に海濱館を出た。

(三十三)

取り残された二人は、暫し詞の繼ぎ穂がなくて手持無沙汰に、氣まり悪るさうな様子をして黙つてゐたが、やがて一雄は昂ぶる情を抑へ得ぬやうに、ツとその膝を摺り寄せて、突如に静子の左手を牽と執つた、一雄の肉を透して通ふ熱い血潮が、静子の肉と相觸れた時、静子自身も亦感情の躍るを覺えて、その右手に對手の左手を握り返した、兩人の胸に燃え立つた焔は此

一刹那において合して一團となり、何ものをも焼き盡さずんば消滅しまいと思はれて、心と心に通ふすべての思ひは無言の間に相通じ、天上天下二人の外に何物をも見得ることはできなかつた。

「静さん！……。」

「先生！……。」

「僕は夢を見てゐるのちやアないでせうか、此世で再び静さんの顔を見るといふことがあり得るでせうか、静さん！、堪忍して下さい、貴女をして今日のやうな悲惨な境遇にあらしめたのは皆僕の罪です、許して下さい、然し僕の心は今も昔も否永久に不變です、愛は一貫して渝らないのです、僕がアノ絶縁の手紙を出した後にまた一通の……。」

「先生！、萬望モウ昔のことは仰有つて下さいますな、妾、久保田さんから聞いて皆知つてゐるのでムいます、それをまた貴郎の口から聞かして頂くのは、モウ一度泣かされるのと同じこととムいますから、昔のことは曰はないことに致して下さいませんか。」

「左様ですか、ちやア曰ひますまい、然し當時の僕の心はよく貴女に了解されてゐるのでせうか、僕はそれが氣がよりです。」

「勿體ないことでありますわ、静子は什麼な詞を以て、此二年の間の、貴郎の厚い御恩召に御禮、曰ふて宜いのですか、判らないくらゐです、そんなに仰有られると、妾、穴へでも這入らなければなりません、夫よりか先生！、貴郎、玉枝さんとの御縁談……モウ日がないので、ムいませう。」

「イヤ、そのことは今僕が茲に至つて事情を御話しやうと思つてゐたのです、貴女が突如に之を御聞きなすつたら、その生死如何に拘らず、愛を二三にする浮薄な男子、節操を汚した軽浮な男と曰はれるかも知れません、人もあらうに平生仇敵視してゐたその玉枝と結婚するといふのですから、貴女に然う思はれても仕方がないのです、然し之には深い事情があるのです、僕自身の人格を無視し、自分の主張を棄て、母の犠牲になつたのです、涙を揮つて愛のない結婚を承諾したのです、僕の愛は今も昔も静子さんの外何人にも注がれたことはないのですよ、宜ござんすか、事情を曰へと仰有られると僕は困るのです、家庭の内幕を明さなければなりませんからア、それを静さんに曰ふとを忌むのではありませんよ、再びそれを思ひ出すことが耐へられない苦痛なのです、静さんが今も昔と同じやうに僕の人格を信じて下さるならば、此ことも信じて下さい、そして僕の不徳を咎めないで下さい、宜ござんすか。」

「ト、飛んでもない、何んで妾、そんなことを思ひませう、妾、自身が生きてゐたために折角整ひかけた御縁談を若しか破るやうなことがあつては濟まないと思ふので、ムいませう、それでお聞き申したので、ムいませう……。」

静子は慌て、かう曰つたが、然しそれは静子の本意ではなかつた、静子は前夜煩悶に煩悶を重ねた結果強くなつて、最初の意志を遂行しやうと決心はしてゐるのだが、ともすると氣運れがして心にもなく弱い音を吐くのであつた。

(三十四)

「イ、ヤ破れても差支ないのです、破れることを望むのです、縦し破れなくとも、今も久保田に公約した通り、静子さんが生存して然かも無菌者である以上、之を破つても差支ありません、然うです、如何なる難關に出逢はうと、斷じて破らねば置きません、その代り之を破るには非常な決心を要します、非常な勇氣を要するのです、静さん！、貴女も強くなつて僕の弱い意思を助けて下さるでせうねえ。」

「妾、妾、貴郎の妻になることを御許し下さるのでせうか……。」

「何を今更になつて下らないことをいふのです、許すも許さんもないぢやアありませんか。」
 「……ですけれども妾、昔のやうな身ではないので、います。」
 「エーッ、では何か結婚されない事情でもあるといふのですか。」
 一雄は氣色ばんで膝を乗り出した、静子は無意味に曰つて脱けたつもりであつたが、一雄の劍幕の音ならぬ態に、ハッと吐胸を吐いた、又しても辻のことが幻の如く眼の前に浮ぶ、思はず身を慄してゾツとした。

「イ、イ、エ、ソ、そんなことはないのですが、妾、賤しい藝妓……女優……アノ婦徳のゼ、ロ、いは、醜業を營んだ身で、いますもの……。」

「アハ、……何を曰ふのかと思へばそれですか、藝妓……女優……差支ありません、數奇な運命に弄ばれて餘義なくされた境遇なら仕方がないです、藝妓になつたから必らずしも婦徳がゼロになる譯ではないのです、女優になつたから必らずしも世間から指弾される理由はないのです、要するに境遇が何んであらうと、女子に尊むべき處は巍然たるその節操です、静さんが藝妓になり女優になつたに於て、處女は依然として處女ですよ、いくら立派な扮装をして紳士の令嬢で候の、富豪の姫様であるのといった處で、處女の節操がなかつたらそれが何んに

なります、襪縷に包まれても玉は光を放つものです、錦にくるまつても瓦は終に一塊の土たるを脱かれませんが、婦徳といふものはそんな薄ッぺらなものではない筈です、何をしたつて心に清いなら疚しい處はありません、疚しい處のない人間ほど強いものはないのですよ、静さん！、そんな下らないことを考へてゐますと我々の戀は終に圓滿なる解決を見ることができなくなります、少し確乎して下さらなくツちやア困るぢやアありませんか。」

一雄は諄々として信する處を熱心に静子に説いた、静子は一雄が顔を火のやうにしつゝ熱心に説く毎に、それとは反對に次第々々に青くなつて、面は死んだ人のやう、一雄の詞が七首で刺すやうに、轟々と胸に應へる、静子は悶ゆる心を一雄に覺られまいと、胸を両手に抱いて肩で息をしつゝ、ジツと苦しい思ひを憶へた。

静子が抱く心の秘密を神ならぬ身の何んで一雄が氣が附かう、寧ろ静子の態度を訝んで、まだ玉枝のことに不快の感情を抱いてゐるのではないかと思しめた。

「静さん！、何もそんなに考へ込むほどの問題ではないのです、但し今となつて貴女は僕と結婚することを好まないのですか……。」

「イ、イ、エ、ド、どうしてそんなことを……。」

「ちやア決心して下さい、僕は断じて玉枝さんとの結婚を破棄します、破棄した後の行動は互の決心如何にあるのですよ、宜ごさんすか。」

「ですけれども、妾……。」

「モウ宜ろしい、萬事は僕に任して置いて下さい。」

静子は曰はんとして曰ひ得ず、昨夜の決心も根底から破れて了つた、彼は新しい立場を求め、るかさもなくば、清い一雄を欺くより外に道なきに至つた、欺く心は露ほごもないが、懺悔をなし得ずして一雄のいふがまゝに任したのは欺いたのも同様である。

と思つて度胸を据ゑた。

(三十四)

「叔母さん！、什麼したら宜いでせう、今になつて一雄さんも随分だわ、妾、待てなら待て、何時までも待てよ、ですけれども、今度の延期は何だか理由がありさうだわ、叔母さん、什麼しませう！」

玉枝と一雄との結婚式がモウ中一日に迫つて、小金井一家も丹羽一家もその準備に忙しいと

いふ昨日になつて、突如に一雄は擧式の延期を丹羽の家に申し入れた同時に母に對してもまた都合に依つて少し延期するといつた、母の驚きは一通りではない、宥めたり、賺したり、さまざまの方法を以て一雄の心を翻さうとしたが一雄は頑として應じなかつた、そして延期の理由としては突然病院の方に研究すべき一大事件が起り、休暇も丁度満限になつて急いで歸らなければならぬといつて今朝の一番で大阪に歸つた。

母も玉枝もそれを見送つて、先刻歸つて來た、而して延期された結婚問題を什麼しやうと二人は額を鳩めて相談するのである、玉枝は前の失敗に懲りて、腹立つ胸をジツと怵へ、波立ち騒ぐ心の亂れを強ひて抑へつゝ、飽くまでも自分味方である一雄の母の袖に縋つて、此の戀を遂げやうとした、玉枝が心配する如くおなかもまた酷く今度の延期に心を痛めた、萬一之がこのまゝ破談にでもなるやうなことがあつたら、今度こそは全く丹羽家との交情を断つて、仇同士にならなければならぬ、イヤ、仇同士になつただけでは濟まない、自分は丹羽家を欺いた罪を一身に背負つて、その申譯をしなければならぬと思つた、で、是處は何處でも玉枝に短氣を起させぬやう、よくよくそれを宥めて置いて一雄の心も聞き、その上で説得するより外に手段はないと思つた。

「什麼するもかうするもありやアしませんよ、玉枝さんも大變氣が弱くおなりなのですわねえ、確乎おしなさいよ、萬事は妾の胸にあります、大船に乗つた氣でお出でなさい。」

「そりやアモウ叔母さんが附いてゐて下さるのですから、妾、安心はしてゐますけれど、一雄さんは猫の眼のやうに、始終グル／＼氣が變るんですもの、妾、心配ですわ。」

「ナアニそんなに心配することはありません、今度は先の時とは譯が違つて結納まで取り替へて、日取までチャンと極めてあつたのですからいくら、一雄が駄々を捏ねた處で、捏ね通せるものではありません、安心してゐらっしゃい、全く病院の方に何か取り込んだことがあるに違ひないので、玉枝さん！、貴女ねえ、短氣を起しちやアいけませんよ、妾が附いてゐますから、屹度宜いやうにします、お父さんやお母さんにも、いろ／＼なことを曰はないやうにして置いて下さいよ、たゞ病院の方に急用が出来て、歸阪つたのだといふて置くのですよ、宜ごさんすか、さうしないとお父さんやお母さんがお心配なさるからねえ、宜くつて玉枝さん？、判つたでせう。」

「エイ、宜く判つてよ、でも、妾、本統に心配ですわ、若しかまた静子さんでも生きてゐたんちやアないでせうか、ねえ叔母さん。」

「何んですねえ、莫迦々々しい、一度死んだものが、また生き返りますかねえ、取り越し苦労をして詰らないことをいふものちやアありませんよ、大丈夫、妾に任してお置きなさい。」

「ちやア叔母さんに任して、妾、何にも曰はなくつてよ。」

「さう／＼、それがよろしい、さう何も彼も心配しちやア耐りませんよ。」

「それも然うねえ。」

(三六)

玉枝が小金井の家から歸つて自分の部屋に這入ると、店から若い番頭が遣つて来て、敷居際に手をつきながら。

「お嬢さん、先刻方、此お方がお出でになりました、是非御目に懸りたいと曰ふのです、へえお留守だつて申しましたら、ちやアモウ少し後に來るから、お歸りになつたら之を渡してくれつて、此手紙を置いて参りました。」

番頭は一葉の名刺に一封の書狀を添へて玉枝に渡した、玉枝は何氣なくそれを手に取つて見たが、聞いたこともなければ見たこともない全く知らない人である、不審の眉を皺めて、無言の

まゝ封押し切つた、番頭は曰ふだけのことを曰つて、店の方へ行つて了ふ。
 玉枝は手紙の始から終りまで、讀むに従つて意外の驚きに打たるゝ如く、面は見るゝ蒼白になつて、手はワナ／＼と慄へ、息は喘んで、やがてその眉根には例の痲癩筋が神經的にビリ／＼と動いてゐる。

「ク、口惜しい、ド、什麼せこんなことだらうと思つてゐたのだ、それにしても此人は何だかふ人なのだらう、何の的があつて、妾の處にこんな手紙を寄越したのだらう、兎に角尋ねて來たら逢つて見やう。」

玉枝は獨語ちつゝ、物思ひに耽つてゐる時、先刻の番頭がまた這入つて來て。

「お嬢さん、先刻の方がお見えになりましたが、如何致しませう、お逢ひになりますか。」

「然うねえ、什麼な人だい。」

「什麼なツて、何だか眼のギロ／＼した忌な奴ですよ、へえ、年頃ですか、然うですなア、三十前後でせうか。」

「什麼な風をしてゐる……。」

「左様、洋服ですが、あまり立派な風ぢやありませんなア、まゝづ三百の手下か、金貨の

頭とでもいひたい處でせうなア。」

「然うかい、什麼しやうねえ、逢つて見やうか。」

「逢つて見やうかツて、お嬢さん、貴女御存じない方ですか。」

「あア、妾、知らない人なんだよ。」

「へーイ、ちやアお止しなすつたら宜いでせう、あんな奴がお店に出入りするのには、あんまり體裁が宜くムいけませんからねえ。」

「それもさうだけれどもね、先刻の手紙を見ると、小金井さんの方の知つた方らしいのよ、だから、さう素氣なく返す譯にも行かないだらうと、妾、思ふのよ。」

「でムいますか、小金井さんの……へえちやアお通し申ませう、是處へツウと御案内してもよろしうムいますか。」

「あア、是處で宜いよ、兎も角も逢つて見るから通しておくれ。」

「承りました。」

番頭は出て行つた、暫くすると、二十八九、三十ぐらゐとも見ゆる、頭髪をハイカラに分けた、嫌味たつぶりの、小脇に折靴を抱へた、風采の揚らない洋服男を案内して其處に這入つて

来た。

物に恐ろしい大膽な玉枝も、初対面ではあり、何んもなく薄氣味の悪い相手の風采に、幾分か恐気が附いて、遠くの方から座を薦めて、挨拶をした、その男は忌な笑ひやうをして、玉枝の面をジロリと一瞥し。

「之はお初にお目に懸ります、貴女が丹羽玉枝さんでゐらつしやいますか、然うでゐますか、僕は當時大阪共融貯蓄銀行に居ります辻芳三といふもので、以後御心易う御願ひ申上ます。」

「左様でゐいますか、什麼ぞ宜しく……。」

玉枝は淑雅に挨拶をした、男は意外にも入獄してゐる筈の悪魔辻芳三であつた。

そもく辻は如何にして大阪に現れ、また如何にして玉枝を知り、如何なることを語らうとするのであらうか。

(三十七)

芳三は糞落附 落ちついて、煙草を燻らしながら、薦められた茶に咽喉を濕しつゝ、薄氣味の悪い、嘲けるやうな笑ひを洩らした。

「先刻の手紙を御一覽下さいましたか、ちやア概略のことは御判りでゐませうが、貴女は山田静子といふ女を御存じでせう。」

「ハイ……。」

「その静子が目下大阪に来てゐることは御存じないでせう。」

「エーッ……、静子さんが……、アノ静子が……、大阪に……、まア生きてゐるのでゐいますか。」

「アハ、貴女もやはりおめでたい人ですよ、静子は死んだと思つてゐらつしやるのですか。」

「アハ、夫ちやア天下は泰平だ、お氣の毒なものですなア。」

「ソ、それは、ド、什麼いふ譯でゐいますの、お願ひですから聞かして下さいませんか。」

「逐一お話を致しませう、無論御話をしやうと思つて來たのです、静子の過去、現在、並にその未來に渡つての恐るべき境遇から、貴女が命までとお騒がなさる小金井醫學士の秘密まで僕は逐一知つてゐるのです……お話を致しますよ、無論申します、然しですな、實は僕は仔細あつて此静子と小金井學士との戀の仲間に挾つて、つまらない犠牲になり、少からの資産を蕩盡しました、只今では零落して這んな境遇に落ちてゐるのです、それがために實にお耻しい話で

玉枝は仕方なく、起つて手文庫の中から小切手を取り出し之に金額を書き入れて芳三の前に置いた。

「只今現金の持合がムいませんで、之をお渡しいたします。」

「イヤ結構です、ちやア御遠慮なしに頂戴致しませう。」

辻はそれを受取つて丁寧になかしの紙入の中に納めて、さて膝を進めた。

(三十八)

「驚いたでせう、驚くのは御有理です、静子は身を投げやうとする處を助けられて藝妓になつたのですよ、静子が藝妓時代の旦那といふのは即ち僕です、無論情交もあり世話もしてゐたので、その時分の僕は東京でも有名な銀行に或る重要な職を勤めてゐたのですが、仔細あつて没落したのです、従つて静子の小静とも分れなければならぬ仕誼となり、二人は右と左に別れたのです、僕と別れた後の小静は今女優になつて昨今大阪の辨天座に出勤してゐると、かういふ順序になります、アハ、、、。」

玉枝は辻の物語があまりに意外なので驚くとよりは、寧ろその詞を疑つた。

「辻さん！、それは本統のことでムいますか……でもあんまりなことで、嘘らしいやうに思はれますわ。」

「アハ、、、、嘘らしい？、無理もありません、然し貴女が之を疑ふなら、論より證據、大阪へ行つて辨天座の舞臺を見たら判ることです、そればかりか、僕はチャンと静子の宿も突き止めてあるので、序にそれも教へて上げませう、宜ごさんすか、道頓堀の濱澤屋といふ、よく俳優の泊る宿屋です、藝名は岩井七五三花！、七五三八の弟子ですよ。」

「まア本統でムいますかねえ、ですけれども静子さんも、よく思ひ切つてそんなに墮落されませんでしたこと、呆れて了ひますわ、ちやア疾うの昔に處女の節操を破つてゐるのですわねえ、大した莫蓮の女だこと、よく猫が冠つてゐられますわ、外面如菩薩とはこんな人をいふのでムいませうねえ。」

「アハ、、、、戀敵だと思つて酷く罵倒しますな。」

玉枝は戀敵と曰はれて、サツと面を赧めたが、すぐそれを外して何氣ない風を装つた。

「玉枝さん、貴女はまだ静子の上について、モット驚くべき一大秘密のあることを御存じがないでせう、却々これぐらゐのことちやアありませんぞ、これだけいつても二百や三百の價値は

貴女になら充分あるのです、惜しいけれども大負けに負けて曰つて了ひませう、驚いちやアいけませんよ、宜ござんすか、静子は癩病です、人の最も忌む癩病ですよ、癩病の系統を引いてゐるのです。』

「エーッ……、静子さんが、癩病！、まア忌らしい、汚ないこと！、本統ですか。』

「貴女も疑ひ深い人ですなア、そんなことが冗談に曰へるものですか、曰へないのですか考へて御覽なさい。』

「ア、汚はしい、そんな忌らしい人と一度でも口を聞いたかと思ふと、ゾツとしますわ、一雄さんだつてそれを聞いたら大概愛想をおつかしなさに極つてゐるわ。』

玉枝は最後の詞を獨語のやうに、小さい聲で曰つた、辻は早くもそれを聞き答めて、笑ひながら。

「アハ、……ですから、貴女はおめでたいといふのです、小金井學士は静子の癩病を疾うの昔に知つてゐるのです、知つてゐるから、癩の研究に従事して之を全治す方法を考へてゐるのですよ、そんなことは大抵直覺で連想がでささうなものです、アハ、……。』

「ソ、そんなら一雄さんが癩の研究所にゐるのは、アノ静子の病氣を治すため……まア妾、

什麼しやう！。』

玉枝は辻の前をも憚らず、嗜みもなくうらたへた、そしてその眼は嫉妬の光りに燃えてゐる辻は早くもその様子を見て取り。

「什麼するもかうするもありやアしません、御心配なさいますな、癩の一事と静子の藝妓時代の旦那たる僕との情交を静子に面責すれば、静子はそれで致命傷を負ひます、静子が今煩悶してゐるのは屹度その節操問題だらうと思ふのです、之だけを教へて上ませう、後は貴女の機轉でやつて御覽なさい、勝利の榮冠はやがて貴女の上に来ませう、ナアニ失敗したら、また貴女の參謀になつて上げます、ちやア僕は失敬します、御用があつたら名刺の肩書の處へはがきの一本も寄越して下さい、又御相談相手になりませう。』

辻はしたり顔にサツサと歸つて行く、玉枝は後にたゞ一人、胸を抱いて深い思案に耽つた。

(三十九)

玉枝はその夜を煩悶に明した、辻から聞いた静子の一身に纏る秘密は、皆玉枝の耳に新らしいことばかりである、此屈竟な材料を提けて、一雄に肉薄して見やうかとも思つた、またおな

かに、打ち明けて相談しやうかとも思つて見た、然し辻は静子が今煩悶してゐるのはその節操問題だといつたのを玩味して、是は直接に静子に打ッかつて、静子が自分で一雄を諦めるやうに仕向ける方が策としても苦肉であり、勝利を得るにも極めて易々たるものであらうと思案を定めて、然うしやうと決心した。

翌くる朝は早く起き、母には友人を訪問するといひ繕ひ、大阪急行の二番汽車で難波に向つた、下車してから辻に教へられた日本橋の濱澤屋に俾を飛ばす。

静子と相對して負を取るまいといふ、妙な敵愾心と一種の誇から、玉枝は此日思ひ切つて華麗な盛装を凝らした、被布仕立の半コートの襟からは頸にかけて金鎖がキラ／＼と目を射る、襟を止めたピンは豌豆大のダイヤで、頭にも指にも金やダイヤや真珠なぞがキラ／＼と光つてゐる、全身是れ貴金屬寶石の化身とも身えて、現代婦女子の虚榮心を遺る處なく發揮してゐた。

濱澤屋の玄關に立つた時は、女中輩が皆目を睜つてその華美な風俗に驚いた、近處づからの南地にも、這んな綺羅を飾る藝妓は數へるほどもあるまいと思はしめた。

女中に取次がれた静子は丹羽玉枝と聞いて一方ならず驚いて、胸の轟くのを覺えたが、さり

とて之を避ける譯にも行かぬ、什麼して自分の居所を知つて、何んの用事に來たのであるかなぞと考へる違もあらばこそ、人なき寂な座敷をと、女中に頼んで兎も角も玉枝を北側の離座敷に通して置いた。

何れは一雄に關する問題であらうと思はれるので、對談してゐる間にも、玉枝に見送られるやうなことがあつてはならないと、適に静子として若い女性の、幾分か負けぬ氣もあつて、之は玉枝とは反對に、極めて質素な地味な柄を選んで身装を繕ひ、不安の胸を抱いて玉枝のゐる座敷へ淑雅に打ち通つた。

玉枝は床を背にして傲然と座蒲團の上に座つてゐる、静子は適にその正面には座り得ないで横手の方からジロリと玉枝の姿を一瞥して挨拶をする、玉枝は蒲團を滑らうともせず、そのまゝ尊大に禮を返した。

挑戦の火蓋はまづ玉枝の口から切られた、玉枝の面には始終輕侮の色が浮んでゐる。

「まア静子さん、貴女大層御變りなすつたわねえ、東京でお目にかゝつた時から見ますと、大層意氣にお成りでしたね、やつぱり争はれないものね、境遇の變化といふものはすぐ人の形まで變へるものですかねえ、何れ心だつてさうでゐいませうねえ。」

「……………」

「オホ、、、今は女優になつてゐらっしゃるんですって、面白い御商賣ですこと、でも俳優といふものは河原を食たとか何とか曰つて侮辱されてゐたものよ、ですけれども今ちやアそんなことはないわ、ねえ静子さん、立派な紳士や代議士の令嬢が、わざわざ女優學校に入學してそれを修業する世の中ですもの、よく思ひ切つて其處までにおなりでしたわ、妾、本統に静子さんは豪らいつと思ふのよ、オホ、、、」

「什麼も誠にお耻しい次第でゐます、こんな境遇にあることを、よもや貴女方に知られりやうとは思つてゐませんので……然しそれはそれとして、玉枝さん、わざわざお出で下さつた御用向は什麼いふことでゐませう、仰有つて戴きたいものですが……」

(四十)

「ハア、今日御邪魔に上りましたのは、外でもゐりませんのよ、貴女、此頃一雄さんにお逢ひなすつたでせうねえ。」

「ハイ……アノイ、エ……」

「お隠しなさらなくても宜いとよ、逢つたのなら逢つたと仰有つて下さいな、妾一日二日の中に一雄さんと結婚するのでゐますよ、實は昨日式を擧げるつもりでしたが、一雄さんの方に急に用事がお出来になつたので、延ばしましたのよ、承れば貴女、それを御存じで、妾を排斥なさらうとしてゐらっしゃるさうですわねえ、貴女は妾と一雄さんとの縁組を破談にして、御自分が一雄さんの奥さんにおなりなさるつもりですって、本統ですか？、エイ静子さん。」

「……………」

「貴女、黙つてゐらっしゃるの、卑怯だわ、然うなら然うと仰有つても宜いちやアムいませんか。」

「……アノ、若しか、妾……一雄さんと結婚すると申し上げたら、貴女、什麼するおつもりなのでゐます。」

静子は何か決心する處あるものゝ如く思ひ切つてかういつた、玉枝は待ちかねたといはぬばかりに、静子の面を覗めて冷笑むやうに。

「オホ、、、什麼しやうとも申しませぬわ、いくら貴女がおなりなさらうとなすつても、貴女は一雄さんの奥さんになる資格のない女ちやアムいませんか、随分鐵面皮しいことを仰有る

わねえ。』

『ニーツ、資格がない、ド、什麼して妾に資格がないのでムいますか?』

『オホ、、、、貴女も随分押しが強いわ、一雄さんは品行方正の紳士よ、現代見るやうな遊蕩兒が奥さんをお迎へなさるのとは違つてゐますわ、藝妓や女優になつてゐたものを、清い紳士の初嫁として迎へられるものか、迎へられないものか、考へて見たら判るぢやアムいませんか、オホ、、、、本統に静子さんも圖々しい人だわ。』

玉枝は得意になつて針を刺すやうに、チク／＼と静子の肺腑を刺つて行く、静子は目のあたり此侮辱と冷笑とを聞いて腸を寸断されるやうに口惜さがこみ上げてくる、けれども玉枝の曰ふ處は皆理の當然である、之を正面に辯解しやうとすれば、却ていひ負かされて了ふ、けれども静子には『一雄の心』といふ唯一の味方がある、正兵を以ては玉枝の侮辱に打ち克つことができないけれども、奇兵を放てばまた玉枝を窮地に立たせることもできやうと、咄嗟に血路を開いて憎い憎い玉枝に反抗しやうと決心した、静子はともすると弱くなりさうな氣を刷して。『一雄さんが人格の高い御方といふことは今改めて貴女から御説明を戴かなくとも、妾、よく存じて居ります、藝妓になりましても、女優になりましても、女には婦徳といふものが缺けて

ゐさへしなければ、何處へ出ましても疚しいことはムいません。』

『へエーツ、大層立派な口をお聞きなさるわねえ、妾、貴女の口から婦徳論を聞くなんて、盗妬から孔孟の教を聞かさせるやうなものですわ、オホ、、、、本統に貴女は圖々しい女だわねえ、貴女には辻芳三といふ情夫があるぢやアムいせんか、情夫を持つて處女を装ひ、その體で、清い一雄さんを欺いて結婚しやうなんて、それは天が許しませんよ、ねえ静子さん、貴女よもや辻芳三を知らないとは仰有られますまいねえ、婦徳論が聞いて呆れますわ。』

『エーツ、辻……芳三……貴女はド、什麼してそれを、ゴ、御存じなのです。』

静子は思はずかう曰つて、アワヤその場に倒れやうとしたが、負けじと思ふ敵愾心から背とその胸を抱いて辛くも己が體を支へた、然し立ち騒ぐ胸は容易に静まる模様もなく、吐く息と肩の戦きに胸中の煩悶が外目にもそれと知られる。

(四十一)

玉枝の此一言は確に静子の急所を衝いた、静子のためには大なる致命傷であらねばならぬ、玉枝は静子が慌てた態度を冷かに眺めて勝ち誇つた色を示しつゝ。

「什麼して知つてゐるかとお聞きなされるのですか……宜しうムいます、申上げませう、貴女の秘密は妾、皆、貴女の情夫、貴女の大事なお方、その辻芳三さんから残らず聞いたのでムいますよ。」

「エーッ、辻に……芳三から……まア……。」

「驚いたでせう、静子さん、貴女こんな秘密を懐いた汚れた軀で、それで一雄さんの處へ嫁けると思つてゐらッしやるの、これでまだ資格があると仰有いますか……オホ、よもやあるとは仰有られますまいねえ。」

「……イ、イ、エ、ワ、妾、有ると申します、妾、あると屹度申して見せます、ッ、辻芳三なんかの曰ふと、何が的になりますか……辻は、ア、悪人です、何日歸つて來ましたか知りませんが、罪人になつて縛られた男です、ワ、妾に不義の戀を仕かけ、ッ、それが叶はぬ無念晴しに、貴女を焚きつけて妾を中傷したのです。」

静子は此場合玉枝に對して、負けまいとすれば什麼しても嘘を曰はねばならないのだ、彼は防禦の策として、かう答へた。

「辻さんが妾に中傷したと仰有るのですか、オホ、それならそれで宜しうムいます、

貴女の良心にお聞きなされれば判ることですからねえ、然し静子さん、お氣の毒ですが、貴女にはまだモット大きな秘密があることを妾よく知つてゐますのよ、静子さん、貴女の血統ねえ、つまり家系ですね、アノ血系ですよ、是が知れたらよもやジツとしてはゐられないでせう。」

玉枝は空嘯いて今度こそ静子が兜を脱いで、降参するだらうと思つたが、静子は案外平氣である、玉枝は少し豫期に反して、這んな答をするのかと、外した面をまた此方に向けた。

「そのことでムいますか、それならば貴女よりも小金井先生の方が先に御存じで……なるほど血系は人に忌まれる血統でムいますが、妾の軀は立派に試験されて無菌者といふ證明があるのでもムいます。」

「……エーッ、一雄さんが知つて……そして貴女が無菌者……では貴女は、その軀でいよく妾の結婚を妨げて、一雄さんをお取りなさるつもりですね……。」

玉枝はサツと顔の色を變へて、たゞならぬ劍幕を示した、静子は少し沈着いた態度になつて。

「ハイ、妾、貴女が這んな侮辱をなさらないで、女らしく戀を譲れとお話でしたら、妾は随分貴女の犠牲にならないこともないのでムいますが、今となつては妾も意地から貴女の結婚を

妨げて、一雄さんを頂戴致します。」

「ッ、そんなら資格のないその汚れた軀を以て……。」

「軀は汚れても心まで汚れては居りません。」

「キ、屹度ですね、情夫のある軀で、嫁入るのですね、宜しうムいます、妾の方には生きた證人の辻芳三といふ人を控へてゐるのですから、白い黒いは辻さんの一言に依つて極りますわ、その時になつて卑怯なことを仰有いますな。」

「御念には及びません、妾には『一雄さんの心』といふ、誰れが來ても奪ふことのできない味方を持つてゐるのでムいます、一雄さんは弱いものゝ味方でムいます。」

「ヨ、よく仰有いました、その御詞を御忘れなさいますな、では失禮致します。」

「何んにもお介ひ申しませんで……。」

玉枝は荒々しく席を起つて、静め得ぬ怒を押へつゝ濱澤屋を出た、そしてその足で、辻芳三の宿を訪れた。

(四十二)

七五三八一座の女優大入つゞきの中に閉居を告げた、仕打は是非とも二の替りを出さうといふので、相談が決つて二月興行をモウ一杯打つことになり、一座はそのまま大阪に滞在してゐた、次興行の稽古を始めるまでにはまだ二三日の餘裕があるので、座中の誰彼は此兩三日を安息日にして、其方此方と遊び廻る。

静子の七五三花は此間に何とか一身の處置を附けねばならないと思つた、玉枝が自分の秘密を知り、辻までが大阪に來てゐるとすれば四面殆ど敵である、此の敵中を巧みに切り抜けて首尾よく一雄と結婚することができやうか、それを思ふと静子はたゞ々々心細さが身に沁むばかりである。

玉枝は新に辻芳三を買収したらしい、とすれば静子に取つて容易ならぬ敵が一時に二人現れたのである、今までのことは何も彼も一雄に打ち明けて懺悔してゐるから別に恐ろしいことはないが、たゞ一つ久保田にも小金井にも隠してゐる秘密がある、静子はそれを敵に知られてゐるのだ、静子の性質として一雄の前では兎ても玉枝に曰つたやうな偽りを曰ふことはできない一雄が静子の今の境遇を知りながらも、尙昔に渝らす熱烈な愛を注いでゐるのは、静子の心が決して濁りに染つてゐないことを認めてゐるからである、縦し藝妓になつたにもせよ、女優に

なつたにもせよ、依然として操を全うした清い處女であると信じてゐるからである、一雄の心地は何日ぞやの話でよく判つてゐる……境遇が何であらうと、女子に尊むべき處は巍然たるその節操だ……と曰つた、果して一雄が曰ふやうに静子はその處女の節操を全うしてゐるのであらうか、と思ふと静子は悚然として恐れ、慄然として戦き、又しても遺瀨ない思ひに鎖されざるを得なかつた。

静子は朝から自分の部屋に籠つて、一人深い物思ひに耽つたのである。

『如何一雄さんの心が自分の味方だとは曰へ、それは一雄さんの仰有る通り、自分の心に疚しい處がなくツて始めて得られるものなのだ、一雄さんだツて、玉枝さんが辻から聞いたやうなことを、耳にするならば自分を心まで墮落した女と見て愛想をつかされるには極つてゐる、節操を命にしてゐらツしやる一雄さんがそのゼロなことを知つて、什麼して自分に心を傾けられやう、自分は決して心から節操を汚したものは思はない、成るほど肉は悪魔芳三の毒牙に罹つて汚された、けれども靈までは汚されてゐないのだ、自分勝手かは知らないが、その肉だツて抗す可らざる力で汚されたのだ、だからそれを懺悔して一切のことを一雄さんの前に述べたなら、一雄さんは自分の罪を許して下さるに違ひない、それにしても一體監獄にゐる筈の芳

三が、什麼して明るい天地に出て、大阪までさまよつて来て自分を苦めるのであらう、什麼して玉枝さんに接近する機會を得たのであらう、今となつては憎い／＼玉枝さんに公言した詞の意地からも、一雄さんの心を此方に取りななければならぬのだ、愚圖々々してゐると、玉枝さんが辻と馴れ合つて這んなことをするか判らない、先んずれば人を制すといふことがある、何方にした處で此秘密を永久に抱いて一雄さんに接してゐるとはできないのだ、遅かれ早かれ懺悔をしなければならぬのだから、思ひ切つて曰つて了はう、曰つて了へば肩の重荷が下りて什麼なにか心の苦痛が軽くなるであらう……夫にしてもまづ之は久保田さんに申上げてその指圖を受けるが、順當である、然うだ、兎も角も久保田さんの處まで行つて相談して見やう。』

静子は漸くかう決心して其夜濱澤屋を出で、電車で玉造の久保田醫院に向つた、上本町二丁目下車で、内安堂寺町を南へ清水谷高等女學校の小暗い坂を登りかけると突如に靴の音がして。

『静子さん』

と聲をかけたものがある。

(四十三)

突如に我名を呼れて、静子はギョツとした、二三歩タジ／＼と後退りながら、振り反つて後を見るとき、オバーコート襟を深く立て、烏打帽子を目深に冠り、右手に棕櫚竹の太い洋杖を突いて、轟乎と立つてゐる男があつた、殆んど目ばかり出してゐる上に、その四邊は瓦斯燈も少し闇の中とて、呼び止めた男の何者であるかは歴然とは判らない。

静子は足早に素知らぬふりして、サツサと歩き出した、男は沈着き拂つて、再び後から聲をかける。

「お待ちなさい、待てといふのに待たないのですか、貴女の爲にならんですぞ。」

男は聲を勵して静子を威喝した、呼び止めたのは正しく辻芳三である、静子は一目見た時既にそれと悟つたのだ、けれども態と知らぬ顔で行き過ぎやうとしたのだが、今はモウ絶體絶命である、その場に立ち止つて。

「お呼びなすつたのは誰人でういますか。」

「アハ、白ばツくれちやアいけません、誰人でもない、僕です、辻です、芳三ですよ、ア

ハ、、、。

「アレー、まア辻さん!。」

「ハ、ア驚いたですか、御有理です、意外な處に芳三が現れてお氣の毒でしたなア、然し静子さん、貴女、今頃から何處へ行くのです?。」

「何處へ行つても宜いちやアムいせんか……。」

「剛い劍幕ですなア……勿論貴女の軀で貴女がお出でなさるのに、彼はいふことはありません、然し芳三は貴女に少し用があるので、御迷惑でせうけれども、その邊まで御同行が願ひたい。」

「何も貴郎と妾との間に、往來で立話をする程の用はない筈でういますか……。」

「貴女の方になくツても、僕の方にあるんです、執拗いことをいふ必要はありません、その邊まで一緒にお出でなさい、愚圖々々してゐると、貴女の爲に不利益ですぞ。」

静子は必らずしも、不利益ですぞと、脅された詞に驚いたのではないが、此場合芳三に逆へば、再び如何なる憂目に逢ふかも知れないと思つたので、思ひ返して無言のまゝ芳三と連れ立つた。

辻は黙つてそのまゝ歩を南に移し、餌差町の方の人通り少き淋しい通に出て横町を三ツ四ツ曲つて寺町通の或る寺の門前に立つた。

「僕は此寺の座敷を借りてゐるのです、往來で立話もできませんから……手間は取らせません一寸這入つて下さい。」

静子は危険極まる芳三とたゞ二人、こんな淋しい寺の座敷に這入ることは恐ろしくて堪らないと思つた、同時に新梅の家の彼の夜の光景を胸中に描いて、ゾツと身震ひした、然し今となつて這入らないと曰つた處で芳三がとて承知する男ではない、静子は不安の胸を懷いて、芳三の後に跟いて其寺の潜り門を這入つた。

芳三は庭先傳ひに、本堂の椽に附いて裏手の少し離れた座敷に見つた、細目に開けてあつた雨戸をガラリと開いて高い敷石を上ると、二間の椽で、其處に八疊の座敷がある、芳三の借りてゐる間であるらしい、一脚の机を隅に置いてその邊には雑誌や新聞がメラシなく擴げられ、茶飲茶碗や急須が散亂して足の踏み所もないほどに散かつてゐる。

「獨身者ですから、掃除も行き届かんです、アハ、ハ、ハ。」

芳三は意味ありげに笑つて、火鉢の埋み火を掻き起し、机の下の炭取からウンと炭をついで

プー／＼燃し始めた。

(四十四)

「漸く燃りましたよ、寒いですな、まアおあたりなさい、遠方まで引ツ張つて来てお氣の毒でした。」

静子は隅の方に小さくなつて、絶えず胸を轟しつゝ俯向いてゐたが、思ひ切つたやうに。

「いろいろ用事がムいしますので、御用といふのを早く仰有つて戴きたいものですが……。」

「まア急かんでもよろしい、今湯を沸して茶でも入れますよ。」

「妾、そんなに悠乎してゐられないのでムいますから……。」

「アハ、左様でせうねえ、戀敵の玉枝さんに秘密を知られては小金井學士との結婚も破れますからなア、静子さん！、駄目ですよ、如何貴女が小金井と戀を遂げやうとしても、此辻芳三が目の黒い間は斷じて妨害をするんですから……。」

「エーッ、妨害？」

「左様です、妨害です、貴女は僕の面上にかういふ傷を負はしたことを忘れはしませんまい、よ

くも男の面體に傷を附けましたな、怨みは骨髓に徹して忘れないです、監獄で數個月の苦役を終つてから、什麼せ點汁の附いた體だから、一層大惡黨になつてやらうと度膽を極めた手始めにまづ貴女に復讐をしてからと、様子を探つて見ると、柳橋にはゐないといふ、相棒の臯月に行方を探して貰ふと女優になつて大阪下りだと聞いたので、早速僕も大阪下り、今ちやア少々怪しげな前科者ばかり寄つてゐる潜ぐり銀行に勤めてゐるのです、玉枝さんといふ相棒ができましたから、復讐も易々たるものですよ、什麼です、静子さん、思ひ切つて小金井を玉枝さんに上げちまつたら……。」

「……………」

「フーン、忌ですか、そりやアまア左様でせうねえ、無理もない、お察しします、然し貴女が如何に大膽でも、僕と關係のあつた事が小金井に知れたらとても、此戀は逃げられませんよ、そんな危い橋を渡つて小金井と結婚したつて、それが永久に持續されるものぢやアないのです、第一貴女が眞に小金井を愛されるなら、小金井の將來のことも考へてやらねばなりません、貴女が藝妓や女優になつた身で、小金井新夫人と成り済し、自分の心に疚しい處がないからつて、貴女一人濟してゐた處で、世間の習慣の目が之を眞面目な結婚と見てくれますか什麼です

よく胸に手を措いて考へて御覽なさい、之は僕、眞面目でいふのですよ。」

辻の態度は全く一變して如何にも眞面目らしく静子を説くのであつた、静子はその心の底を測りかねて、薄氣味悪く思つたが、然し辻の説く所は決して無理なことではない、なるほど自分は今まで世間といふものを閉却してゐたのだ、人間が人間として生存してゐる以上、全く世間といふものから離れて了ふ譯には行かない、一雄ほどの人柄な氣高い紳士に、藝妓上りや女優上りの身で醫學士夫人とも曰はれまい、然う思ふと静子は耐らなく心を掻き亂される、その様子をみて取つた芳三は。

「什麼です静子さん、僕の曰つたことは眞理でせう、肯綮に中つてゐるでせう、僕は改めて静子さんに相談します、小金井學士は奇麗に玉枝さんに上げてお了ひなさい、正直な所を曰へば僕は不正な手段を以て貴女を辱めたです、然し……然し……僕は決して悪意があつたのでは、い、切なる情緒に思ひ亂れて、あんな罪惡を犯したのです、然し、正直な處を曰へば、全、いは悔悟してゐるんです、貴女はそれを信じないでせう、今處へ來るにしても、僕は威喝的態度を示したですからなア、然し之は止むを得ない手段なのです、許して下さい……。」

芳三は眞か偽か、妙に聲をかすらしてかく語りつゝ、息つぎの茶を啜つた。

(四十五)

芳三は更に膝を進めていよ／＼真面目の態度を作り、再び詞をついだ。

「かうして静子さんが心を許して話を下さるならば、僕はその思ふ所を皆告白して懺悔します、静子さん！、人は悔い改めたら清いものです、僕は既往の恐ろしい罪を悔いました、今日以後真面目な人間になることを此場で誓ひます、エー屹度誓ひます、その代り僕は茲に一生のお願ひがあるのですよ、静子さんよく聞いて下さい、僕は今刑餘の身です、貴女の目から見たら定めし薄氣味の悪い男と思ふでせう、然しそれは一朝の過です、僕だッて心から悪人ではありません、貴女も小金井學士と結婚しやうとして結婚することのできない境遇に今あるのです、什麼せ犠牲になるものならば、男一匹を助けると思つて、静子さん！、貴女僕の妻になつて下さいませんか、サ、驚くのは當然ですが、世の中のことはすべて思つた通りに行くものではないのです、人間萬事塞翁が馬といふ諺のあるくらゐです、貴女が小金井に添はんとして添ふことのできないやうな事情が発生してくるのも皆運命です、諦めて下さい、貴女が僕の妻になつて下さるといへば、僕は生れ代るのです、忘たと曰はれれば、僕は又自棄になります、人間

一人が善になるか悪になるか死活の問題ですぞ、静子さん過ぎ去つたことは忘れて了つて、御願ひです、改めて辻のいふ真面目な詞を聞いて下さい、そして二人で田舎へでも引ッ込んで、浮世のことを忘れて超然暮さうではありませんか、什麼です、エー静子さん……。」

芳三は膝を乗り出して、切りに静子の心を動かさうと熱心になつて辯ずるのであつた、静子は石像の如く俯向いたまゝ黙つて辻のいふ處を聞いてゐたが、何時か眼が濕んで、露の玉が頬を傳つた。

「辻さん、貴郎それは本氣で仰有つてゐるのですか。」

「本氣ですとも……こんなことが冗談で曰へますか……。」

「貴郎が心から然ういふ氣になつて下さつたのなら、妾、本統に嬉しく思ひます、什麼ぞ今までの心を翻して善人になつて下さい。」

「ちやア僕のいふことを聞いて下さつたのですね、エーッ静子さん。」

「貴郎の曰ふことゝ仰有ると……妻になれと曰つたことですか……。」

「ソ、左様ですともそれが、今の問題ちやアありませんか。」

「辻さんよく、考へて下さいまし、今更そんなことができませうか？、縦し妾が小金井先生と結

婚ができないことになつたに似た處で、什麼して貴郎の妻になれます、妾は貴郎に暴力を以て辱められたのですが、その當時は之を暴力として訴へて出ることのできない藝妓でした、節操を汚されてそしてそれを訴へることのできない藝妓でした、訴へて出た所で相手が藝妓で、いますもの、お上で取り上げては下さいますまい、して見れば情交があつたといふことになるのです……。」

静子は是處まで語つて来て、思はず齒を食ひ縛つた、當時の態がマザ／＼と目に浮んで、新しい口惜しさと悲しさが胸に充ちてくる、それをジツと怵へて、語り続けやうとするが、涙は止度もなく流れて聲が詰るやうに覺えるのを、無理に我慢して途切れ／＼にその先をつけた。

「ソ、それできなくツてさへ、貴郎方は妾を情婦でやもあるやうにいひ立てるのでせう、それが小金井先生と別れて貴郎と夫婦になつたといへば、人が何んといひます、静子と辻との情交は事實だといふに違ひないので、つまり世間の噂を證據立てるやうなことになるのです……。」

静子は怵らなくなつて其處に泣き伏した。

(四十六)

静子は漸々にして再び顔を擧げた。

「妾は死んでもそんなことはできません、此まゝ小金井先生とお別れしなければならぬことになりまして、静子はそんなことをするほど墮落してはゐないつもりで、たゞ淋しく孤獨の生活をするより外に仕様が、ムいませぬ、ですから貴郎が今悔悟して下さるといふなら妾は喜んで貴郎に對する敵意を解きませう、貴郎は妾の憎むべき敵です、妾、貴郎を八裂にしても嫌らないほどに思ふので、然し今になつて汚された體が元のやうに清くなる譯でもないで、ムいますからモウ何事も諦めました、辻さん！妾は終に貴郎の犠牲になるので、ムいますよ、什麼を妾のことなどは思ひ切つて、心を入れ交へて下さいまし。」

「ぢやア何んですか、什麼しても僕の妻にはならないといふのですね、然うですか……仕方がない、惚れて／＼惚抜いた戀人だが、モウ止を得ない、最後の妨害を試みるまでだ、アツハツハ、ハ、ハ。」

今までの假面を剝いで、突如に胡座を掻き、空嘯いて高く笑つた、静子はその様子を一目見

てゾツと身慄するのを禁め得ない。

「ナ、何ですツて、サ、最後の妨害……。」

「勿論だ、貴様の敵の玉枝に全力を借して、極力妨害するんだ、それで行かなければ、貴様に負す致命の方法はいくらでもある、耶蘇坊主ちやアあるまいし、そんな説法を聞かされなくツたツてよく解つてるんだぞ、敵意を挿むなら挿んだツてよろしい、額の知れた女一人に敵意の解除を求めるため、わざ／＼是處まで引ツ張り込みはしないんだ……莫迦々々しい。」

「では……今……悔悟したと……オ……仰有つたのは……ウ、嘘ですか……。」

「當然さ、貴様が妻になるといへば、少しはそれに免じて根性を焼き直すかも知れないが、今更監獄返りの身で什麼して真面目になれるものかい、貴様を俺の女房にすれば、黙つて腕組をしてゐて玉枝の手から五百圓と云ふ金が這入つてくるんだ、柔順にして器用に五百圓の儲けをしやうと思つたのだが、頭を横に掉られて見れば、豫定の行動を取らなきやアならないんだ、間違々々すりやア可惜五百圓といふ大金が、フイになるのだよ。」

「ツ、辻さん、貴郎、如何に墮落したツても、一時は兒童を教育する位地にまで立つた人では、いませんか、良心に顧みて疚しい處はないのですか、何んといふ情ない人なのでせう。」

「おほきにお世話さまです、それよりか僕の方の用事はモウ済んだのだから歸つたら宜いでせう、大丈夫！、我輩だツて監獄に行くのは忌だ、女優になつた今の君を、手籠にしやうとは曰はないから、サツサと歸り給へ、須らく爾の敵に糧を與へよか、アツハ、今日君に糧を與へるべく此ま歸して上げるよ、然し什麼焦つたツて、辻芳三が今夜にでも頓死しない限り、小金井の青瓢箪と汝さんとは一緒にしないのだから、その積りで畫策するならして見給へアツハツハツハ、。」

又も大口開いて、カラ／＼と笑つた、そして再び静子に物を曰はうともせず、立ち上つてその邊を片附け始めた。

悄然として辻の住居を出た静子は思案に耽りながら、運ばぬ足を暫し門前に止めて、右に往かうか左に曲らうかと考へてゐた様子であつたが、キツと胸を定めたらしく、打ち領いて足を早めつゝ、再び玉造の方へ急いだ。

静子が後をも見ずに急いで歩き出した時、ツツと潜り門を開けて出て來た芳三は、行手を透して見ながら、往來の軒下に沿つて、見え隠れにその後を跟けた、見れば和服仕立に姿を代へ

て襟巻に顔を埋め中折帽を前下りに冠つてゐる。

(四十七)

三四十間距れた後から芳三が跡を附けるとも知らず、静子は元来た道を引ッ返して吹き晒す寒風の中を、右に曲り左に折れて久保田醫院の玄関に立つた、夜は既に十時を過ぎてゐる。寝惚眼の看護婦を驚かして、静子は醫院の奥座敷に通つた、其處には實が机に凭れて讀會に餘念もなかつたが静子の姿を見ると、此方に向き直つて。

「什麼したんです、此寒いのには、然もこんなに遅く……何か急に事でも出来たのですか、オヤ大變顔色が悪いやうですぞ、ド、什麼したのです……」

「セ、先生、久保田先生！、妾、小金井先生とは断じて結婚は、イ、致しません、イ、エ、アノ平に御断りを致さなければならぬ理由がムいしますので、コ、このまゝ御別れ致したいのでムいます、ド、什麼ぞ貴下から先生に、ソ、左様お傳へを願ひたいのでムいます。」

「ナ、何んですツて、結婚を断る？、今更になつて什麼したものです、静子さん、そんなことを曰ひ出したら、小金井の立場がなくなつて了ひますぞ、理由があるのでせう、その理由を仰

有つて御覽なさい、また分別が附くかも知れませんが、サア早く仰有つて御覽なさい。」

「ア、理由？、ソ、そんなものはムいませぬ、運命です、たゞ自分の運命を悟つたのでムいます、この結婚を遂行することは小金井先生に御迷惑をかけることになるのでムいます、妾は什麼しても小金井先生と一緒にすることのできない運命にあることを悟つたからでムいます。」

「運命？、一緒になることができない運命ですか、ウム、そして此結婚を遂行すると小金井に迷惑をかける？、然らば什麼いふ理由で迷惑がかかるのか、其處に立派な理由があるぢやアありませんか、ソ、それをいふて御覽なさい。」

「久保田先生、什麼ぞモウそれ以上のとは御聞き下さいませぬやうに……」

「そんなとを曰はれちやア困りますよ、僕だつて今になつてたゞ漫然静子さんが結婚を断つて來たと小金井に取次ぐ譯には行きませぬからなア。」

「然し、それは何れお判りになる時があらうと存じますので、其時を待つて戴くより外に仕方がムいませぬ。」

では、什麼しても理由を仰有らないのですね、婦人の秘密に立ち入つて之を詮議する資格は僕にはないのですから、貴女が仰有らんといふ以上、什麼も致し方がムいませぬ、ぢやアかうし

て下さい、モウ一度小金井と貴女の最後の會見をして下さい、僕も立會ひますから、その上で何れとも双方の談合にしたら宜いでせう。』

「先生？ 妾、モウ小金井先生にはお目にかゝらないつもりでいます。』

「そんなことを言はれちやア僕が困るです、兎も角一應二人で會見して下さいさらなければ結末が附かんです、場所を撰定しませう、濱寺が宜い、此間の海濱館にします、明日の夕方モウ一度是處まで来て下さい、僕が同行しますから、宜ござんすね。』

静子も今は力及ばず、何事も観念して之に應じた。

静子の後を附けて来た、芳三は久保田醫院の周圍を彼方此方とうろついた末、裏手の杉垣の間を掻き破つて、其處からソツと裏庭に忍び込み、足音を窺んで二人が對談する座敷の戸外に立つて耳を澄し、四什の様子を手取る如く聞き了つた後、再び元の杉垣から表に出で、急足に元来た道を歸つて行く。

(四十八)

「大變早かつたですな。』

「エイ、電報を拜見しますと、すぐに飛んで来たのです、什麼いふ結果になつたのでムいませう。』

「御安心なさい、まづ九分通り大丈夫、小金井學士は確に貴女の占有物になりますよ。』

中寺町慶福寺の離座敷なる辻の居間でひそ／＼話をしてゐるのは、芳三と玉枝とであつた、芳三は今朝玉枝に電報を發して來阪を促したのである。

「九分通り大丈夫と申しますと……。』

「イヤ、此間貴女がお立寄り下さつた後で、僕はいろ／＼苦心をして到頭是處まで静子を引ッ張り込んだのです、手詰の談判をしましたな、どうやら静子もモウ覺悟を極めたらしい、僕がゐるはととも小金井と添ふことはできないと諦めたらしい様子でした、で、静子を歸して置いて、すぐ僕はその後を附けましたよ。』

「エーッ、貴郎、静子さんの後を附けたんですか。』

「然うですとも、五百圓を頂戴するか、骨折損の草疲儲に終るか、死活の岐れる大問題ですもの、後を附けるくらゐ何んでもありません、まアお聞きなさい、後を附けて行くと玉造のすゝと端の森の宮に近い、久保田醫院といふ家に這入つたんです。』

「ナニ、久保田？」

「エーッ、貴女、久保田といふのを御存じなのですか。」

「エー、知つてますとも、一雄さんの同窓で、一時は妾の結婚に肩を入れて下すつた方ですわ。」

「フーン、ちやア貴方の味方ですな。」

「まあさういへないこともありませんが、然し此間和歌浦へ来て、久しぶりだといつて一雄さんを呼び出したんですから、今では什麼いふ心地でゐらっしゃるか分つたものでは無いませぬわ。」

「でせう、それでよく判りました、僕が以前静子の素性を調べて貰つた時、小金井の親友に久保田といふものがあつて、之が二人の間でいろ／＼周旋してゐたといふことを聞いてゐたんです。すると今玉造に開業してゐる彼奴がその久保田なんだ、なるほど判つた／＼、然し玉枝さん、その久保田なら、貴方の味方ちやアありませんよ、寧ろやつぱり貴女の戀を妨げる敵です。」

「然うかも知れません、一雄さんが妾の宅にゐたのを知つて和歌浦まで呼び出すくらゐですと

の……、敵でも何んでも介ひません、それで貴郎、静子さんの後を附けてから什麼なすつたのです。」

「之は恐縮ですな、では久保田のことはモウそれで宜いのですか、アハ、ハ、ハ、よろしい静子が久保田醫院に這入るのを見届けて、僕は裏手に廻つて、杉垣を破つて久保田の庭先に忍び込んだのです、却々剛い仕事ですぞ、之を法律に問はれると家宅侵入罪！間違つくと強盗未遂！五百圓ちやア安いものですよ、アツハ、ハ、ハ。」

「辻さん、貴郎、そんなに焦らさないで早くその先を仰有つて下さいな。」

「よろしい曰ひますよ、忍び込んで奥座敷の扉の蔭で立ち聞くと、静子は理由を曰はずに、小金井との結婚を断つたものです、之を遂行すると、小金井先生に迷惑がかかるから、ない縁と諦めて二人は之で奇麗に分れたい、と、まあ意譯すると、さういつた譯になるんですな、處が久保田といふ奴がおたんちでな、それは什麼いふ譯だ、理由を曰はなければ、小金井に取次がれない、とかういふのです、何んでも久保田といふ奴が今度の媒介人に違ひないので、押問答の末、結局今夜小金井と静子が久保田が立會の席上で最後の會見をして、別れ話を決めやうといふことになつたのです、さア是處でまた何んといつても静子が惚れてゐるんですから、

決心が鈍つて、又グニャ／＼になると貴女のために一大事です、ですから是處が相談なのですよ、僕には胸中自ら策がありますが、玉枝さん、貴女どう思ひますかな、アハ、、、。』

(四十九)

「玉枝さん！、要するに此演劇の脚色は是處が佳境ですよ、佳境だけに此一場を背負つて立つ僕の苦心は一通でないのですよ、宜ごさんすか、成功すれば五百圓といふ約束ですが、模様替つて餘ほど調子が違つて來ましたから、少し居直らなければ此芝居は勤まらないのです、什麼です、モウ少し出して下さいな。』

「エーッ、五百圓でまだ足りないのですか。』

「アハ、、、、僕は五百圓の倍額即ち改めて千圓を要求したいのです、然したゞ無意味に要求はできませんから、まづ僕の計畫を御話しませう、それを貴女がお聞き下さつてなるほど千圓の價値があると思召したら、奇麗に出して下さい、什麼です玉枝さん。』

「まあ兎も角も承つた上でなければ……。』

「何とも御返事ができないといふのですか、宜しい、ちやア兎に角お話しませう、之れから、

すぐに仕度をして今夜三人が會見する場所へ僕が乗り込むのです場所ですか、それもチャンと僕は知つてゐるのです、濱寺の海濱館ですから、ナアニ雑作はありません、いよく乗り込んで、小金井や久保田を尻目にかけて、僕が静子の情夫顔でウンと皆を威してやるのです、イエ僕の情夫面が事實であらうと、なからうと、それは介んです、苟くも小金井や久保田ともあらう相當の紳士が、嘘にもせよ、俺が情夫だと名乗つて出られてはまさか静子を妻にするともいへないでせう、サ、さうなれば静子は自然に致命傷を負ふのです、其處へ何心なく貴女が現れて、何とか曰つて御覽なさい、一方静子に愛想をつかした反動で、小金井の愛は貴女に注がれてくる、什麼です、脚色は甘いものでせう、千圓で高いですか、アハ、、、。』

「……………」

「ウフ、什麼やら高いと曰ひたさうな顔ですな、然し此役者は僕の專賣で、代り役がないんですから、高いと思つたらお止しなさい、随分危い橋を渡るんですもの、千圓だつて二千圓だつて玉枝さんなら安いもんだ。』

「獨語のやうにいふのを、玉枝は黙つて聞いてゐたが。』

「什麼も仕方がありませんわ、貴郎に見込れちやア降参するより仕様がなないんです、宜ろしう

ムいます、千圓差し上げませう、確乎お遣なすつて下さいよ、でも随分悪辣な遣方だわね。」
 「アハ、、、、そんな弱い氣になつちやア敵役は勤りませんよ、大丈夫、相手は辻です、細工
 はりうく仕上げを御覽しろ、然し貴女は僕が乗り込んでから来る時に、うまく遣らんといい
 ませんぞ、それには之からすぐ小金井の下宿に行くんです、宜ござんすか、素知らぬ顔で今か
 らすぐ小金井を訪問して御覽なさい、夕方になると否が應でも小金井は貴女を置き去りにして
 何處かへ出ますよ、その時貴女が行先をよく聞くんです、小金井は到底打ち明ける氣遣はあり
 ませんから、そのまゝ器用に出して置いて、それから時間を圖つて濱寺へ行くのです、貴女が
 来た時分には大破裂を來して静子は泣く小金井は呆れる、久保田は間諜々々するといふ一大悲
 劇が演じられてゐますな、其處へ小金井の後を跟けて來た態で、貴女は何處までも僕に關係の
 ないやうな顔で這入つてくるのです、宜ござんすか、それから先の筋書は、貴女の腕だ、僕の
 立ち入る範圍ぢやありません、判りましたか、玉枝さん、什麼です、好く行き届いたもので
 せう、ちやアそろくお行なさい。」

玉枝が小金井の下宿を指して行つた後で芳三は和服を洋服に着代へ、行李の中から小形の拳

銃を取り出し、之を上衣の外かくしに忍ばせて、夕近き頃慶福寺を出た。

(五十)

夏の賑かさに引き代へて、冬の濱寺は眞に寂寥を極めてゐる、松林の間に點綴してゐる別荘
 も堅く戸を鎖して人の氣配もない、其處是處の料亭もたゞ二組三組の不眞面目な男女の客があ
 るばかりでそよとの音も立てない。

大寒中の一月の下浣、殊に今宵は風劇しく荒らびて梢に咽ぶ松風の音は宛然大波の寄せるや
 うな響を傳へ、物凄いいこと此上もない、況して天は陰に曇つて月さへなく、星の瞬きすら一
 も見ることはできなかつた、海濱館の後に當つては、風に荒ぶる岸打つ波がドドドとざわ
 ついて魔物の唸る聲とも聞かれる、久保田を中に介んで小金井と相對し、静子は思はずゾツと
 身を慄はす。

「オイ、小金井！、君がそんなに悄氣了つたら仕様がないうちやアないか、静さん！僕がゐて曰
 ひ悪いやうでしたら、僕は何時でも此席を避けますが、今の様子では兎ても二人を置いて僕は
 避けられないです、オイ、それで宜いのか、君は静さんから理由を聞かんでも宜いのかい。」

「……静さんが什麼しても曰つてくれないのだもの……。」
 一雄は絶望の吐息を吐いて黙つて了つた、静子は絶えず半巾を顔に押し當て、忍び音に咽り泣くばかりである、久保田も今はほと／＼當惑して、詞を出す術はなかつた、一雄は最後の駄目を押すやうに。

「静子さん、では貴女モウ什麼しても僕の妻にはならないと決心したのですね、僅か一日か二日の間に豹變したその動機理由も曰はずに、之ぎり永久に二人は相逢ふことのできない仲になるのですね……。」

「ト、飛んでもない、ド、什麼して妾が貴郎を見捨てるなぞと、ソ、そんな勿體ないことを……。」

「イ、エ、見捨てたのです、誓ひを破つたのです。」

「ケ、決して左様な理由ではないので、曰いますから、一雄さん……、ド什麼ぞ、暫く何事も曰はずに……。」

「ミ、見捨てたんでなければ、何故その理由を曰つて下さらないのです、理由を仰有つて下さらなければ、僕は什麼してもこのまゝに別れることはできません、さアそれを仰有つて下さ

い。

「ソ、それが今此處で申上げられることならば、喜んで申しますけれど……、貴方それを御聞き遊ばすのは静子を殺すやうなもので、曰います、妾が、イ、曰はずに一人胸に秘めてゐる苦しさはどれほどで、曰いませう、妾、それを申上げて、貴方に不快な心を起させてお別れるのは忌で、曰います、萬望お願ひで、曰いますから、たゞ静子の胸には一つの秘密があるのだと思召して、ソ、それを不可解の謎にして置いて下さいまし、一雄さん？、先生？、静子のお願ひで、曰います。」

「ちやア什麼あつても曰へないので、静子さん……。」

「ハ、ハイ。」

静子は、懐へ得ずして、ワツと其處に泣き伏した。

此時寂かな廊下に、ミシリ／＼と椽板を踏む、音が此方に向つて近よつて来るのを、久保田が耳にして、フト聞く耳を立てる間もなく、荒々しく隔ての障子を開けて其處に突立つた洋服姿の男がある、泣き伏した静子は、氣も轉倒して更に氣が附かなかつたが、久保田と小金井は人ありと見て、愕然として後をふり向くと、男は目に角立てた剛愎な態度で。

『その理由は僕が説明してやる……』
ツ、カ〜と這入つて来たのは辻芳三であつた。

(五十一)

かくと見た久保田は怒りに耐へられない様子で、片膝立てつゝ腕を張つて。

『無禮者ツ、何用あつて、漫りに人の座敷に闖入して来たのだ、出るツ、不埒な奴だツ。』

久保田が大喝した聲に、静子は驚いて面を舉げると、すぐその前に辻芳三が恐ろしい剣幕で突ツ立てゐた、一目見るより、アツといつて、後さまに仰反つたのを、小金井は、たゞ三人が密談の場所へ見知らぬ人が這入つて来たのに驚いたものと察し、慌てゝ走り寄つて之を抱へ起しつゝ。

『シ、静子さん！、驚くことはありません、狂人が人の座敷に迷ひ込んだので、今久保田君がその無禮を詰責してゐる所なのです、確乎しなければ不可ません、静子さん。』

『ハ、ハイ……』

静子が呻くやうに微かな聲で返事をしたのを、芳三は尻目にかけてツグツと男二人を睨み附

けて。

『オイ、君等二人は僕を無禮者だの、狂人だのと勝手なことを吐したが、一體その静子といふ女は何處から誘拐して来たのだ、人の情婦を断りなしに連れ出して無禮とは何んの言草だ、オイ、静さん、イヤサ小静！、巫山戯た真似も大抵にして置かないかい、柳橋にゐた時のことを忘れたか、白らばくれたツて駄目だぞ。』

『ナ、何んといふ、ちやア貴様は静さんを知つてゐるといふのだな、ワ、理由があるならいつて見ろ……』

久保田は顔の色を代へて、イザと曰へばすぐにも打つて蒐らうといふ劍幕で、芳三の前に詰りめ寄つた、辻はその場にドツカと腰を下して大胡座を掻きながら、故らに高く笑つて。

『知るも知らぬも逢阪の關だ、アハ、ハ、ハ、知らなくツて什麼するかい、その女は東京にゐた時分、柳橋の菊中村から藝妓に出て小静と名乗つてゐたのだ……』

『ソ、そんなことを貴様から聞かなくツても知つてゐるのだ、それが什麼したのだ、ド、什麼したのだ、一體貴様は何者だ、まづ名を名乗れ、人の座敷に無断で闖入して、名も名乗らぬ法があるか、バ、莫迦め。』

久保田は又も膝摺り寄せて、身構を直した。
 「何方が莫迦だ、莫蓮女を處女と信じて結婚するのしないのと、泣いたり笑つたりする奴が餘ほど痴呆ぢや、名を曰へといふなら聞かして遣らう、俺は辻芳三といふものだ、顔を洗つてよく見て置け。」

「ナ、ナンといふ、辻！、芳三！。」

小金井は芳三の一言に、ギョツとして思はず静子を抱へた手を離しかけたが、それと心附いて、静子に傍の温茶を與へた、静子はまだ夢現の間にあるらしい。

「小金井君は知つてゐるだらう、昔は博愛學校の首席訓導、今ぢやア銀行員だ、昔の君の色敵さアノ時の辻だ、芳三だよ、名は聞いてゐるがお目にかゝるのは今夜が初めてだ、アハ、、、。芳三は飽くまで傍若無人に振舞つて、また詞をついだ。」

「君等は自體滑稽極る話をしてゐるんだよ、静子が小金井君の處に嫁かれないといふ事情はね我輩があるからだ、静子の藝妓時代に旦那となつて情交のあつたのは天にも地にも我輩一人さ仔細あつて一年ばかり逢はんのが、此頃初めて邂逅つたから焼木杭に火が附いたんだよ、さういふ秘密があるから強つて御断り申した譯なのさ、判つたかい。」

「エーッ、そんなら静さんは君の情婦？」

久保田は眼を睜つて驚いた、小金井は何故か頭を垂れて黙してゐる、辻はポケットから巻煙草を取り出して、スバ〜とふかし始めた。

(五十二)

「アハ、、、お判りになりましたかね、君等も随分正直な人達だよ、こんな秘密を胸に抱いて初心らしく處女を装つてゐる罅隙の入た藝妓上りや女優の女を、お嬢さん扱ひにして結婚するのしないのツて僕の目から見たらお臍が茶ア沸すんだ、藝妓や女優をしてゐるものに、初心な娘があつてお耐り小法師があるものかい、情夫の二人や三人ある方が當然さ、君等アまづ浮世學、處世學といふものを少し稽古してくるさ、但しそんな罅隙の入つた莫蓮でも、強つてお望みとあれば別に籍を入れた夫婦でもなし、たゞ情交があるといふだけだから器用に熨斗を附けて進上するがね……。」

芳三は愈々出で、傍若無人に、さも憎さげにいひ終つて空嘯いた、此の時静子は夢現の中から醒めたやうに、ケロリとしてその面を擧げつゝ、四邊を見廻した、一雄は氣遣はしさうに。

「静さん、モウ大丈夫ですか、ヨ、宜ごさんすか。」
と、慰めてはゐるものゝ胸中の苦悶は一通りではなかつた、果して辻のいふやうに静子が汚れてゐる女であつたら、什麼しやう、といひ知らぬ胸の嫌きを覚える。

静子は四邊を見廻してゐた目を、キツと辻に注いだ、突如にガラ／＼と笑ひ出した、小金井も久保田もあまりの意外に驚くとよりは呆れてゐる、辻は薄氣味悪るさうにグツとその座を下つて、静子の様子に注意する、静子は二三度他愛もなく續けざまに笑つたが、更に唾を据ゑて辻に噴つた、見ればその眼は充血して險しく吊り上り、常の優しい相貌は一つも見ることができない、あはれ静子は纖弱い身に、幾多の苦悶を擔つて、その重味に耐へかね、逆上して狂的狀態に陥ちたのではあるまいか。

睨み附けられた辻は、心竊に一種の恐怖を感じたけれども、此場合弱味を見せては一大事とワザと沈着拂つて。

「オイ、小静！、白ばツくれても駄目だよ、それよりか小金井なんか思切つて昔馴染の俺の方へ来た方がよからうせ。」
静子はまだ黙つて辻を噴めてゐた、久保田も小金井も出すべき詞がなくて、呆れ返つて眼を

降る。

「悪魔！、辻！、汝は何時牢屋から歸つたんだい。」

静子はまた突如に聲を尖らして叫んだ、確に正氣の人ではない。

「何んだと？」

辻も膝を詰め寄せた、腕を張つて右手はポケットに挿し込まれた。

「何が何んだい、お巫山戯でないよ、藝妓と侮つて、卑怯にも酒に酔して前後不覺の處をよくも手籠にしたね、覺えてゐるかい、此悪魔め。」

静子はスツクと立ち上つた、そして帯に挿んだ懐中鏡をムツと掴んで、力任せに投げ附けた辻はハツと思つて體を竦めたので、鏡は飛んで障子に當り、バサリと音して疊の上に落ちた、静子はビリビリとその袖を噛んで、力任せに引き断つた、久保田は慌て、駆け寄つて、その手を抑へ。

「ド、什麼したものです、静子さん、氣を確乎持たなければいけません、まア其處にお座りなな。」

「宜いよ、放擲として下さい、餘計なことをすると、汝もかうだよ。」

荒々しく片袖を振り拂つて、左手でウンと久保田の胸を突いた、不意を打たれて久保田は思はず尻餅を突く。

静子はモウ敵も味方も見境ひがなくなつて、什麼やら久保田を阜月と誤り、是處を柳橋の新梅の家とでも思つてゐるらしい、而して自分は藝妓になつてゐた時の氣になつてゐるのではあるまいか。

(五十三)

静子は倒れた久保田に目もくれず、再び辻を目がけて飛びかゝらうとした、此時早く辻はその猿臂を伸して及腰に静子の右手を引ツ張つてその場に引き据ゑやうとしたが、静子は力一杯之をふり拂ひ素早く身を反して、傍にあつた茶吞茶碗を取るより早く發矢と投げ附けた、辻も今は之までと思つたか身を退つて片膝立てつゝ、矢庭にポケットからかの拳銃を取り出して、グツと静子の前に突き附け。

「巫山戯た真似をするよ、彈丸が飛ぞ。」

「オホ、そんなものが恐くつて、客商賣ができるかい、撃てるなら撃つて御覽よ、オホ、

「よ、

静子は憶する色もなく突き附けた拳銃の前に身を投げかけやうとしたので、辻も騎虎の勢ひ初めから空銃を以て威すつもりなので。

「ナニを……此女、撃つて曰つたな。」

「ア、曰つたよ。」

「諾ッ！、撃つぞ。」

と狙ひを定めた、かくと見た一雄は驚いて二人の仲に割つて入り。

「危い、莫迦なことをするな。」

かう叫んで辻の右手に取り籠り、之を奪ひ取らうとした、辻は奪られまいと一雄の籠る手を拳銃持つたまゝ、力一杯グイと捻つた機會に、一雄は手を滑らして思はず前にノメリ、辻は我と我が力に餘つて、ドンと後さまに引轉つた刹那、轟然一發、静かな夜の幕を破つて、空砲と思つた拳銃は發射された、薄く暖いた煙の中に辻はウンと一聲その場に倒れ、左の脇腹から血汐が瀧津瀬と噴出してゐる。

彼は倒れた機會に思はず拳銃の引金を引いたのであつた、そしてその筒口が自分の方に向い

てゐたのであつた、空砲と思つた六連の筒にはまた實弾が三發残つてゐたのである。久保田も小金井も之れはとばかり、驚き慌て、同時に倒れた辻の左右から之を抱き起さうとしたが、辻は傷を負ふて宛然野猪の如く、ヨロ／＼として立ち上りざま。『ウ、撃つたな、ヨ、ヨ宜くも撃つたな、諾しッ、かうなりやア、破れかふれた。』喘ぎ／＼拳銃を取り直さうとしたが、最初の深手に耐り得ないで、再びドツと音して、バツタリ倒れる。

静子は氣拔けのしたやうに茫乎として突ツ立ち上つたまゝ、それを嘖めてゐたが、また高く笑つて。

『オホ、、、宜い氣味だ……。』

『ナ、ナント、ヌ、吐した……。』

辻はまたもや身を起さうとして悶えてゐる時、慌て、廊下を走る音がして、突如に飛び込んて来たものがある、それは玉枝であつた。

『ッ、辻さん！アツ……。』

何氣なく約束の時間に其處へ這入つて、くると思ひも寄らぬ落花狼籍、辻は朱に染つて倒れ

小金井、久保田は狼狽してウロ／＼する傍に、静子が眼の色を代へて、恐ろしい形相で突ツ立つてゐるのを見た玉枝は、ゾツと身を慄して。

『一雄さん、ド、什麼しませう。』

一雄の袖に絶つて面を掩ふのを、一雄は邪慳に振り拂ひ。

『エーッ、ッ、そんな處ではないんです、ク久保田、ド、什麼する。』

『此まゝには捨て置かれん、俺は駐在所へ急報する、後を頼むぞ。』

曰ひ捨て、久保田は廊下傳ひに表へ飛び出した。

此時海濱館の本屋の方に當つて、一道の焰がサツと渦を卷いた、つゞいて消魂しい人の叫び聲が聞えて、バツ／＼と右往左往に駆け交ふ足音が響いた、同時に火事だ／＼と連呼する聲……。

宵より吹き荒んでゐる狂風はいよ／＼吹き暴れて見る／＼火は四方へ擴り紅蓮の焰は毒蛇の舌を吐いた。

失火か、放火か、火は海濱館の客室から發したらしい、吹き曝しの濱邊で西北の狂風を真正面に受けたのだから耐らない、紅蓮の舌は數百坪の建物をたゞ一骨に骨め盡すかとはかり、焔は數條に岐れて天をも焦す勢ひ凄しく、猛威を揮つて火勢を煽り、三階建の宏壯な海濱館は、見る／＼渦巻く火の海に包まれて、早や離座敷に火口を向けた。

一雄は火の上るを見て更に狼狽の度を重ね。

「タ、大變だ、静子さん！、逃げなきやア駄目です、タ、玉枝さん、貴女もお逃げなさい、エイ、愚圖々々してゐられる處ぢやアないですぞ。」

狂氣の如く叫んで静子の手を取りつゝ無理に引出さうとすると、静子は引かれながら、ツカ／＼と蟲の息なる辻の傍に走り寄り、其處に落ち散つた拳銃を取り上げるが早いか、狙ひを定むる暇もあらばこそ、突如玉枝を目がけて、ドンと引金を引いた、銃聲は火焰の唸りに消えて何人の耳にも入らなかつたが、忽ち玉枝はアツと叫んで煙と共にその場に倒れた、静子の狙ひは外れて玉枝は左の腕を射られたのである。

血を見て狂へる静子は、荒々しく拳銃をその場に投げ付け。

「復讐、復讐……。」

と消魂しく、且つ高らかに叫んで、何か目の前にちらつく幻の影でも拂らふやうに、幾度か右の手を左右に振つて、物を追ふが如き形をしてゐたが、漸つと正氣に復して我に返つたやうに、茫乎として再び四邊を見廻し、斃れた辻と傷いた玉枝の姿に見入つたが、驚いて目を此方に移すと、一雄が其處に悄然として俛首てゐるのが目に入つた、静子は情に耐へないやうに突如にその膝に取籠つて。

「セ、先生！、ド、什麼しませう。」

「タ、大變なことに、ナ、なりました、ア、貴女、玉枝さんを撃つたですな、兎に角、火が迫る、お逃げなさい、タ、玉枝さんは傷いた、タ、玉枝さん。」

一雄は今更のやうに氣が附いて玉枝の傍に寄りつゝ之を抱き起し、人事不省に陥ちてゐるのを呼び醒した、而して袖を捲つて傷所を見ると、銃丸は僅に左の腕の、皮の下を掠めたのみで極めて微傷であることを確めた。

呼び醒された玉枝は、夢中に目を睜いて一雄と静子の面に噴つてゐたが、悔悟の涙は雨と注いで、右手に一雄、左手に静子の腕を堅く握つて。

「一雄さん、静子さんも、ユ、許して下さい……。」

玉枝は全く悔悟したものと如く、二人の膝に凭れて心ゆくばかり泣きに泣いた一雄はその詞も耳に入らぬやうに。

「火……火が其處に來た、兎も角是處にはゐられません、彼處の、マ松林まで避難ませう、ハ、早くお出でなさい……。」

左右に二人の手を執つて、廊下から中庭に飛び出し、敷石傳ひに跣足のまゝ駆け出した、五六歩踏み出すと、静子は何に躓いたが、バツタリ其處に倒れて一雄の手から離れた、燃え盛る焔は宛然三人の後を追ふやうに渦巻く黒煙と共に倒れた静子を一言にするかと許り、その上に掩ひ被つた、一雄は驚いて玉枝を振り拂ひ、静子を扶け起さうとする、此時早く、静子は身を翻して立ち上りざま五六歩後に戻つたが、炎々として燃え上る焔の前に合掌しつゝ、血に啼く杜鵑、一聲高く。

「先生！ツ。」

と叫び、身を躍して火の中に飛び込んだ、火花がバツと地に伏して、黒い煙が濃々と立ち昇る中に静子は轟乎と立ち上つたが、ついで三條ばかり火柱が立つたと思ふと、その姿は全く焔に包まれた了つた……。

静

子 (終編) 大尾

樋口隆文館新刊報告

須藤南翠作	閣のうつつ
渡邊黙禪作	櫻井一策
同君作	風流菩薩
伊藤銀月作	予れ
和田天華作	浪ま
中村兵衛作	狸心く
安岡夢郷作	地獄
	谷中

い白面極至もでん讀をれど

大正元年十二月十日印刷
大正元年十二月十五日發行

定價四十五錢



(附與編費と静)

著者 和田 天華
發行所 樋口源次郎
大阪府南区長堀橋二丁目
廿七番地
印刷者 磯野利木松
大阪府南区北炭屋町
貳拾番地四ノ橋東南詰
印刷所 八十島米次郎

發兌元 樋口隆文館
大阪府南区三休橋段谷南へ入四側
(振替口座八七九七)

●樋口隆文館營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版……及び其御買を專業と致居候に付き各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候
△御買目録御入用の諸君は郵券貳錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へ願ふ
△樋口隆文館は成る丈珍らしいそして内容も成る丈面白
△毎月新版の通報料として一ヶ年分金二拾四錢御送金の向へは毎月一回新版物の御通報致すべく候
△御照會の節は返信用切手を御封入せらるゝか又は往復はかきにて願上候猶御住所と御氏名及御照會の要點は出来る丈け字休明瞭に御書き願ふ
△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋段谷南へ入四側に御座候、振替番號は大阪八七九七番、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には瀛車便又は涼船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可仕候

樋口隆文館發行講談小説之部

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|
| ▲天正幽靈半之丞 同 | ▲天正里太兵衛 同 | ▲天正飯田覺兵衛 同 | ▲天明文珠九助 同 | ▲大久保木曾漫遊 同 | ▲同 東海漫遊記 同 | ▲元和中條兵庫之助 同 | ▲大佐川中條武勇傳 同 | ▲中條兵庫旅日記 同 | ▲後 方丸弘行 同 | ▲豪傑 魔風軍藤太 同 | ▲緒方 姫山の旗揚 同 | ▲天保 浪花の大潮 同 | ▲天保 後の大潮 同 | ▲寛永 春日熊之丞 同 | |
| ▲後日宮島大仇討 同 | ▲後兒玉由利之助 同 | ▲同 後の由利之助 同 | ▲野州悪狐塚由來 同 | ▲天正 悪狐退治 同 | ▲豪傑 松平康之助 同 | ▲近 藤 勇 同 | ▲怪勇 後の近藤 同 | ▲日本 鮫島武雄 同 | ▲後の 鮫島武雄 同 | ◎武田 眞田鬼彈正 同 | ◎三浦 保科槍彈正 同 | ◎同 高阪智惠彈正 同 | ◎後 藥師の梅吉 同 | ◎同 其後の藥師 同 | ◎女 俠龍神お玉 同 |
| ◎女 俠後の龍神 | ◎俠客 唐獅銀治 | ◎同 木曾庄九郎 | ◎磯 畑伴藏秀國 | ◎鐘 畑伴藏旅日記 | ◎鐘 捲自齋巡國記 | ◎龜 井名槍傳 | ◎豪傑 龜井武藏 | ◎劍法 諸岡大天狗 | ◎劍法 岩間小天狗 | ◎劍士 子泥之助 | ◎東軍 川崎東軍坊 | ◎流祖 衣斐丹石入道 | ◎飯 沼鐵牛軒 | ◎剛勇 齋藤傳鬼坊 | |

和山天華	半井桃水	同	同	同	同	羽橋荷香	黒法師霞堤	山岸荷葉	同	雪鷲庵	行友李風	同	同	同	小鳴孤舟	同	同	同	同
□ 靜	□ 贗	□ 武	□ 命	□ 命	□ 命	□ 命	□ 戀	□ 五	□ 後	□ 談	□ 長	□ 小	□ 梅	□ 梅	□ 浪	□ 浪	□ 浪	□ 狸	□ 妻
	造紙	士	續	後	後	後	し	人	者	屋	果	花	花	花	か	か	心	の	罪
子	幣	系	編	編	編	編	仇	娘	敷	敷	經	篇	錄	篇	篇	篇	中	同	同
同	同	同	同	同	同	同	復	同	同	如	花	春	同	同	同	同	同	同	同
花生						南	翠			鬼	冠	秋	園						
□ 小	□ 新	□ 新	□ 閣	□ 閣	□ 浮	□ 浮	□ 池	□ 乳	□ 鱗	□ 思	× 俠	× 俠	□ 浪	□ 浪	□ 浪	□ 浪	□ 浪	□ 浪	□ 浪
車	主	主	の	の	木	木	沼	守	與	は	は	は	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
新	人	主	つ	つ	舟	舟	鯉	の	之	ぬ	ぬ	胡	終	終	終	終	終	終	終
三	後	後	後	後	後	後	助	仙	助	戀	蝶	編	篇	篇	篇	篇	編	編	編

直引割 別特

此目錄の外にも續々と新版發行準備中
 でございませう……

卸直目錄は販賣若くは貸本營業の方に限り郵券三錢送らるれば進呈す

▲印は一貳拾貳錢
 ○印は一貳拾五錢
 ○印は一參拾貳錢
 ×印は一四拾錢

但し卸直は營業用として一時に十冊以上注文の方に限る
 ※送料は一冊六錢三冊迄八錢(内地限)

旭堂南陵講演 歌川國松畫

◎浪士 青地作右衛門

◎後の上總六郎

◎最後 大力牛之助

本篇の主人公青地作右衛門は、雷名天下に鳴りし無双の劍客、荒木又右衛門の最高弟にして多年練磨工夫の結果、枯華微笑の妙境に到達し、可悟不可言の奥義を會得せし一代獨歩の大劍士である。副主人公たる上總六郎、大力牛之助の二名は青地門下の龍虎双壁にして共に一流の師範たるべきの勇士。此三勇士一生涯には千化萬變の起伏波瀾を生じ、神飛び肉動く勇壯事もあれば、魂消え涙墮つ悲惨事もある、演者は御馴染の旭堂南陵子にして挿畫は歌川國松畫伯が、優麗鮮艷の彩筆になれる木版數十度摺の美人畫を以てす、實にこれ、華も實もある近來の好讀物であると隆文館の主人が御請合申す。

全三冊既刊
 各一冊實價三十錢
 送料一冊に付六錢
 以上三冊迄八錢

りな本古稽良最の節花浪は書本

大 阪 浪 花 節 大 會

(刊 既 共 冊 兩 二 第 一 第)

擬似の類書多し御購求の節は樋口隆文館發行の物に御名指ありたし

神戸又新日報
の評に曰く

斯界一方の重鎮たる、岡本鶴治、中川伊勢吉、藤川友春、京山愛昇、浪花節を言葉と節とを分け各自得意の講演を載す一讀三嘆愉々快々高座にこれを聞くに異ならず

入像肖眞寫者演

同不次順者演出

岡本鶴治	中川伊勢吉	藤川友春	京山愛昇	岡本鶴圓
廣澤虎春	淺川三八	吉田久春	京山花丸	中川勢治

冊 一 價 實
錢 拾 三
錢 四 料 送

演題では赤穂義士傳の抜き読みもあれば水戸黄門の漫遊記や仙臺加賀政談や武勇物語、新物、物、櫻井大尉夫人等の物もある

大阪朝日新聞
の評に曰く

大阪名物浪花節の所謂大家なるもの、中川伊勢吉、外九名の講演を速記したる物にして、櫻井大尉未亡人なる新物もあり面白し

演題では赤穂義士傳の抜き読みもあれば水戸黄門の漫遊記や仙臺加賀政談や武勇物語、新物、物、櫻井大尉夫人等の物もある

本書の價值は公平なる左記各新聞の評語にて知られよ

日 本 豪 傑 武 勇 競

松月堂魯山講演
吉田恒松茂挿畫
川上恒松茂挿畫
初篇 ○ 川崎東軍坊
二篇 ○ 衣斐丹石入道
三篇 ○ 飯沼鐵牛齋
四篇 ○ 齋藤傳鬼坊
五篇 ○ 小松一卜齋
六篇 ○ 人見熊之助

極彩色木版畫挿入頗美本
實價○印の物一冊二十五錢○印
の方三十錢
送料一冊なれば六錢三冊迄八錢

本書は日本武術大家の銘々傳にして有名なる、東軍流の元祖川崎東軍坊を初め、丹石流の開祖衣斐丹石入道及び其流を汲める飯沼鐵牛齋、其他、天道流の齋藤傳鬼坊、並に其門下にて出藍の稱を得し、小松人見の兩劍士等が、いとも勇まじき武勇傳なれば、勇を尚び武を好まる、諸君は賣り切れとならぬ内に早く買ひたまへ。

品一下天てしと本古稽の節花浪は書本

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節勇士揃

實價送料共にて一冊貳拾八錢

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節武勇競

實價送料共にて一冊貳拾八錢

浮世亭夢丸演 余部白楊君速記

浪花節俠客揃

實價送料共にて一冊貳拾八錢

柳生重兵衛光吉
織田大炊信勝
卷一 休禪師
犬塚信乃成孝
目 淺田孝子傳
次 高田又兵衛吉次

猛勇磯畑伴藏
中條兵庫之助
卷 佐野武勇傳
目 大久保武藏鏡
次 豪傑自來也
由井正雪

夢の市郎兵衛
祐天吉松
卷 勢力富五郎
目 龍神お玉
次 新門辰五郎
喧嘩屋五郎兵衛

浪花節の稽古本として出来居る物は澤山である。雖も然るに其節は名實相稱はす真に其節となつて居るものは實に鮮い。本書は真正正銘の浪花節であつて、其節調の正確なるは勿論、内容も頗る多様多趣味。愛浪同好諸士の稽古本として、天下品無類の好資料である。論より證據購て見給へ

小川霞堤君 合著 長谷川小信君書
黒法師君

家庭戀しき仇

實價 四十五錢
郵送料 六錢

これは新聞紙上で好評を博し、劇に演じても大入大當を取りました、頗る面白い悲劇的新家庭小説であります。



神戸又新日報記者 雪鷲庵君著
川上恒茂君書

怪談 長者屋敷

これは播州姫路に名も高き、長者屋敷に於ける事實怪談にして、神戸又新日報紙上に連載して大好評を博したるものでありますから、怪を喜び奇を好まるる諸君は、賣り切れとならぬ内に早く購ひたまへ……。



渡邊 默禪君著
川上 恒茂君畫

小説 實女獅子

全三冊 頗美本
實價一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢

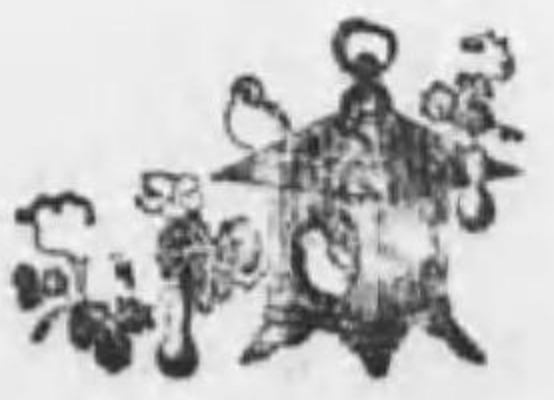
著者默禪子自白ふ、予、從來事實譚なるものに筆を著けしこと數十回に達したるも、未だかゝる大規模の大事實に手を染めたることあらず……實に然り……本書は天下稀有の一女傑が傳記にして、其内容の極めて深く廣きだけ、變幻怪奇の波瀾縦横錯出、幾んど應接に暇なからんとす、乞ふ愛讀をたまへと、隆文館の主人が懇張つて白す。

伊原青々園君著
井川 洗厓君畫

都新聞 迷ひ子

實價一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢

著者青々園君の文は、既に世に定まれる評あり本篇は曾て都新聞に連載せられ、讀者より非常に好評を博せし小説なり、以て内容の如何を察せられよ。



羽様荷香君著 長谷川小信君畫

命

實價一冊 四十五錢
郵送料一冊 六錢

これは新聞紙上にて大好評……又……劇に演じても活動寫真にやつても、各地到る所にて大入大當を取りました、素的に面白い悲劇的新小説であります……。



渡邊 默禪君著
長谷川小信君畫

小説 實七首藝妓

全二冊 頗美本
實價一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢

本書は東京毎日電報に連載して讀者の大喝采を博したる怪小説である、如何に灘伊丹の銘酒とあつても、樽を見た丈では酔ふものではない、兎も角一口……オット間違ッた、兎も角一冊購つて見た上で、巧い拙いの御評判をと隆文館の主人が懇張つて白す……。

小島孤舟君作
長谷川小信君畫

大阪日報
掲載小説
浪がしら

實價一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢
頗美本

これは新聞紙上でも大好評を得、續いて演劇でも活動寫真でも、いづれも非常の大入大當を取りましたる、素敵に面白い悲劇的新小説である。



渡邊默禪君著
井川洗厓君畫

雷鳴六郎
雷鳴六郎後編

全二冊共既刊
實價各一冊金五拾錢
郵送料各一冊金六錢

本書が如何に面白いかと云ふことは讀んだ御方に聞いて貰へば分る、早く後篇を出して呉よ、まだ出ぬか、まだ出ぬかと、やかましく御催促になつて居りましたる愛讀者御待兼のものでございませぬから、どうか賣切れと成りませぬ内に早々御買求めあらんことを願ひます……。

神田伯海講演
高橋舟齋君畫

講演
滑稽揃

全一冊讀切 頗美本
實價 金貳拾五錢
郵送料 金四錢

本書は演者の最も得意とする至極趣味に富める一席讀切物にして、新聞紙上にも好評を博せし一讀抱腹絶倒すべき愉快々の好讀物なり、乞ふ愛讀せられよ。



半井桃水君著
高橋舟齋君畫

探偵
贗造紙幣

全一冊讀切頗美本
實價 金四拾五錢
郵送料 金六錢

水や天、天や水なる太平洋の中央に於て、漁夫が偶然に得し一箇の密閉せる小瓶子の中より、一世を欺罔せる大奸賊の罪惡は、意外にも世間に暴露するに至れり、されど注意深く巧妙に行はれたる犯罪の真相は、一朝一夕にして探り知る能はず、流石に老練なる探偵博士をして如何に慘憺たる苦心をせしむるか、これ一篇の讀みどころである乞ふ愛讀を賜へ。

都新聞記者 井川洗厓君書

白菊御殿
銀杏小路

全貳冊頗美本
各一冊實價 四十五錢
各一冊郵送料 六錢

本書は前年都新聞紙上に連載して大好評を博したる面白き小説である、著者は文壇の元老運塚麗水君、書は新進の妙手井川洗厓君なり、乞ふ愛讀をたまへ。

巖谷小波君序
山岸荷葉君著
鏞木清方君書

小五人娘

全一冊 美術木版書挿入
實價 金四拾五錢
郵送料 金六錢

山岸荷葉君の文は、既に世に定まれる評あり、本書は、子が獨得の麗筆を揮つて、可憐愛すべき五人娘の運命を叙せるもの、加ふるに鏞木清方子が丹精を凝せる、木版極彩色數十度摺の美人書を以てす、眞にこれ、文藝裝美無比の好讀物!!!

東海亭金龍講演 三木花夫筆記

客俠伊丹の與之助
客俠伊達のお峯

頗美本
實價各一冊 三十五錢
送料各一冊 六錢

これは御馴染の東海亭金龍子が、最得意とする義俠傳でございますから、その面白い事は御受合いたします。



浮世亭夢丸講演 余部白楊速記

客俠時宗五郎兵衛
客俠後の時宗

特價一冊に付 金三拾五錢
郵送料(一冊なれば) 金六錢
(二冊なれば) 金八錢

エ、これは御馴染の浮世亭夢丸が、最も得意とする讀物でございます、世に名も高き時宗五郎兵衛の、血あり涙ある一代の浮沈をば、縦横自在に話説したものでございますから、其内容の面白いことは、論より證據だ讀で見知りたまへ。

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記
鈴木錦泉挿畫

初編 眞田鬼彈正
二編 保科槍彈正
三編 高阪智惠彈正

特別實價一冊 金三拾錢
二冊に付 金六錢
三冊まで 金八錢

(頗美本)
これは御馴染の玉秀齋翁が、古來有名なる武田家の三彈正、眞田鬼彈正、保科槍彈正、高阪智惠彈正……此三豪傑の勇ましさ一代記を懸河流水の快辯を揮つて、縦横自在に演述したのでございますから、まことに近來の好讀物でございます。

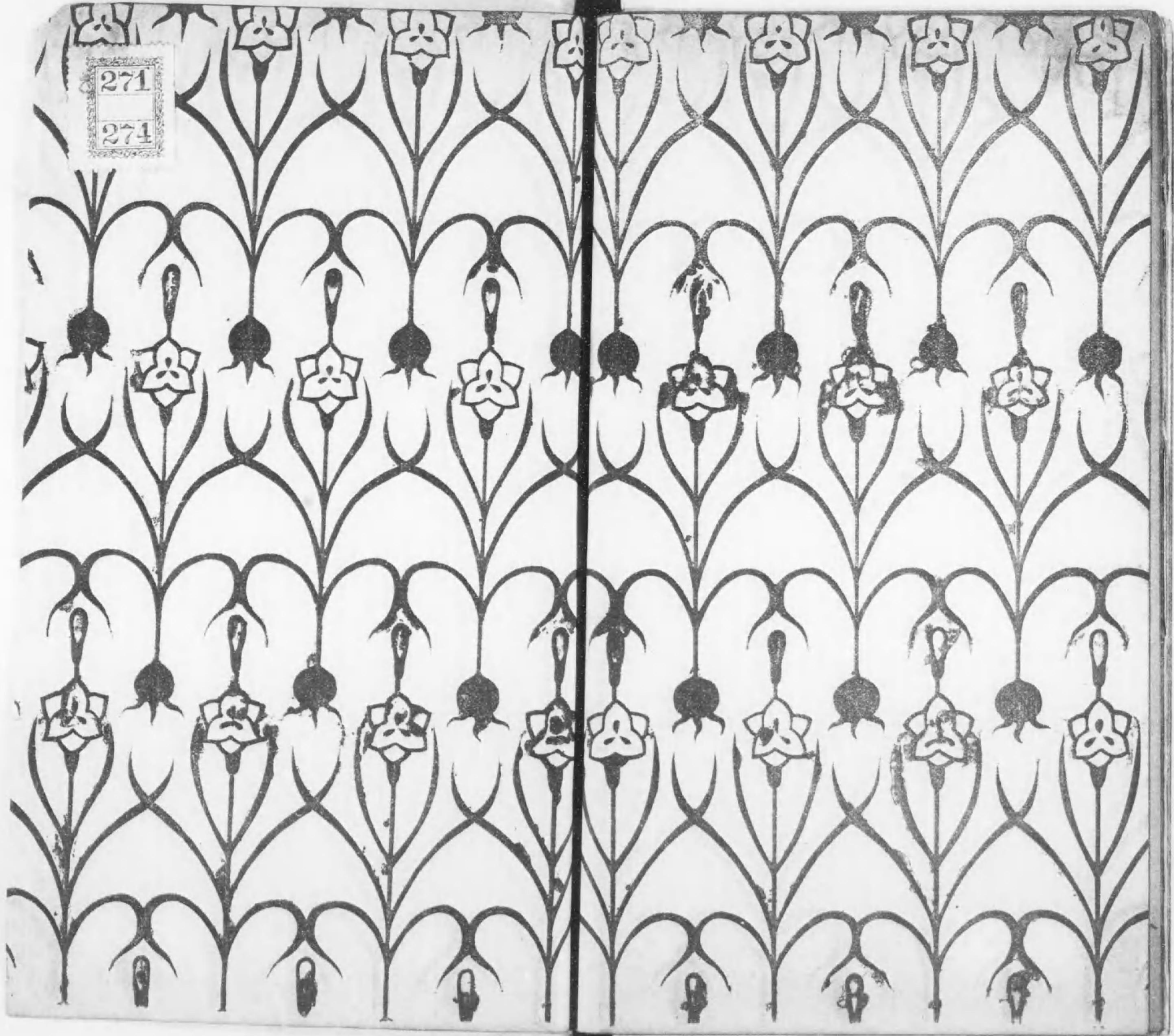
神田伯海講演 又新社員速記

討仇 摩耶山靈驗記

頗美本全書冊
實價 三十五錢
郵送料 六錢

これは他に類と似寄り物の無い、演者獨創の仇討物でございますして、攝州兵庫に名も高き摩耶山の絶頂に在る、叨利天上寺に祀りある觀世音菩薩の御靈驗記でございますから、どうか御買求めの程を御願ひ申します。





271

274

終

